コロナ禍の大学教育
－島根県立大学松江キャンパスの取組－

University Education during the Coronavirus Crisis
－The Approach of the Shimane Prefectural University Matsue Campus－

飯島久美子　飯塚由美　石川美和　岩田英作　内山仁志
梶谷朱美　加藤暢恵　菊野雄一郎　岸本 強　木内公一郎
工藤泰子　古賀洋一　小林美沙子　小南理恵　小柳正司
齊藤一弥　塩谷もも　髙橋 純　髙橋泰道　竹田茉耶
Dustin Kidd　時津 啓　中井悠加　西村健一　福井一尊
藤居由香　藤原映久　藤吉知美　前林英貴　増原善之
松浦雄二　マユーあき　宮下裕一　矢島毅昌　山田洋平
山根繁樹　山村桃子　山村仁朗　吉村 勉　渡辺一弘
渡部周子　渡邉寛智

キーワード：新型コロナウイルス感染症、遠隔授業、Teams

1. はじめに

副学長　岸本　強

令和２年度（2020 年度）は未曾有の出来事があり、正に、今も直面している状態である。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大問題である。

島根県立大学松江キャンパスでは、この災禍非常時にどのような対策を講じて大学運営をしてきたのか、大学教育の側面からそれぞれの教員の取組についてまとめ、今後の教育の可能性も含めて記録しておくことにした。

“2020 年は東京オリンピックの年”、とはならなかった。日本におけるコロナウイルス災禍は、2020 年１月 20 日に横浜港を出港したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス（DP）号の香港下船の 80 代男性から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染が確認され（２月１日）、その後、２月３日に横浜港に帰港した DP 号全船員・乗客の検疫実施から始まった。

松江キャンパス所在地・松江市においても、４月９日に１例目患者が発表された。しかも 10 代女性ということで緊張が走った。１週間後には 14 例目にも達する勢いで、「クラスター」という言葉も初めて聞くことになった。

COVID-19の感染力と感染後の症状、感染者発症後の対応は、危機管理体制を敷かねばならない最重要課題として大学を直撃した。通常であれば「危機管理委員会」で対応するところだが、今回は学科長まで委員となる「運営委員会」に加え、保健管理部門も加えた「拡大運営委員会」を「新型コロナウイルス感染症対策検討会議」として位置付けた。

先ずは、4月の入学式、オリエンテーション、健康診断と続く毎年度当初の行事の取扱いと、春学期授業が行えるかどうかという難課題を解決することだった。連日、多い日は複数回も文部科学省から届く現状報告と文科省方針、各大学の対応策依頼の通知を熟読した。「関東の大学はしばらく授業しないそうだ。当分の間は遠隔授業なるものをやるらしい。」このような怪情報もあったように、全国の大学が困惑していた。短期間で方針決定していかなければならない状況下であったが、入学式は規模を最大限縮小して体育館で行い、オリエンテーション、ガイダンスは分散させ、無事諸行事を終えた。

最大の課題は春学期の授業をどうするかであった。4月7日の授業開始予定日は2週間延期し、県内外から来松する学生の健康観察期間の設定と授業方法対策期間にすることにした。この間に、今回、起死回生の一打となったのはMicrosoft Teams利用を短期間のうちに実現できたことである。本学のOn-Line環境やWi-Fi環境もある程度整っていたことが幸いした。特筆すべきは、松江キャンパス教職員複数人が、Teamsを指導できるレベルにあったことと、全教員への講習を全面的に行ってくれたことだ。お蔭で、メール対応、オンデマンド対応でやむなしとしていた状況から一気に同時双方向性でのOn-Line授業態勢が整った。4月21日授業開始日直前の対応であった。

本キャンパス教員の授業取組については、それぞれの教員からエピソードも含めて報告したい。多くの非常勤講師の先生方には、日程的にも内容的にも無理難題をお願いすることになったが、状況を汲み取っていただき、適切なご判断の下に授業を行っていただいた。心から御礼申し上げたい。

今年度の学生は、この先コロナ世代と称されることになろう。大学としては、コロナ災禍の状況下であっても学生の学修の質は保証しなければならない。今回新たに獲得した授業形態は、少なからずこれまでの授業方法を凌駕する効果もあった。「禍を転じて福と為す」。新たに開発された効果的授業方法をより洗練し、対面授業にプラス活用することで、学生には「新教育方法元年生」と呼ばれるくらいの価値を付けて、卒業させてやりたい。

２．経　緯

人間文化学部長　岩田英作

１）令和２年２月～３月

２月に入り、予定していた海外研修の中止が相次ぎ、新型コロナの足音が本学にも少しずつ届くようになった。３月には卒業式や次年度の入学式の実施をめぐって議論が交わされ、授業や公開講座をどうするのか、寮の感染予防をどうするのかなど、年度末の慌ただしさにプラスして、地方のこの小さな大学もにわかに落ち着かなくなってきた。

2 月 5 日　夏の CWU 研修を中止。
2 月 12 日　3 月予定のラオス研修を中止。
2 月 27 日　卒業記念パーティーを自粛するように大学本部から要請。
2 月 28 日　学外に開放している児童図書館「おはなしレストランライブラリー」を 3 月 2 日～3 月 31 日まで休館。
3 月 2 日　全学コロナ対応が話し合われ、松江キャンパスは、卒業式については新短大部として初となることや地元の学生が多いことから工夫して行い、入学式については実施の方向で検討。
3 月 18 日　全学コロナ対応が話し合われ、次年度の公開講座や学生寮の感染予防などについて協議。

２）令和２年４月

４月 21 日に授業開始となるまでの 20 日間は、連日コロナ対応に追われ、この１年間を振り返ってみても、最も密度の濃い「コロナ対応の 20 日間」だった。その中でも、議論の中心は、授業をいつのタイミングで、どのような形で実施するかだった。未知の敵を相手にしながら、観察期間の必要性や、一方で授業回数の確保も気にしつつ、議論の末、４月 21 日開始に定まった。そして、さらなる問題は授業の実施形態だった。今でこそ、「対面授業」「遠隔授業」の用語を当たり前のようにして使っているが、令和２年４月当初、遠隔授業を具体的にイメージすることは多くの教員にとって難しいことで、対面と遠隔の対の概念そのものを持ち合わせていなかった。ましてや Zoom や Teams の使用方法や違いについてなど知る由もなかった。

この難局をどう乗り越えていくか、多くの教職員が頭を抱える中で、情報機器の操作に詳しい一部の教職員が積極的に旗を振り、進むべき道を示してくれた。本学は Office365 の環境が整えられており、運用のしやすさや安全面などから Teams に統一して授業を行うことになった。そうと決まってから

の動きは早かった。遠隔授業の実施に向けてプロジェクトチームが発足し、チーム主催で Teams についての講習会、さらには授業直前の Teams 練習会が実施された。学部学科を問わず松江キャンパスの教員すべてが参加し、21 日からの遠隔授業に備えた。

遠隔授業が一斉に始まってから、もちろん順調に事が運んだわけではない。音声が途切れたり、動画がうまく作動しなかったり、試行錯誤の連続と言ってよかった。学生の側も、ノートパソコンを所有する学生もいれば携帯のみの学生もいるし、アパートの Wifi 環境も様ざま、特に Teams の操作が苦手な学生にとっては大きなストレスだったに違いない。

そうしたことは当然あったものの、本学松江キャンパスは、比較的すみやかに遠隔授業のかたちを作り上げることができた。「コロナ対応の 20 日間」は、本学にとって、新しい大学教育のスタイルを生み出す 20 日間であった。その牽引役としてプロジェクトチームの働きがあり、その働きにすぐさま応じて慣れない遠隔授業に備えたキャンパス全体のまとまりがあったことは、ここにしっかりと書き記しておきたい。

4 月 1 日（水） Office365 の環境が学内に整備されていることから Teams を使った遠隔授業の方針が定まる。その他フィールドワークを伴う授業のバス利用・宿泊の中止などについて協議。

4 月 2 日(木） 松江キャンパスは 4 月 14 日授業開始に決定（後に 4 月 21 日開始に変更)。

4 月 3 日(金） 公欠の扱い、オープンキャンパスと大学祭の中止について協議。

４月８日(水） 遠隔授業の実施に向けてプロジェクトチーム（高橋泰道・西村健一・内山仁志・松井洋司）を立ち上げることにする。

４月９日(木） Teams による授業実施について通信環境など具体的な検討に入る。その他連休の学生の過ごし方など協議。

４月 10 日(金） 松江キャンパスは 4 月 14 日からオリエンテーション・履修登録開始、21 日から遠隔授業開始、5 月 11 日から一部対面授業開始に決定。遠隔授業プロジェクトチーム主催で、Teams の講習会を松江キャンパス全教員を対象に実施。

４月 12 日（日） 学生のアルバイト状況等について協議。

４月 13 日（月） オリエンテーションの進め方、学生の夜のアルバイトの自粛、体調管理等について協議。

４月 17 日（金） 全教員を対象に Teams の直前練習を 8 グループに分けて実施。高橋泰道・高橋純・西村健一・内山仁志・中井悠加の 5 名の教員が指

導にあたる。
４月 21 日（火）　Teams による遠隔授業を一斉に始める。

３）令和２年５月以降

４月 21 日の遠隔授業開始とほぼ時期を同じくして、新型コロナウイルス感染拡大防止に係る学内の対応を一元的に管理・決定するため、運営委員会メンバーに、保健管理委員長と保健室担当者を加えた計 15 名で構成した「拡大運営委員会」を設置した。

島根県立大学の浜田キャンパス、出雲キャンパス、松江キャンパスを統括する「新型コロナウイルス感染防止対策会議」において県立大学全体の大方針が決定され、それに基づいて、松江キャンパスでは「拡大運営委員会」で具体的な対策を打った。

令和３年３月時点で、松江キャンパスでは、幸いなことにひとりのコロナ感染者も出ていない。

５月 23 日（金）　非常勤講師対応について（遠隔授業依頼）
５月 22 日（金）　教務日程/時間割について
５月 27 日（水）　クラブ・サークル活動・学食の再開について
５月２日（火）　対面授業の実施について（教室準備等）
６月 10 日（水）　一部対面授業再開（6/15～）について
７月　１日（水）　サークル活動・アルバイト等について
９月　２日（水）　秋学期の方針について
９月 29 日（火）　アドミッション業務における対応について
12 月 16 日（水）　年末年始の寮運営について
２月 10 日（水）　学生の PCR 検査について

３．事務室の対応

事務室長　吉村　勉
管理課長　石川　美和
教務学生課長　飯島久美子

海外で発生した未知のウイルスが、地方の小さな大学にまで影響を及ぼすとは予想もしていなかった。事務室では学生の安全確保と、教育・研究活動の支援を行なうため、学内・法人本部・外部講師や関係機関との連絡調整を行なった。ここにその一部を記録することとする。

１）各センター・委員会の対応

授業運営や学生生活等について各委員会にて対策を検討し、以下の対応を行なった。

・教職センター：実習・教員免許更新講習の日程・会場調整等
・教務委員会：教務日程の変更・対面授業ガイドライン制定等
・学生生活委員会：クラブ・サークル活動ガイドライン制定等
・キャリア委員会：Web 企業説明会開催等
・FD 委員会：Teams 研修会開催等
・保健管理委員会：学生生活ガイドライン制定・健康チェック表作成等
・地域連携推進委員会：公開講座ガイドライン制定等
・図書館（メディア図書員会）：オンラインビブリオバトル開催等

２）事務室の対応

県の補助金や後援会補助、大学予算等により、以下の対応を行なった。

（１）学生支援

・家計急変や年収 590 万円未満の世帯の学生に対する授業料減免
・アルバイト先の休業・解雇に遭った学生に対し、学内アルバイト創出
・後援会より全学生に１万円給付
・学食停止に伴う弁当手配及び一部キャッシュバック・県大屋台実施
・寄附受付と学生への配布（米等の食料品・マスク）

（２）遠隔授業対応

・遠隔授業に関する設備整備（カメラ・ヘッドセット・教員用ノート PC・学内及び寮内の Wifi 環境強化等）
・遠隔授業に対応するため、希望者にポケット Wifi 貸与
・遠隔授業のための消耗品代として、全学生に１万円給付
・パソコンや Wifi 環境のない学生に、学内施設を開放

（３）感染予防対策

・教室等の換気効率を高めるため空調・換気設備を整備
・教室の感染予防対策（パーティション・消毒薬整備）
・手洗い自動化設備整備
・寮の感染予防対策（ベッドのカーテン整備・自習室パーティション設置・浴室改修　※浴室改修工事はＲ３年度着手予定）

授業実施に際しては４月に緊急事態宣言が発令されたことから、春学期は４月 20 日（月）まで休講、4 月 21 日（火）から遠隔授業を開始した。教務学生課では非常勤講師の遠隔授業支援として、科目ごとのチーム作成及び講義資料の配信等のサポートを行なった。また、当初 5 月 11 日（月）から対面授業を再開する予定が、感染拡大状況により遠隔授業期間が延長された際は、非常勤講師への連絡・調整及び、6 月 15 日から再開する対面授業の希望調査・時間割編成・学生の待機場所確保等を行なった。

秋学期も引き続き遠隔授業を中心に実施し、年末年始の帰省明けである 1 月 18 日（月）から一部の対面授業を再開した。

未知のウイルスとの闘いは、未だ収束の兆しが見えていない状況ではあるが、大学は知識を詰め込むだけではなく、自主的に興味のある分野を探求したり、サークル活動やボランティア活動等を通じて、多くの友や地域の方々と交流を行なう場でもある。学生が少しでも多くのキャンパスライフを体験できるよう、事務室としても支援を行ないたい。

４．授業報告

１）短期大学部保育学科

科目①「心理学」
（保育学科及び総合文化学科 1 年春学期選択 2 単位 67 名履修）
科目②「心理学」
（保育教育学科及び地域文化学科 1 年秋学期選択 2 単位 86 名履修）
科目③「教育心理学」
（保育学科 2 年春学期選択必修 2 単位 42 名履修）
科目④「保育情報活用法Ⅰ及びⅡ」
（保育学科 1 年春・秋学期選択必修 2 単位 41 名履修）
科目⑤「情報機器の操作Ⅰ及びⅡ」
（保育教育学科 1 年春・秋学期選択必修 2 単位 41 名履修）
科目⑥「人と地域の調査法」
（地域文化学科 2 年春学期選択 2 単位 26 名履修）

飯　塚　由　美

1. 講義形式授業について

「心理学」「教育心理学」は全てが遠隔授業（リアルタイム）となり、Teams の教材を新たに作り直したため、かなりの時間を費やした。既存のものでは間に合わず、毎回毎回の準備、加えて遠隔授業中や授業後も学生への対応に多くの時間を割くこととなった。特に 1 年生はパソコン自体の保有率が低く、スマホや iPad などの受信端末のみで授業を受けようとするので、講義をうける以前のインフラ（情報機器の整備）の問題が大きく影響した。またパソコンを自分で持っていたとしても、その扱い（文字を打つなどの単純なタイピングではなく、いわゆる操作）に慣れていない。秋学期の受講生や 2 年生については、多少機器の扱いに慣れてきたので、授業を受ける際の自分の Wi-Fi などの受信環境の悪化を除けば問題は無くなってきた。

2. 対面と遠隔のハイブリット形式の授業

情報系のパソコン操作を必要とする演習（保育情報活用法Ⅰ及びⅡ、情報機器の操作Ⅰ及びⅡ、人と地域の調査法）については遠隔を含む、3 密を避けた形での対面授業で行われた。受講人数によっては、2 部屋を使用したが、この大学の複数の PC 室については、全てが統一的な整備されておらず、インストールアプリや機器設備が全く揃っていない。中には、今後更新や修繕をしない

部屋もあり、授業で使うには非常に使いづらい。

コロナ感染防止対策以前では、大学内のマルチメディア室にしかない特殊なアプリの設置でも収容人数的に問題がないために 1 室で行えるが、今の状況下では非常に差し障りがある。また、今後、コロナ対応が必要なくなったとしても、情報機器の整備や操作環境の向上については継続すべきである。

小中高校と国としても力を入れ、より情報化推進の方向で向かっている中、本学としての改善を求められるところである。

科目①「健康スポーツⅠ」
（保育学科 1 年春学期必修 2 単位 41 名履修）

梶　谷　朱　美

1. はじめに

短期大学部の 1 年生が受講する基礎科目「健康スポーツⅠ」では、学生がスポーツを通して仲間と交流し、スポーツの特性（行う・見る・知る・支える）を充分に味わうことで生涯にわたってスポーツやダンスに親しみ、健康で文化的なくらしを実現していくことが目的である。本学に入学した 1 年生が対面で力いっぱいスポーツを楽しむこと自体が本科目の目的であり新たな仲間づくりの一助にもなっている。従って、今年度は遠隔授業だけでは本目的が達成できないことから教務委員会での審議を経て、15 回の授業のうち春学期に 5 回の遠隔授業を行い、対面授業が可能になった秋学期に 10 回実施するという変則的な授業形態をとった。ここでは、遠隔授業で行った「健康スポーツⅠ」の内容と秋学期に実施した対面授業での新型コロナウイルス感染症予防対策を中心に述べていく。

2. 健康スポーツⅠの内容

1）歩いて、歩いて、写真を写そう（第１回～第２回の内容）

図 1　歩いた先に名峰大山の姿が現われる！

学生は、不要不急の外出自粛の方針により春学期早々遠隔授業が開始され、自宅や寮、アパートでの学生生活が始まる。とりわけ、一人暮らしを始めた 1 年生が適度な運動やバランスのとれた食事、質のよい睡眠などを意識して生活リズムを確立していくことは困難だろうと予想された。また、仲間と会えないもどかしさや先が見えない不安で気持ちが鬱々となることも推察された。

そこで、健康スポーツの第 1 回目と 2 回目は、家から外出するように指示を出し、運動の習慣化を図るためにウオーキングを授業内容とする「歩いて、歩いて、写真を写そう」を次のように設定した。

【期日】4 月 24 日（金）と 5 月 1 日（金）の 2 回

【目的】①自分の体力や能力に合わせた運動習慣の確立を目指す。

②運動する心地よさの体感と居住地域の状況把握を行う。
③写真掲載による学生同士の交流を図る（図 1、図 2、図 3 参照）

図 2　斐伊川土手で草を食べる羊に出会う

【方法】①1 単位時間（90 分）内で歩けるコースを居住地域で見つける。印象的な景色を撮影し担当者へ送信する。
②1 回目と 2 回目は歩くコースを変える。2 回目は歩き方についても、胸を張り、腕を振って汗ばむ程度のスピードで歩くように指示を出す。
③マスクの着用やウオーキング後の手洗い、うがいなどの感染対策を徹底する。

2）公開！私のトレーニング（第３回～第５回の内容）

ウオーキングの授業を行うことで運動へのきっかけづくりを行った後、3～5 回目は学生の体力や興味関心、健康課題に合わせた体力づくりを目的とするトレーニング等を継続させた。学生は YouTube などから体操やダンス等を見つけ 3 週間継続し、その効果や効用を仲間へアピールするようにレポートにまとめ提出させた。その中から特徴的な実践を遠隔授業で紹介し皆で共有した。

表１　学生が継続して取り組んだトレーニングやダンスの紹介レポート

公開！私のトレーニング

- **私がしてみたダンス：『2週間で10kg痩せるダンス』**
- **選んだ理由**：このダンスは、私が高校3年生のときに、体育祭の応援合戦でしました。私は、ダンス・衣装・デコレーションの3つのパートの中でダンスの担当だったため、体育祭準備期間は毎日この『2週間で10kg痩せるダンス』をしていました。本当に疲れるダンスですが、高校生に戻った気分にもなれるかなと思って決めました。そして、保育学科のみんなにも是非やってみてほしいと思ったからです。
- **効果**：YouTubeに載っているものはほとんど3分間ですが、私は最初から3分すると相当しんどいと思い、初日は1分程度、2日目はもう少し長くという感じで取り組みました。1限から5限までびっしり授業がある日は、長くすることはできませんでしたが、それ以外の日は頑張れました。無理のない範囲ですることで続けることができます。結果、運動不足が解消されたり、朝起きるのが辛いという日が減りました。筋肉痛が少し辛かったですが、良い結果となりました。
- **感想**：「コロナ太り」という言葉をよく聞きます。1日中パソコンと向き合い、運動をしないというだらしない生活を変える良い機会でした。自粛となるとどうしても運動が欠けます。学校がある日は学校まで歩くか、自転車をこぎますし、友達と遊んだ時もなんらかの形で運動をします。家から出ることができない生活は初めてで、ストレスから多く食べてしまったり、夜更かししてしまいがちです。実際わたしもそうでした。健康スポーツⅠの課題が出た日から「2週間で10kg痩せるダンス」を実施し始めたのですが、運動の良さを実感することができました。人が生きていく中で、「睡眠」「食事」「運動」はどれも欠かせてはいけないと気づけました。私が部屋でこのダンスをしていたら母も入ってきて、何回か一緒にしました。運動を通して、親子の仲も深まりました。
- YouTubeで「2週間で10kg痩せるダンス」を検索して、音楽に合わせて是非やってみてください。音楽があることで、苦痛感をあまり感じることないのがこのダンスのいいところだと思います。おすすめです！
- 参考：https://www.youtube.com/watch?v=QPgHgE1jgBc

3)学生の感想と考察

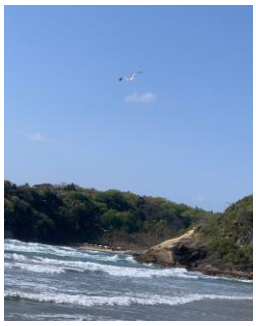


図 3 日本海の風を感じて歩く

入学して部屋に引きこもっていました。ウオーキングに出かけ撮った写真を LINE で共有することで仲間と交流することができました。私は体を動かすことが苦手でスポーツをすることも嫌いでした。授業を通して、ウオーキングに出かけたりストレッチを続けたりとおうち時間が増えたからこそできることもあるのだと気づくことができました。また、外に出る機会が減り暗い気持ちになっていた時に外の空気を吸い、ウオーキングをして体を動かしたことで心も体もリフレッシュすることができました。この経験から体を動かすことは心や気持ちなどの自律神経にも良い影響を与えるのではないかと考えるようになり現在も続けています。自分で考えた運動メニューは、何だか愛着が湧いて、暇な時間をみつけてはやっています。おかげでこのコロナ禍に負けない体作りにつながり健康に過ごせているのだと感じています。(健康スポーツⅠ 学びの記録から抜粋)

学生の学びの記録から、コロナ禍で運動不足になり、それに伴う体重増加、体力低下、睡眠不足（眠りが浅い）に悩まされていることが分かった。また、人と会えないことで部屋に引きこもり気持ちが暗くなり意欲が減退していることも理解できた。そのような学生にとって、春学期は 5 回の遠隔授業ではあったが新入生の運動習慣づくりへのきっかけとなり、心の健康を維持することにもつながっていた。一方、秋学期には体育館での対面授業を再開し、バスケットボール、ソフトバレーボール、卓球、バドミントンなどの多様なスポーツを全員で楽しんだ。10 回の対面授業では欠席は一人もなく運動する心地よさを満喫していた。最後にその対面授業での独自のコロナ対策を述べていく。

3. 秋学期の新型コロナウイルス感染症予防対策

1)レポート「私の新型コロナウイルス感染症対策」の提出と紹介

対面授業を再開するにあたり、学生が全員でスポーツを楽しむためには学生自ら自分のくらしや個人差に対応した感染症対策を実践することが大切だと考え、「私の感染症対策」というレポートを提出させた。そして、それを 10 回の授業の始めに数人ずつ繰り返し紹介し自覚を促すように指導した。

2) 新型コロナウイルス感染症対策チェックリストの記入と実践

本授業では、起床時、移動～授業前、授業中、授業後～帰宅後という 4 段階の詳細なチェックリストを作成し、体育館アリーナに入る前に記入、提出させると同時に検温、消毒を行い、マスク着用と換気を徹底し授業を行った。

読み聞かせの実践
（保育学科 2 年春学期選択 2 単位 35 名履修）

菊野　雄一郎

１．はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）によるパンデミックは、日本を含む世界の大学教育のあり方を一変させた。多くの大学や教職員は今も尚、テクノロジーを活用し、学生の学びを維持、更には発展させるために試行錯誤を重ねている。本報告では、COVID-19 流行による危機的状況（以下、コロナ禍）において筆者が 2020 年度に試みた大学教育方法の一端を紹介する。

現在では、対面、遠隔（オンライン）、ハイブリッド型授業等といった用語が当たり前のように飛び交っているが、2020 年度 4 月初旬の時点では、対面授業以外の選択肢は我々（少なくとも筆者）にはなかった。しかし、2020 年度の 1 年間を通して多様な形態の授業を試み、それぞれの形態の可能性や限界を感じてきた。本報告では、特に試行錯誤を重ねた「読み聞かせの実践」を取り上げながら振り返る。

２．コロナ禍における読み聞かせの実践の壁と試み

従来の読み聞かせの実践は、本学内の絵本専門図書館「おはなしレストランライブラリー」を学習の拠点とし、絵本の選定と読みの練習を重ね、大学近隣の幼保園での実践、子どもを対象に読み聞かせを実践する授業科目である。学生（特に保育者を目指す学生）にとって読み聞かせの実践の大きな魅力は、幼保園での実践や「おはなしレストランライブラリー」において多くの絵本と触れ合い、絵本の読み聞かせについて学生間、学生教員間で協議できることである。しかし、授業開講当初の 4 月時点では、徹底した COVID-19 対策のため、幼保園での実践が中止、6 月までは「おはなしレストランライブラリー」にて絵本の選書をすることさえ出来なかった。そのような状況下において授業担当教員間で協議を重ね、後述する授業方法を試みた。

Teams によるオンライン授業が主であった春学期では、第一に学生の読み聞かせの実践を行う機会を確保するため、オンラインによる読み聞かせの実践を試みた。授業前に学生がスマートフォン等の端末のカメラを用いて動画

撮影を行い、絵本（当初は原則、学生の手元にある絵本を使用した）の作品解釈と動画を提出し、提出された動画を授業前に教員が Stream へアップロードし、授業当日、Teams、Forms、Stream を併用する形で読み聞かせ動画を視聴、グループ協議を行う方法をとった。手順の大枠は以下の通りである。なお、不特定多数への動画データの拡散を避けるため、Stream のみによる期限付き視聴とした。

【授業前】

1. 学生が自宅で動画撮影
2. 学生が動画と作品解釈を Forms にて提出
3. 教員が Stream に動画をアップロード

【授業当日】

1. Teams によるリアルタイムオンライン授業
2. 学生が授業チーム内のチャネルへ移動（6～7 人の小グループをチャネルに分けた）
3. 学生は Stream へ移動し、動画を視聴（図 1）
4. 学生が Forms に感想を書く（図 1）
5. チャネルの音声通話を用いたグループ協議
6. グループ協議の発表
7. 教員コメント

図 1　Forms と Stream を併用した読み聞かせ動画視聴とコメント入力画面

上述した方法を 4 月から 6 月末まで採用した。6 月末から 8 月は対面実践の必要性を考慮し、2、3 グループごとに分散来学させ、対面での読み聞かせ実践を行った。その際、来学しないグループについては教員によるわらべうたや絵本の紹介、オンライン読み聞かせ等を同時に実施した。

オンライン読み聞かせ実践には、聞き手が複数回動画を視聴できる、読み手にとっても動画を記録として残せる、就職活動等で遠方にいる学生も欠席することなく受講できる等のメリットがあった。しかし、動画撮影をする際、聞き手の表情や反応等をみながら読み聞かせをすることができない等の限界があった。特に、子どもたちの純粋な反応を感じながら読み聞かせをする学びができなかったことは大きい。学生の授業アンケートでも、「対面の方が読み聞かせがしやすかった」、「子どもたちの前で実践をしたかった」等があった。以上より、今後のコロナ禍においては、COVID-19 の徹底対策をしつつ、対面、オンラインそれぞれのメリットを適宜採用するハイフレックス、ブレンド型等のハイブリッド型授業を試みたい。

科目①「教育実習指導」
（保育学科 2 年通年選択 1 単位履修者 42 名）
科目②「教育実習」
（保育学科 2 年通年選択 4 単位履修者 42 名）

小　林　美　沙　子

1. はじめに

今回、取り上げた授業は、幼稚園教諭二種免許状を取得するための実習科目である。科目①は、科目②の幼稚園における本実習の事前・事後指導の科目として位置づいている。教育実習は、松江市内を中心とする幼稚園や幼保連携型認定こども園等において 6・9 月の各 2 週間、合計 4 週間おこなわれる。しかし、今年度は COVID-19 の影響を受け、実習期間の変更、遠隔を中心とした事前指導の実施等、従来とは異なる困難さの中で進められた。

2. 授業の実施状況

1)実習期間について

今年度がスタートした 4 月初旬、COVID-19 の感染拡大に不安を抱きつつ、当初の予定通り、実習を行うこととなっていた。しかし、4 月下旬頃、政府による緊急事態宣言の発令、松江市内での感染者の確認などを受け、実習協力園において実習生の受け入れが困難な状況が生じた。そのため、急遽、実習期間の変更や学外実習の実施に向けた COVID-19 対応マニュアルの作成等が進められた。今年度中に実習を行えないかもしれない状況も考えられたが、実習協力校の「後進を育てていく」という思いに支えられ、9 月の 4 週間に実習期間を設定することが可能となった。ただし、COVID-19 の感染拡大と就職活動との両立のため、12 月初旬まで実習期間が延長した学生もいた。

2）授業内容の工夫

実習期間の変更が落ち着いた 5 月中旬頃、本格的に科目①の授業を開始した。授業は、事前指導 7 回（前半 4 回を遠隔、後半 3 回を対面）実習終了後に事後指導 1 回（遠隔）の合計 8 回で行った。

（1）授業内容の精選

科目②で学生は、子ども達の前で保育者として指導案に基づく保育実践を 1 回以上行うことになっている。そのため、科目①において、事前に指導案

の作成や保育実技の基礎を習得する必要がある。遠隔授業の実施に伴い、これらをどのように学生に習得させるのか、授業内容の精選を行った。遠隔授業では、実習心得や指導案作成の基本を理解すること、手遊びなど保育技術のレパートリーの向上を目指した。対面の授業では、遠隔の授業を基に、指導案の作成とそれに基づく模擬保育を行い、理解の深化を目指した。

図１：対面により模擬保育を行う様子

※3 密回避、マスク着用等、対策の上で行った。

（2）配布資料や実施方法

遠隔授業での配布資料は、PPT を用いて作成した。また、授業の始めに 1 回分の授業の流れと前回の授業の振り返りを行った。遠隔の授業では、学生の反応や理解度を把握することが難しい。そのため、授業後の個人学習がしやすいように、端的な資料で理解しやすく、何度も聞くことで意識することが出来るように工夫した。遠隔授業でのグループワークは、Teams の会議機能を活用し、グループごとにチャネルを作成した。事前に調べた手遊びや教材を学生同士で実演をしながら紹介をし合った。普段の遠隔授業では、カメラ機能を off にしていることが多いようで、学生同士の顔が見えると、「久しぶり～」と嬉しそうに笑顔で会話をする姿も見られた。

3）学生の思い

（1）実習への不安

学生にとって、学外での実習は通常でも大きな不安を伴うことが多い。今年度は、実習期間の変更、COVID-19 への感染リスクと対策、就職活動との両立など様々な不安が学生たちを襲った。そのため、個別指導も行った。

（2）子どもと過ごす喜び

実習終了後、学生たちは「幼稚園実習すごく楽しかった！」と笑顔で伝えてくれ、子どもたちと過ごした時間の喜びを感じているようであった。4 週間という長い実習期間についても、子どもの姿の変化やかかわりの深まりを感じ、保育者としての魅力をより感じる学生もいた。

3. まとめ

今年度の授業を実施する中で、改めて「保育者を育てる」という保育者養成校の授業は、様々な人との繋がりや支えの上に成り立っていることを感じた。今後も学生が保育者という仕事のやりがいを感じ、主体的な学びが実現できるように授業を工夫していきたいと思う。

科目①「保育原理」
（保育学科 1 年春学期必修 2 単位 41 名履修）
科目②「保育者論」
（保育学科 1 年春学期必修 2 単位 41 名履修）
科目③「教育保育課程論」
（保育学科 2 年春学期必修 2 単位 42 名履修）
科目④「教育方法論」
（保育学科 1 年秋学期選択 1 単位 41 名履修）
科目⑤「保育内容総論Ⅱ」
（保育学科 2 年秋学期選択 1 単位 43 名履修）

渡　辺　一　弘

1. 春学期の遠隔授業（単独科目）の授業スタイル と反省点

2020 年度春学期に遠隔授業（単独科目）を行ったのは、基本的には講義科目が中心である。

筆者の遠隔授業（単独科目）の授業スタイル の流れは、以下のとおりである。

①配付資料（Ｂ５もしくは Ａ４サイズ）を前日までに全受講者にメールの添付ファイルで送付する。

②それと同時に Teams のファイルに同じ物を入れて置く。

③Teams で出席を取った後、テキストを熟読する時間を取り、その後、投稿欄で資料についての説明を行い、問いや質問の受け答えをする。

④Teams が上手く機能しない学生が出た場合は、メールで代替する。

このように、基本的な授業の流れとしては、一斉授業の講義の一部を遠隔にしただけのものであった。

その結果、反省点として、上記④の場合、メールでの指示が大量であると批判が出たため、Teams が不具合な学生に対しては、Teams のチャットで対応することとした。また音声機能については、対応できない学生がいたため、春学期は、敢えて使用しなかった。さらに、時間外の個別の質問等については、主にメールで対応したが、学生には負担が大きかったようである。全体として、筆者の Teams の運用能力が低いために、使いこなせなかった点と、それまで口頭で説明していた、授業の全体像や間違いやすい部分の指摘が、あまり伝わら

ない授業であり、学生の理解力もかなり個々人の差が生じてしまった点を反省している。

2. 秋学期の遠隔授業（単独科目）の授業スタイル と反省点

春学期の反省から、音声機能を用いた講義に一部、変更を行った。変更した秋学期の遠隔授業（単独科目）の授業スタイル の流れは、以下のとおりである。

①配付資料（Ｂ５もしくは Ａ４サイズ）を前日までに全受講者にメールの添付ファイルで送付する。

②それと同時に Teams のファイルに同じ物を入れて置く。

③Teams で出席を取った後、会議を開催し、テキストを熟読する時間を取り、その後、音声機能を用いて説明を行い、問いや質問の受け答えをする。

④Teams が上手く機能しない学生が出た場合は、チャットで対応する。

このように、春学期に比べて音声機能とチャットを多く用いて、メールでの対応は、原則、行わないようにした。音声機能の使用で、分かりやすくなったという意見が出る反面、音声の音量が学生のスマホやパソコンの機種や性能において差が生じ、音量の調節に手間取った。会議中の画面表示については、学生から顔を映して欲しくないという要望と、教員の学生の顔も、画面から切れる場合があるとの指摘から、行わなかった。資料を共有で画面に出すこともしなかった、その理由としては、それをすると事前に提出した資料を自分で確認して見ない恐れがあると考えたからである。

3. 来年度の遠隔授業に向けた今後の課題

来年度の遠隔授業の課題は、主に以下の 3 点である。

①筆者の Teams 運用能力の向上

②学生との事前の授業に関する共通理解

③グループ学習等の工夫

先ず①が、大前提である。筆者の Teams の運用能力の技術力が、遠隔授業を上手く行うかどうかの必要条件である。

次に②については、学生の遠隔授業を受講する際の、環境（場所、機器等）をきちんと把握することが大事であり、その上での事前の問題点が起きたときのシュミレーションを検討しておくことも重要であると考える

最後に、③についてだが、遠隔授業の可能性として、単純な一斉授業ではなく、グループ活動の可能性を多く感じた。筆者の Teams の運用能力では、今年度は、この点に上手く取り組めなかったが、来年度は、是非グループ活動を増やして行こうと観敢えている。

令和 2 年度保育学科卒業研究発表会（科目「卒業研究」）
（保育学科、2 年、通年、必修、2 単位、43 名履修）

渡　邉　寛　智

1. オンライン形式での卒業研究発表会

昨年度の保育学科卒業研究発表会は、初めてポスター発表形式で開催された。研究発表を行う学生は抄録に加えて発表用のポスターを制作し、発表に向けてプレゼンテーションの練習を行った。発表会当日、目の前で研究発表を聞く学生、教員に対して、発表者が身振り手振りを交えた積極的な姿勢で発表を行う姿が印象的であった。研究に触れることが初めてという 1 年生も、2 年生の先輩が一生懸命に発表を行う姿を見ることで、1 年後の自分のあるべき姿や卒業研究の方向性を見出していた。この新しい試みとなったポスター発表形式を、今年度の 2 年生、教員もイメージしながら卒業研究を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、卒業研究発表会の開催のあり方を大幅に変更せざるを得ない状況になった。人と人の接触を避けて、新型コロナウイルスの感染状況に左右されることなく卒業研究発表会を開催するために、オンライン形式で開催することになった。今回、初めての試みとなったオンライン形式での卒業研究発表会を振り返り、その実施内容を記録するとともに今後の展開や課題について報告する。

2. 卒業研究発表会当日までの準備

オンライン形式での卒業研究発表会は、既に遠隔授業の際に多く使用されているチームズ、ストリーム、フォームズを利用することにした。令和 3 年 2 月 1 日（月）に予定されたオンライン形式による卒業研究発表会に向けて、卒業研究発表抄録集、抄録の別紙資料、研究発表用動画を準備することになった。

1）卒業研究発表抄録集

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、研究によっては保育園、幼稚園などになかなか出向くことが難しく、研究が思うように進まない学生も多かったため、抄録集そのものを作成するのかといった協議が行われたが、研究の集大成を記録に残すという視点から例年通り抄録集を作成することになった。抄録についてのスケジュールは 1 月 12 日（火）を締切とし、翌日の

13 日（水）に学生たちによる卒研編集委員会（各研究室から 2 名程度）のメンバーで校正作業が行われた。修正などもあったことから 14 日（木）に最終的なデータを印刷会社に送り、抄録集が納品されたのは 1 月 27 日（水）であった。

2）抄録の別紙資料

昨年度、抄録の別紙資料は担当者が抄録集に挟み込みを行ったが、感染症対策を考え、抄録集への別紙資料の挟み込みは行わないものとした。別紙資料がある場合は PDF ファイルでチームズ内に保存するか、または配布場所を指定して一人一部持ち帰ることにした。配布に際しては感染症対策を考え、資料を取る前には必ず手指の消毒を行うことを徹底した。

3）研究発表用動画

オンライン形式にするために、10 分～15 分程度の発表用動画を各研究室の学生が作成することになった。ほとんどの動画は音声付きのパワーポイントであったが、アニメーションやイラストなどを効果的に使用しており、ナレーションの表現力も豊かで、研究発表の視聴者を飽きさせない内容になっていた。学生のパワーポイントを見て、教員もその発想力に感心したが、学生が学内で動画作成を行う環境が整っていないことにも気づかされた。オンラインが必須となった時代に向けて、スタジオ的な教室、マイク、カメラ、編集ソフトなど、ハード・ソフトの面での学生支援も必要であると考えさせられた。

なお、発表用動画は、学生が完成させた後、各研究室の教員がストリームに発表用のチャンネルを作成し、そこに動画を保存した。さらに、チームズとストリームの共有を行い、チームズから発表用動画を視聴できる環境を整えた。

3. 当日のスケジュール

2 月 1 日（月）の 3～5 コマの時間で卒業研究発表会を開催した。当日を迎える前に、学生に周知したことは、「通信環境の良い場所で視聴する」「スマホではなく、なるべくパソコンで視聴する」「友人の家などに集合し、密な状況で参加することは認めない」などである。特に、新型コロナ感染防止のためのオンライン開催であることから、密な状況を避けることだけは強く伝えた。

当日のスケジュールは前半（110 分）、後半（120 分）に分け、出席確認を行うタイミングを 4 回設定し、フォームズから出席確認を行った。学生は一人 10 研究以上視聴すること目標にして、視聴した研究の感想と質問をフォームズから入力することにした。また、発表用動画は全部で 24 研究あるため、前半は 1 年生が奇数番号を、2 年生が偶数番号を視聴することにした（後半は奇数、偶数を逆にした）。このような内容を、例年司会を務める 1 年生の代表者が全体に伝え、当日の進行も行った（表 1）。

島根県立大学短期大学部保育学科

2021年2月1日(月)13:00～18:00
オンライン開催

令和2年度卒業研究発表会

1.卒業研究発表会のスケジュール

13:10	チームズの会議で集合 ※出席確認
前半の部	開会のあいさつ(梶谷先生、2保3役)
13:10～15:00	司会(1保:3役)から発表会の説明
(110分)	一人5研究以上視聴
15:00	チームズの会議で集合 ※出席確認
15:00～15:20 (20分)	休憩20分
15:20	チームズの会議で集合 ※出席確認
後半の部	司会(1保:3役)から後半開始のアナウンス
15:20～17:20	一人5研究以上視聴
(120分)	
17:20	チームズの会議で集合 ※出席確認
17:20～17:40	コメントの記入について(司会よりアナウンス)
17:40～18:00	閉会のあいさつ・振り返り (1保:3役、2保:3役、宮下先生)

※ 一人10研究以上視聴するようにしてください。視聴が終わったら各研究室のチャネルにあるフォームズから、「視聴した研究の内容」「研究についての質問」を入力するようにしてください。

※ 動画を視聴しますので、なるべく通信環境の良いところで参加してください。
※ スマホでの視聴は文字などが認識できない可能性がありますので、パソコンなどから視聴するようにしてください。
※ 通信状況が思わしくない場合は、設定された時間に間に合わなくても構いません。時間外でも構いませんので、各自で時間を設定して10研究以上は視聴するようにしてください。

表 1「当日のスケジュール」

当日は、開始直後に数名の学生から動画を視聴することができないとの連絡があった。その原因は、卒業研究発表会が始まる直前にチームズに参加したため、チームズとストリームの共有がスムーズに行われなかったことが考えられた。20～30 分以内でこの問題は解決したが、このトラブルについては、前日までにチームに参加することで解決できると考える。その後、幸いなことに大きなトラブルに見舞われることはなく、無事にオンライン形式での卒業研究発表会が終了した。

4. 振り返りと質問についての回答

卒業研究発表会では、学生が研究担当者にフォームズから質問を行った。発表会後に、各研究室では振り返りも兼ねて、研究担当者がフォームズからの質問に回答し、回答を PDF ファイルに保存して視聴した学生にチームズで公開することにしていた。通常の卒業研究発表会では対面で質疑応答を行うが、学生が積極的に質問を行うことがなかなか難しい。しかし、フォームズからの質問であれば、学生は必ず質問しなければならないし、回答者も質問に対して時間をかけて丁寧に回答することができる。回答者は、学生からの質問が想定内の質問もあれば、想定外の質問もあったようである。その想定外の質問は、研究担当者の新たな気づきとなり、時間をかけて回答することで研究の幅を広げる学びになったようである。

5. まとめと今後の課題

学生も教員も試行錯誤する中で緊張感のある卒業研究発表会となったが、なんとか無事に終了することができた。教員は昨年とは違う指導が求めら

れ、学生は昨年度のイメージを捨てて、先が見えない状態で最後まで良く研究してくれたと思う。学生のアンケートでは、オンライン形式に対して肯定的な回答が多数寄せられた。その理由は、「自分のペースで視聴することができる」「わからなかったところをもう一度繰り返して聞けた」「じっくりと質問の内容を考えることができた」といった内容である。逆に、対面の方が良いという意見もあった。理由は、「人の顔が見えないので反応がわからない」「同学年、他学年と対面で交流することができなかった」「周りに人がいないので不安だった」という内容である。学生、教員からの意見でオンライン形式の良いところや問題点が浮き彫りになった。今後の課題は、引き続き状況に応じて卒業研究発表会のあり方を柔軟に変化させる必要がある。ポスター形式、オンライン形式のどちらか一択ではなく、両者の良いところを組み合わせた発表会やこれまでにない新しい手段を用いた開催方法も今後検討しなければならない。

２）短期大学部総合文化学科

科目①「情報基礎」
（総合文化学科、１年、秋学期、必修、単位、履修者数）
科目②「情報応用」
（総合文化学科、１年、秋学期、選択、単位、履修者数）
科目③「コンピュータ・リテラシーⅡ」
（地域文化学科、１年、秋学期、必修、単位、履修者数）

加藤　暢恵

1. はじめに

筆者が担当する情報系科目はいずれもコンピュータによる実習を伴う実習系科目である。本年度秋学期に開講した４科目のうち、Adobe 社製ソフトを使用する１科目を除３科目（科目①、科目②、科目③）において、Microsoft Teams を用いた遠隔授業（リアルタイム）を実施した。

2. 実習系科目における遠隔講義対応

科目①は主にプレゼンテーションに関する技術の習得を目的とし、グループプレゼンおよび個人プレゼンを実施する授業である。個人プレゼンにおいては、各個人の作業がメインとなるため、遠隔講義によるデメリットはあまり感じられなかった。グループプレゼンにおいては、プレゼンのテーマ決定、スライド作成、発表練習のいずれの場合にもグループワークを行う必要があるため、グループごとにチャネルを用意し、グループワークの実施を試みた。教員は各チャネルを巡回し、グループワークの様子を知ることができるが、学生は他のグループの様子を知ることができないため、対面で実施するようなグループワークの盛り上がりは感じられなかった。

科目②においては、従来オンラインサービスを用いたプログラミング学習や電子地図の編集、インターネット百科事典の編集およびその活用方法の提案などを主な内容としている。そのため、使用する教材（ソフトウェアやサービス）などを変更する必要はなかった。しかし、これらの教材はすべて学生にとっては初めて目にするもの、初めて操作するものである。対面授業の場合は、操作方法でわからない点はすぐに質問でき、学生はわからない点について明確でなくても、教師への質問や学生同士対話の中で解決していた。しかし、今回遠隔で実施したところ、学生からは、どう質問してよいかわか

らず、質問するのをためらったという声があった。教師に気軽に質問できる環境でなかったことに加え、学生同士で対話しながら作業を進めることができなかったことも、遠隔授業におけるデメリットであったと感じる。

科目③については、春学期に同様の科目が実施されていたため、実施方法はそれに倣い、授業のはじめにテキストの解説を行い、その後演習問題に取り組むというスタイルで進めることとした。本科目は、ソフトウェアの操作方法を習得するための講義である。学生のスキルの差が大きいため、対面で実施する際は、机間巡視により一人ひとりの質問に対応している。しかし、遠隔講義では、学生の進捗状況を細かに把握することができず、質問をする学生以外の学生の状況が全くわからない。そのため、どれくらいの進度で学習内容を進めていけばよいのかを筆者自身が把握するまでに、対面で実施する場合以上の時間がかかった。遠隔授業におけるメリットもあった。対面授業では、個別に質問に対応するため同じ質問を受けることが何度もあったが、遠隔講義においては、学生が質問する際に、自身の画面を全体に共有して発言するため、すべての学生が共有することができ、質問できない学生も他の学生の質問により学びを深めることができた。また、チャットを使って質問があった場合でも、全体に共有すべきことをすぐに全体に周知できるという利点もあった。

3. 今後の課題

遠隔講義で実習系科目を実施する際の課題としては、学生の実習の状況をどのようにして把握するかに尽きると感じた。そのため、学習状況や進捗状況を把握する仕組みを構築する必要があると考えている。

4. おわりに

実習系科目で遠隔講義を行う上で困難を感じた点は、個々のスキルの差に対する対応である。対面授業であれば、学生の進捗状況をすぐに把握でき、操作が滞っている場合にはすぐに対応できる。しかし、遠隔授業では、学生からの発信がなければ、困っているのかどうかを把握することができない。学生の反応がわからないこと、一人ひとりの実習の状況が見えないことによる対応の遅れという、今年度の反省点を糧に、他大学での取り組みなどを参考にして、来年度はスムーズにかつ学生の満足度および習熟度を高められる工夫をしていきたい。そして、それが今後対面授業となったときに、学び方の多様性として生かせるよう努めたい。

科目①「文化とガイド」12P 太字
（総合文化学科 2 年秋学期選択 2 単位 34 名履修）
科目②「観光フィールド・トリップ」
（地域文化学科 3 年春学期選択 2 単位 18 名履修）

Dustin Kidd

1. コロナ禍の中の実践型授業

私が担当する授業の多くは実践型である。春学期は特にコロナの影響が大きかった。学科のキャリア担当として担当する「インターンシップ」が秋学期に変更となった。また普段、石見銀山で行っている「総合文研修Ⅰ」は、大幅に内容を変更することとなった（これについては別の報告で詳細を述べる）。そして、一番大きかったのは毎年夏休みに学生をアメリカへ連れて行く海外語学研修が中止となったことだった。ここでは、上記以外の 2 科目について取り上げてみたい。

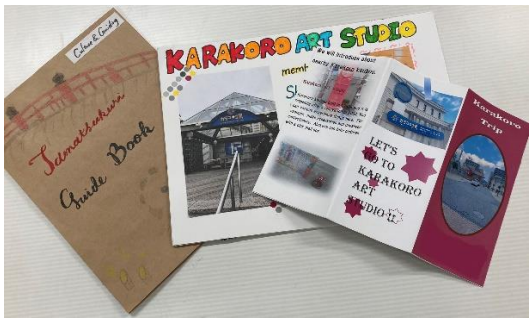
2. 二つの実践型授業

1）科目①：「文化とガイド」－コロナ禍の中、そもそもガイドできるか

科目①は秋学期の授業であり対面授業がある程度許されるようになったため、対面形式で行った。教室内の学びもあるが、2 回のガイド実践と八重垣神社訪問を合わせて計 3 回学外で授業を行った。例年通り、最大 6 人ずつに班分けし現地集合・現地解散にしてなるべく「密」を避けた。

１回目のガイド実践は松江城だった。ガイド実践時の内容は学生に任せている。経済的負担を少なくするために、天守閣に入らず城周辺のガイドとなった。ここまでは例年とほとんど変わらなかった。問題は 2 回目の実践だった。各班にガイド実践場所を任せているので、いろいろな場所になる可能性がある。しかし、実践の時期はコロナの深刻化と重なり、実施方法を工夫した。

初めての試みとして、それぞれの班が私を実際にガイドする以外にも、ほかの方法を許可した。結果として、7 班中 2 班がガイド実践を行い、3 班はパンフレット、1 班は動画、1 班はパワーポイントを作った。想像力に富んだものがたくさん出来上がった。学生がかなり努力したという印象を受けた。毎年、科目①はわりと受講生の多い授業なので、今後もさらに工夫してこの方法を活かしていこうと考えている。



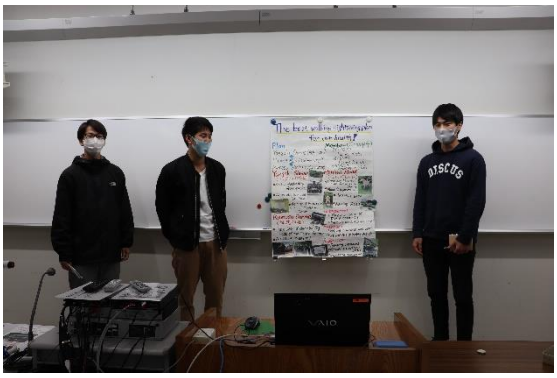
科目①　パンフレット（左）と動画の一面（右）

2）科目②：「観光フィールド・トリップ」－幻の石見銀山研修

今年度は 3 年ぶりにこの科目が開講された。しかも、旧総合文化学科の科目から地域文化学科の科目になって初めてだった。最初は、総合文化学科でもお世話になっている大森町で実施する予定だったが、宿泊を伴う研修がすべて中止となったため内容を変更した。また、島根大学の留学生をゲストに迎える予定を、各班が私を案内するという形に変更した。

科目②でも、科目①のやり方を導入した。受講生 18 人を 5 班に分けて、それぞれ案内する場所を選んでもらった。学生が選んだ場所は：松江城周辺、松江フォーゲルパーク、玉造温泉街、ゴーストツアー（大雄寺、清光院、月照寺）、そして歩きながら観光（八重垣神社、はにわロード、神魂神社）だった。現地集合・現地解散とし、事前の勉強会も兼ねて、それぞれの班に案内してもらった。

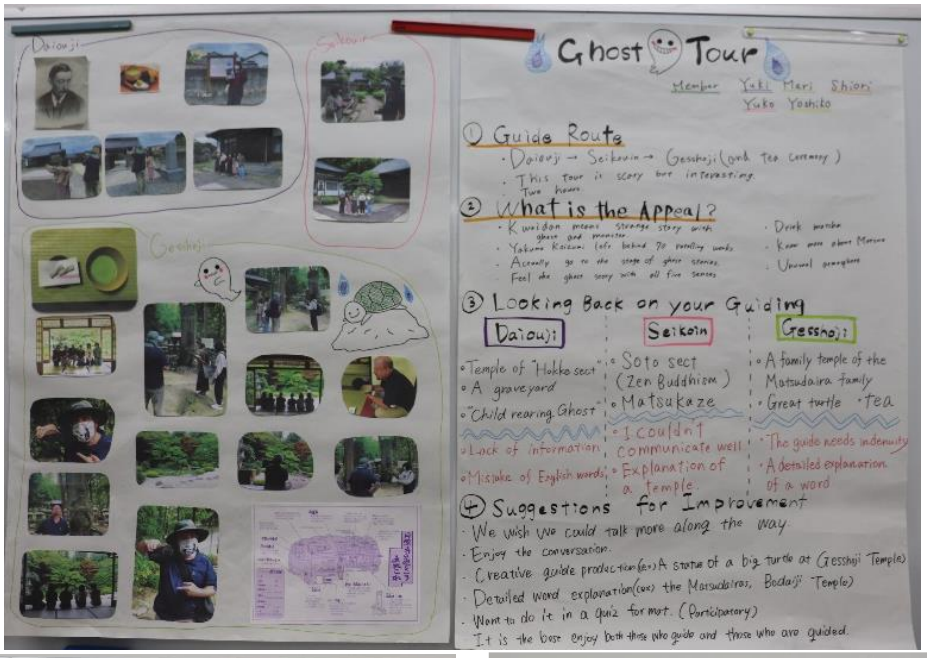
今までは、フィールド・トリップが終わった後に受講生に冊子を作ってもらっていたが、今年度は内容があまりにも変わったため冊子作成を取りやめてポスター発表を課した。

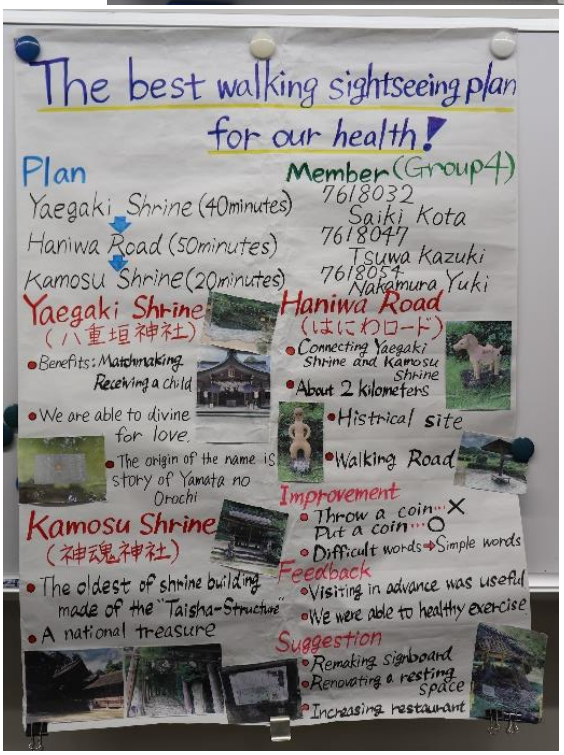


科目②　二つの班のポスター発表終了後

全員が集まることが困難だったため連絡が行き届かなかったり、こちらの意図が伝わらなかったりすることがあって実施の時の混乱を招いた。今後はその

ことがないように気をつけていきたい。それにしても、学生の目線でのガイドは面白かったうえ、ポスター発表もよかった。





科目②　学生が作成したポスター

3. おわりに

次年度もコロナの影響はあるだろう。今年度に経験したことや試行錯誤の中で学んだことを活かせて、より良い「with コロナ」の教育を学生に届けていきたい。

科目①「文学と文化Ⅳ（英米文学 A)」
（総合文化学科２年秋学期選択２単位 29 名履修）
科目②「総合文化基礎ゼミナール」（総合文化学科１年春学期必修
１単位７名履修）
科目③「日本語表現演習」（総合文化学科１年秋学期必修２単位
７名履修）

藤　吉　知　美

１．はじめに

令和二年度より遠隔授業がスタートした。①は、『人間と文化』第２号と第３号で、それぞれ「アメリカ文学の授業報告」、「文学研究への入り口：アメリカ文学の授業報告」として報告した科目である。本稿では①の従来の授業形態と比較しつつ、リアルタイム双方向ではどうだったのかを述べたい。さらに、対面と遠隔で行った②③にも言及することで、①や他の授業におけるさらなる可能性と**今後の課題を見出したい。**

２．リアルタイム双方向授業

１）課題提出

①は従来、授業当日に学生が課題（訳）を口頭発表する形をとっていたが、今年度は授業の前日までに Teams のファイルに完成した課題を載せておくよう指示した。これにより提出状況のチェックができたので、期日までに未提出の学生がいた場合は、個別にメールし、提出忘れを防ぐことができた。また期末試験は期末レポートに変更し、ユニパに提出することとした。

２）発表の仕方

授業当日は、あらかじめ提出された課題ファイルを画面で共有し、担当学生がそれを読む。その後筆者が Teams 上で説明し添削する。その過程は全学生に提示され、修正された課題ファイルが Teams に保存される。昨年度までの授業では、担当学生の課題が口頭で読み上げられ、その後の修正は各自が自身のノート上で行い、課題（ファイル）の共有はできなかった。

練習問題の解答や内容に関するコメントは、投稿欄を用いた。投稿欄による発表には、29 人中毎回 10～20 名が積極的に参加した。投稿欄を用いると、互いの解答やコメントを見ることができるため、比較したり参考したりできるが、それが理由で発表をためらう学生もいただろう。

３）コメントの内容

小説の読後にコメントを投稿してもらう際、時間の制約や通信状況の不具合などを考慮し、根拠となる小説の引用を求めず、簡潔に述べるよう指示した。そのため、「～と思った」という主観的な書き方が多く見られた。しかし期末レポートで同様のコメントを求める際、小説を引用してよいという指示を加えたところ、主観のみに頼らない意見を書く学生が多かった。教員が具体的な指示を出せば、学生はきちんと反応するのだと実感した。

３．ハイブリッド型授業

②③はゼミ形式だが学科全体で展開することが多いため、対面の際は２ゼミずつ教室を分けるなどの対策をした。対面の回数は②で３回、③で 11 回（ゼミ個別指導６回、全体講義等５回）である。対面の機会が増えるごとに、ゼミ生一人一人の様子がわかるようになった。そのため、遠隔の際にも学生の様子が想像でき、反応が見えないもどかしさも軽減されていった。

４．おわりに

①ではほぼ従来と同様の授業形式を目指したが、進度を遅めにし、範囲も狭めた。すべて遠隔で行ったため、学生の反応を確かめる手掛かりに乏しかったが、課題提出状況や授業への参加・発表状況は概ね良好であった。これは、学生が課題の存在に気づかないという春学期の失敗を繰り返さないよう、説明やアナウンスを丁寧に心掛けたことも大きいだろう。②③は、実質通年の授業であり、かつ対面と組み合わせたことで、終盤に近づくにつれ、学生の様子が把握しやすくなった。状況が許すなら、今後の遠隔授業にも取り入れたい方法の一つである。

年度始めの Teams 講習会に背中を押されて、あとは失敗しながら自己流で押し切った一年だった。閉じられた空間で孤独な作業が多かったため、他の教員の授業を参考にしたり質問したりする機会が少なかった。毎日の失敗と学習を重ねるうちに、遠隔授業らしきものは行えるようになった。ただし、肝心の授業内容が学生に伝わったかどうか気になるところである。これについては引き続き検討していきたい。

最後に、本稿で取り上げなかった、「英米の言語と文化Ⅰ」（総合文化学科１年）「文学と文化Ⅴ（英米文学 B）」（同２年）「総合文化ゼミナールⅠ・Ⅱ」（同２年）、「実践英語Ⅰ」（地域文化学科１年）「アメリカの文学と文化Ⅰ」（同３年）「英語Ⅲ」（出雲キャンパス健康栄養学科・看護学科２年）は、①とほぼ同様の授業展開であったことを付け加えておく。

科目①「文学」
（短期大学部 1 年春学期選択 2 単位 39 名履修）
科目②「文学と文化Ⅱ（日本近代文学 B)」
（総合文化学科 2 年春学期選択 2 単位 31 名履修）

山　根　繁　樹

1. 各科目の概要

今回報告する 2 科目について、その概要を述べておく。科目①は、短期大学部の基礎科目で、日本文学の諸ジャンルから作品を取り上げ、「文学」を概説する授業である。科目②は、2 年生の選択科目で、長編小説を章ごとに講読していく授業である。本稿では、Microsoft Teams および Forms を使用して行った授業のうち、2 科目についてその内容を報告する。

2. 科目①における工夫

1)資料作成と授業の進行についての工夫

従来この授業で配布していたのは、A4 用紙に 2 段で印刷した資料である。Teams リアルタイムでの授業を実施するにあたり、短期大学部の学生の中には、スマートフォンで視聴する者が多いことが危惧された。そのため、小さい画面に対応すべく資料を作品ごとに PowerPoint のスライドに貼り付け、ピンチして大きさを調整しなくとも読めるように工夫した。また、共有するファイルとは別に、PDF にしたファイルをアップロードし、そちらを自分で見る、授業後に確認する、といったことも可能にした。授業を進めるにあたっては、学生の通信環境も考慮して毎回レコーディングしておき、視聴しづらかった部分を見返すよう促した。

2) Microsoft Forms の活用

(1)授業中の意見の吸い上げ

対面授業であれば、挙手をしてもらったり指名したりして行っていた学生の意見の吸い上げを、Forms を使って行った。メリットとして、たとえば投票のような形であれば結果が瞬時に全員で確認できること、誰がどのような意見を持ったか事後に確認できること、などがあった。

(2) 授業後の質問・意見の吸い上げ

授業の終わりには、毎回、Forms によるアンケートを行った。固定の項目

は「視聴できましたか？」の選択肢による回答と「今日わかったことは？」の記述による回答、および「質問があればどうぞ」への自由記述である。それ以外に、各回のテーマに沿った質問を 1 問課した。学生からは、理解の追いつかなかった点への質問などが寄せられ、Teams 投稿欄でまとめて答えるようにした。他者の質問を知ることで自身の理解度を確認できた学生も多かったようである。図 1 は、ある回の投稿欄の一部である。

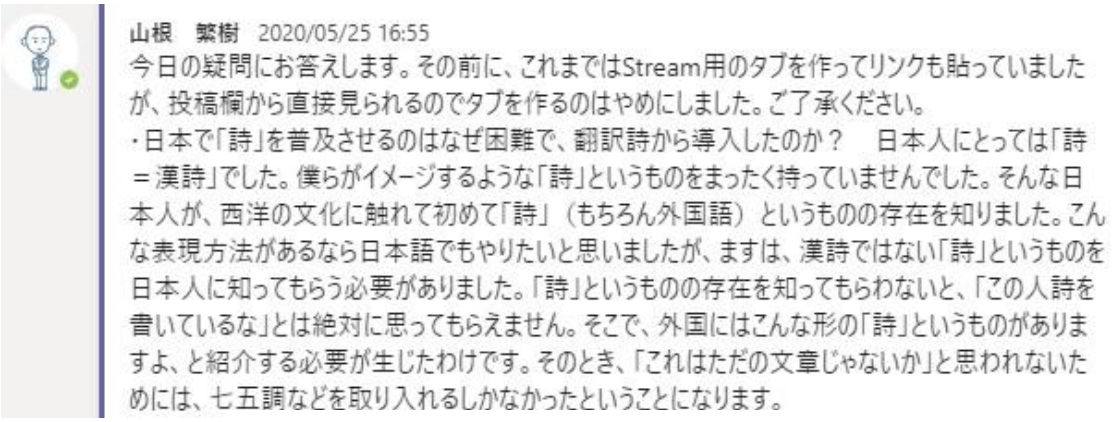


図 1：Teams 投稿欄で学生からの質問に答えた例

3. 科目②における工夫

科目②においても、前述の科目①と同様の工夫を行った。ただし、授業②は池澤夏樹の長編『マシアス・ギリの失脚』の講読で、質問だけでなく感想めいた意見も多く寄せられた。「自分の中でいろんな考察が飛び交っていて、すごく誰かと話し合いたい気分です！」という声もあり、学生の読みをできるだけオープンにすることで、広がりを感じてもらう必要を感じた。図 2 は、9 章中 4 章目が終わった段階で質問に答えた、投稿欄の一部である。

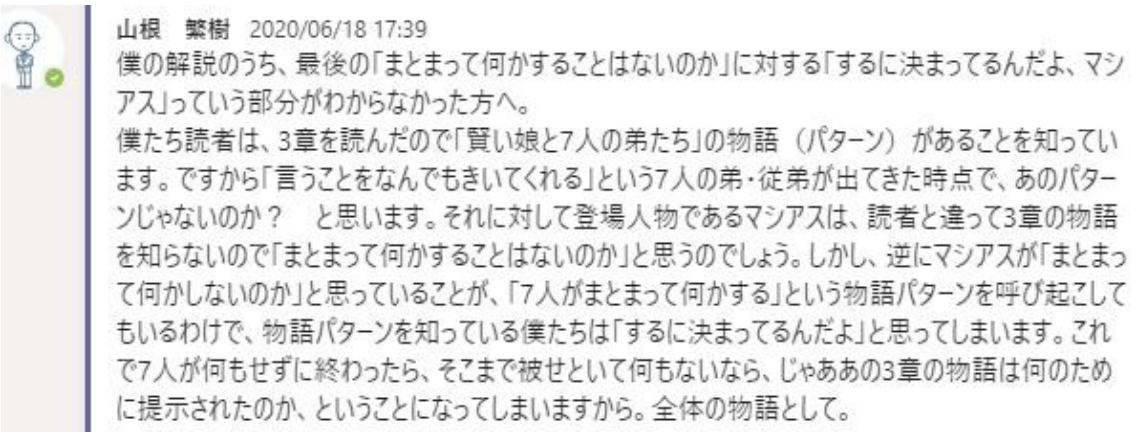


図 2：Teams 投稿欄で学生の質問をふまえたまとめ例

4. 科目②における学生の反応

科目②授業最終回に、任意の「遠隔授業についてのアンケート」を無記名で行った。質問項目は、「Forms で質問しやすかったか」「『投稿』欄で質問に答えたが読んでいたか」「『読んだ』場合参考になったか」の選択肢、「遠隔で良かったこと」「遠隔で良くなかったこと」の自由記述の 5 問で、回答数は 30 だった。図 3 は、3 問目までの回答結果である。30 名中、17 名が「対面より質問しやすかった」と答え、28 名が投稿欄でのまとめを読んでいた。また、まとめを読んだ全員が多少とも参考になったと答えている。

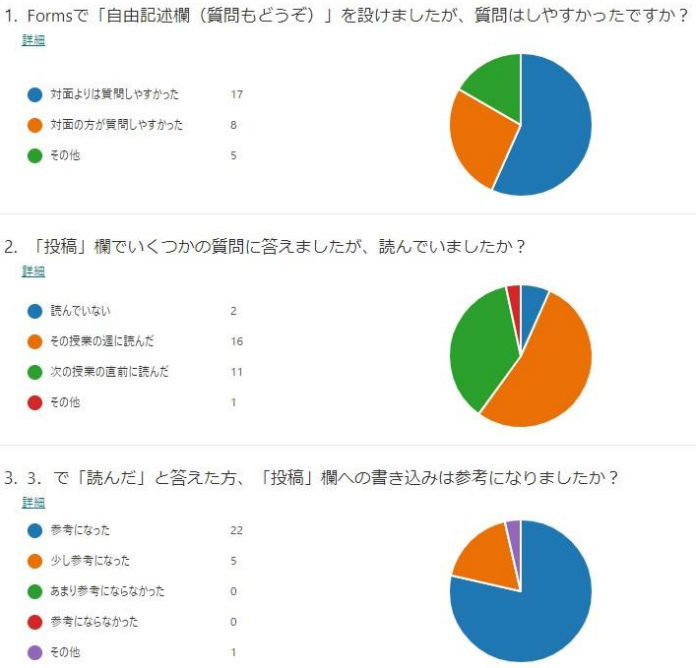


図 3：授業後のアンケート結果（選択肢）

「遠隔で良かったこと」には、レコーディングやホワイトボードの写真を使って復習できる点をあげた者が 18 名いた。また、Forms で自分の質問・意見がしっかり言えたという意見が 6 件あった。代表的な意見は次の通り。

> 「授業が終わった後に、先生が投稿欄にその週の質問に答えて載せてくださりましたが、それは対面だと 1 週間後に行わなければできなかったことだと思うので、記憶が新しいうちに、早めに解決できたことは、オンラインで良かったと思う。」

一方、「良くなかったこと」としては、通信環境の影響をあげる者がほとんどであった。他に、「小説の先について、その場でみんなと意見を共有しながら受けたかったので、授業中に会話ができなかったことはオンラインのデメリットだと感じた」「会話のラリーができないこと」という意見があった。

5. 今後に向けて

Forms で質問・意見を吸い上げることで、学生は「しっかり言えた」という意識を持ち、他者の意見への関心も高まったようだ。これは対面授業でも活かせる手法であろう。一方、作品を元に意見を交わし合うという「文学」本来の醍醐味に目覚めかけた学生に、不満が残ったことも確かであった。

科目①「日本の言語と文化Ⅰ」
（総合文化学科１年春学期選択２単位 43 名履修）
科目②「日本の言語と文化Ⅱ」
（総合文化学科１年秋学期選択２単位 25 名履修）
科目③「日本語学概論Ⅱ」
（地域文化学科２年秋学期選択２単位 62 名履修）

山　村　仁　朗

どのように講義をすることが通常授業の形に最も近いのか。そのことを問い続けた１年であった。

1. 講義の対話性

春学期はゼミなどの演習科目と講義科目「日本の言語と文化Ⅰ」（科目①）を担当した。全て Teams を用いてリアルタイムで授業を行った。

演習科目には特段の不便を感じなかった。学生のレジュメの誤字を指摘する際はホワイトボードに正しい漢字を書いて PC カメラに映せばよい。発表者との質疑応答の際に声が途切れることやミュート状態で音声が聞こえないこともあったが、回数を重ねるうちに改善された。

講義科目には不便を感じた。演習科目と比べて、講義科目は受講生の数が多い。その分、機器のトラブルも生じやすい。科目①がそうであった。声は聞こえるが画像が映らない、先生が話しているのはわかるが声が聞こえないということは毎回のように起こる。切りのよいところで２、３分程度の休憩を取ることにしていたが、その際席を外してパソコンの前に戻って「会議に参加」すると画面が真っ暗で声しか聞こえないというトラブルもあった。「会議に参加」ボタンが見当たらずチャットでその旨を伝えるも授業担当の私がそれを見落とし、授業終了後に「授業に参加できません」というメールに気づいたこともある。

そういったトラブルに適切な対応をすればよいのだが、こちらも Teams の仕組みを充分に理解できておらず、無力さを感じた。

また、講義の速度にも悩んだ。通常の授業では受講生の表情をみて、理解できていそうであればそのままの速度で話を続ける。よく理解できていない

ように感じた場合は速度を落としたり、再度説明し直したりする。しかし、遠隔授業では学生たちがどの程度理解しているかを確認できない。そのため、一定の速度で講義するのであるが、果たして学生たちは理解しているのだろうかということが頭を過り、講義している私も授業に集中できないということがしばしばあった。

「遠隔授業で一番困るのは学生の顔が見えないこと」だと仰られた先生がいる。そのとおりだと思う。講義とは教員が学生に一方的に話すことによって成り立っていると考えていた。しかし、そうではない。教員が学生の表情を読み取ることを通して行う両者の対話なのである。

2. ハイブリッド―対話性と非対話性

そのこと――講義とは対話であるということに思い至り、秋学期の講義科目②③では受講生からの質問に対する回答に丁寧に答えることに時間を掛けた。毎回 Forms で提出されるコメントカードには授業内容の根幹に関わる鋭い質問も見られる。そのいくつかを取り挙げ回答する。つまり、コメントカードを通して対話性を確保する方法を選んだのである。こちらが答えに窮するものもたくさんあるが、その分こちらの授業準備にも力が入る。

講義そのものは予め撮影した動画を受講生が視聴する形式を取った。そのことで私は内容の説明に集中し、受講生は授業内容を理解することに集中することができた。対話性と非対話性のハイブリッド形式の講義である。

懸念していた撮影することへの緊張や恥ずかしさは初めの数回だけのことであった。慣れてくると、集中して講義できるようになり、通常授業に近いものを感じた。

また普段の授業であれば曖昧に済ませている箇所も、撮影となると細部まで正確に説明する必要がある。加えて、動画を Stream から Teams へ、コメントカードを Forms から Teams へアップロードする作業も必要である。そのため、授業準備に通常の２、３倍の時間を要した。いかに効率よく授業準備を進めるかということが遠隔授業を行ううえでの課題である。

どのように講義をすることが通常授業の形に最も近いのか。次年度もまた、問い続けることになるだろう。

科目①「総合文化ゼミナールⅠ」
（総合文化学科 2 学年春学期必修 2 単位 6 人履修）
科目②「日本文化論Ⅰ（表象文化）」
（総合文化学科 1 学年秋学期選択 2 単位 32 人履修）

渡　部　周　子

1. はじめに

コロナ禍のもとで、オンライン授業という、新たな取り組みをすることになった。その体験から、「教材」選択という観点に絞って、報告をすることにしたい。

2. 教材選択とその活用

1)はじめに

春学期早々には、緊急事態宣言のもと、学生が教材を入手することが困難な状況であった。人文系の高等教育において、不可欠な教材として書籍がある。それすらも、公立図書館が休館したり、書店の流通にも遅れが見られ、入手が困難であった。

著作権に関しても懸念があった。『改正著作権法第 35 条運用指針(令和 2(2020)年度版)』は次のように記している。「「学校その他の教育機関」で「教育を担任する者」と「授業を受ける者」に対して、「授業の過程」で著作物を無許諾・無償で複製すること、無許諾・無償又は補償金で公衆送信(「授業目的公衆送信」)すること、無許諾・無償で公に伝達することを認めています。ただし、著作権者の利益を不当に害することとなる場合は、この限りではありません」（下線引用者）注1。「著作権者の利益を不当に害する」というのが、どの程度の行為なのか、具体的には説明がなされていない。当然ながら、2020 年度は前例の蓄積がない。慎重を期す必要があると思われた。

特に、従来教材として活用していた映像資料（動画）は、著作権の問題だけでなく、学生が自宅で視聴できる環境が整備されているかという問題もあった。2020 年度の当該科目では、映像資料（動画）を教材から外した。

そこで、他の教材を用意する必要が生じた。また、学生の費用負担が発生しないと望ましい。この条件に合致する資料を、この報告で一例示すことにしたい。

2）データーベースの活用

国会図書館デジタル化ライブラリーは、著作権保護期間が満了した資料、著作権者の許諾を得た資料等に限って、無料で全文を公開している。授業に際して、データーベースの使用方法をまず案内した。その結果、学生各自が、検索したり閲覧することができるようになった。

ただし、自宅で利用できる資料は限られている。「デジタル化資料送信サービス」によって、松江キャンパス内で閲覧できる資料もあるが、国立国会図書館内に設置された端末でのみ利用できる資料や、もちろん未収録の資料もある。

国会図書館のホームページでは、次のように説明している。

> 国立国会図書館がデジタル化した資料は、国立国会図書館デジタルコレクション に収録して提供しています。著作権保護期間が満了した資料、著作権者の許諾を得た資料等については、インターネットを通じて本文の画像を公開しており、どなたでも自宅のパソコン等から利用することができます。インターネットに公開していないデジタル化資料のうち、絶版等の理由で入手困難な資料については、デジタル化資料送信サービスで利用することができます（そのほかに、国立国会図書館の館内に設置された端末でのみ利用できる資料もあります）。注２

このように、費用負担がなく、学生はインターネットを通じて利用できるのである。著作権保護期間が満了した資料は、明治期や大正期のものが多い。歴史的な資料価値が高いものを、装丁や挿絵も含め、発表時の状態で見ることができる。これは専門の授業で用いる場合、高い利点であると言える。

一方で欠点もある。既に述べたとおり、閲覧可能な作品は限定的であり、このデーターベースで、全ての教材を用意できるわけではない。当然ながら時代を経る中で負った破損や汚れがあり、状態が良くないことも多い。また、旧字体の漢字や変体仮名、異体字が用いられており、修練を得ないと読み難い。授業では、近代資料を読むための基礎的な知識を講義した。加えて、短編かつ内容が平易なものを選んだ。とはいえ、一定の修練が必要なので、読者対象を選ぶ。社会人対象の公開講座、高校生対象の模擬授業の教材としては、必ずしも適切ではないと考えられる。今回、学科の専門科目で段階を経て使用しており、その限りでは学生の理解に差しつかえはなかった。ただしこれは専門の授業という、限定された条件において有効だと感じた。

3. おわりに

オンライン授業に初めて取り組み、とにかく手探りで進める中で、一年が終わろうとしている。

オンライン授業は 2021 年度どの程度活用することになるのか、この原稿を書いている時点では不確定である。『人間と文化』が刊行されたあかつきには、他の教員の皆様の報告より、諸々学ばせていただき、精進したいと考えている。

注１）著作物の教育利用に関する関係者フォーラム『改正著作権法第 35 条運用指針(令和 2(2020)年度版)』著作物の教育利用に関する関係者フォーラム、2020 年 4 月 16 日 https://forum.sartras.or.jp/wp-content/uploads/unyoshishin2020.pdf （2021 年 2 月 20 日最終閲覧）

注２）無署名「図書館向けデジタル化資料送信サービス」国立国会図書館、公開年月日不明 https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/index.html（2021 年 2 月 20 日最終閲覧）

３）人間文化学部保育教育学科

科目①「脳科学と心」
（地域文化学科・保育教育学科 1 年春学期選択 2 単位 40 名履修）
科目②「知的障害児の心理」
（保育教育学科 2 年春学期選択 2 単位 29 名履修）
科目③「特別支援教育アセスメント」
（保育教育学科 2 年春学期選択 2 単位 6 名履修）
科目④「視覚障害児教育総論」
（保育教育学科 2 年秋学期選択 2 単位 38 名履修）
科目⑤「重複・LD・ADHD 等の心理・生理・病理」
（保育教育学科 2 年秋学期選択 2 単位 39 名履修）
科目⑥「発達障害児教育総論」
（保育教育学科 3 年秋学期選択 2 単位 27 名履修）

内　山　仁　志

1. 基本的な授業の流れ

1）導入と前回の復習、2）授業中、3）まとめと課題（授業感想レポート）を授業の基本構成とした。以下に詳細を記す。

1)導入と前回の復習：授業の最初に出席確認のための健康チェックを行った。また 2 回目以降は前回講義の確認テストをまず行い、確認テスト終了後に前回講義後の質問事項に回答したり、全員の講義の感想を匿名化した状態で参照したりすることで前回の内容を喚起させた上で新しい単元に入るようにした。

2）授業中：授業はパワーポイントスライドで行った。講義内容によって適宜動画教材やウェブページを参照したり、各自に課題を出したり、休憩時間を取ることもあった。これは 20～30 分間隔で講義に変化をつけるためであった。また、授業中に質問した場合の回答には絵文字を用いる等、極力双方向の形が生まれる工夫を心がけた。また Teams のチャネル機能を用いてグループワークを行った科目もある。現在はブレイクアウトルームができるようになっているのでググループワークの設定がかなり楽になっている。

3）まとめと課題（授業感想レポート）：最後に全体の振り返りをしつつ、質問の有無の確認、次回の案内をした。また、まとめとして資料を振り返る時間を数分取った後に、Forms で事前に作成しておいた 10 問で構成される○×

問題を課題として出題し、学生はそれに回答した。その際「配布プリント等何も見ないで解いてください」と教示して行った。平均点は各科目ともおよそ 7～8 点であった。また授業前の確認テストは前回と同じテストとした。

確認テストの後は授業に関するレポートとして、授業の「難易度」、「理解度」、「説明のわかりやすさ」、「今日のがんばり度」を 5 段階評価でつけてもらい、授業の設定具合や講師の評価を数値化した。さらに「今日の授業で最も印象に残っていること」、「質問（何でも可）」を書かせ、授業の振り返りができる仕掛けを行った。学生からは「授業前後の小テストが繰り返して行われたため、重要な知識を定着させることができた」「みんなの考えや感想を共有したことで自分の考えを振り返ったり、違う視点からの学びに繋げたりすることが出来た」等のコメントが多数あり、これらの設定は効果があったことを確認できた。

2. 画面上の工夫

1)表示に閲覧表示を用いる

当初はプレゼンテーションのスライドショーにて全画面表示で授業を行っていたが、終盤のころは PC の画面を共有して、プレゼンテーションの閲覧表示を活用した。

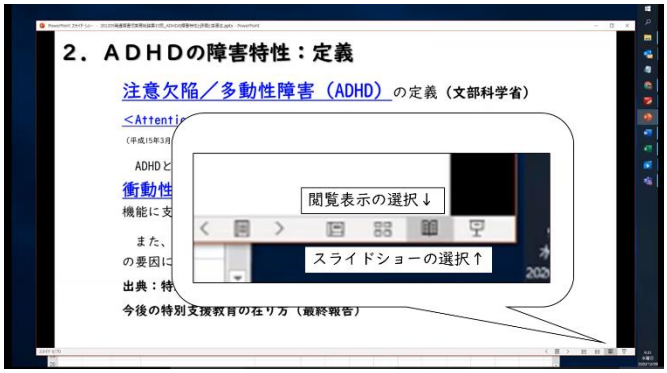


図 1.「閲覧表示」の方法

ppt 内の右下のアイコンをクリックすることで閲覧表示が可能となる（図 1 内の吹き出し拡大箇所を参照）。このメリットは web サイトや動画サイトを閲覧するときにその都度スライドショーを取りやめる必要がなく、画面の転換がスムーズになり、受講者にとって目に優しいと考えられる。

2）CommentScreen の活用(https://commentscreen.com/)

これは 1 月に入ってから活用したものであるが、授業中に受講者の質問やコメントをリアルタイムでディスプレイ上に表示させたり、受講者が授業中に即座にスタンプを用いて反応したりすることができるツールである。使用した授業後のアンケートでも「みんなの気持ちがスタンプになって画面にでてきて面白かった。」との意見が複数上がった。来年度はすべての科目で活用予定である。

以上、今年度のオンライン授業での取り組みを総括した。重要なポイントはやはり「双方向のコミュニケーションをいかに確立するか」、ということと思う。様々なツールを使いながら今後も授業構成を発展させ、よりよい学びの環境を構築していきたい。

科目①「健康スポーツⅠ」
（保育教育学科１年春学期必修１単位 41 名履修）
科目②「健康スポーツⅠ」
（地域文化学科１年春学期選択１単位 46 名履修）
科目③「健康スポーツⅡ」
（保育教育学科２年春学期選択１単位 33 名履修）
科目④「健康スポーツ概論」
（保育教育学科１年秋学期必修１単位 41 名履修）
（地域文化学科１年秋学期選択１単位 61 名履修）
（保育学科１年秋学期必修１単位 41 名履修）
（総合文化学科１年秋学期選択１単位 25 名履修）
科目⑤「健康スポーツⅡ」
（地域文化学科１年秋学期選択１単位 11 名履修）
科目⑥「体育」
（保育教育学科１年秋学期必修１単位 41 名履修）
科目⑦「保育内容 健康」
（保育教育学科３年秋学期選択２単位 34 名履修）

岸　本　　強

1. 実技科目「Web 授業は可能か、、」の悩み

平成２年３月、新型コロナ感染症拡大防止対策として、松江キャンパスでの授業は全て遠隔授業で行うことが決定された。私の春学期担当科目は「健康スポーツ」が主で、１年生の実技授業を２コマ、２年生の演習を伴う授業を１コマ予定していたため、春学期授業についての構想は全く白紙からの組立てを迫られた。そもそも、遠隔授業で実技科目単位の認定できるのだろうか、しばらくの間はこの問題と取組むことになった。必死に文部科学省の通知や他大学の情報を収集していくうち、問題の糸口を掴むことができた。

２. Teams の実技授業への活用

1)学生とつながるツール、「Teams」「Forms」

遠隔授業を開始する最低条件は、全ての学生が対応可能であろう「スマートフォン」でも受講できることだった。本学では Microsoft Teams が利用で

きる環境があり、使用に手慣れた教職員からの研修指導もあり、授業開始までの短期間にどのように授業を組立て、活用するかは授業担当者に委ねられた。担当実技科目においても Teams を利用することにした。授業では、同時双方向性の利点を活かしたリアルタイム映像送受信と会話、PowerPoint、資料提示、Web 上の運動系動画利用を中心に授業を展開することにした。また、Forms アンケートにより、各回授業の参加状況、Wi-Fi 環境や受講場所等の把握と授業内容へのミニコメントを求めた。毎回のアンケート（特にコメント）は、受講生が個々に取組む運動実施状況把握に有益であったと共に、次回への授業改善にとても役立った。

2)実技授業の展開

Teams を利用した新１年生対象の実技科目「健康スポーツⅠ」の基本的流れは以下のように構成した。①通信（音声・映像）確認　②皆の帰属意識を繋ぐトピックス導入会話　③前回振り返りと今日の予定確認　④担当者示範映像による運動実践　⑤健康・運動に関わるプリント配付説明　⑥担当者準備の Web 運動動画実践２本　⑦受講者検索の Web 運動動画実践　⑧Forms アンケート回答　⑨個人での毎回の授業実践記録票記入　である。運動動画はコロナ禍において需要が多いらしく、専門家から有名スポーツ選手が配信する動画をたくさん検索することができた。最も注目したのは「ラジオ体操第３」である。私も受講生も初めての体験であった。(学生の実践についての確認が、コメントと URL 記載の記録票のみになるのは遠隔授業の難点である。)

３．面接（対面）授業との併用

春学期途中からは一部対面授業が認められ、9～13 回/15 回の５回分を面接授業として行った。６月後半の開始であった。毎年の新入生と同様、初対面の学生同士は初々しく会話も少なめであったが、自己紹介の時間を取ったことで緊張は解れ、実技授業の特長でもある学生同士の運動の繋がりから学友としての絆を一気に深めていったようだ。大学生活における学生同士の繋がりの大切さについて対面授業を通して改めて認識させられた。

４．今後について

春・秋学期を通して遠隔授業と一部対面授業を経験した。講義科目「健康スポーツ概論」は四・短１年生 168 名の受講で完全 On-Line で行った。Power Point の見えやすさ、声の聴きやすさは大講義室での対面授業を上回る効果があった。実技科目の遠隔・対面授業の併用や多人数講義おける On-Line 授業の利点については、ハイブリッド式も含めて今後も活用していきたい。

科目「初等算数科教育法」
（保育教育学科３学年，春学期選択２単位，17 名履修者）

齊藤　一弥

1．実践的な学びの確保へ

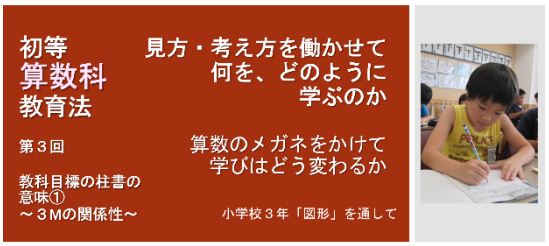
「初等算数科教育法」は，教員として必要な小学校算数科の内容について，目標論・内容論・方法論・評価論等の観点から，授業実践を基に指導法を考察する授業である。算数教育の史的変遷及び研究動向を基に，各領域に関する算数科の内容を理解するとともに授業実践の在り方を考察・検討することをねらっている。そのため遠隔授業においても，可能な限り具体的な議論を通して授業づくりの実践的な学びを進めたいと考えた。そのため，授業で取り扱う演習問題についてもチャットによる学生間で議論が可能になるようにしたり教員が議論の結果を全体共有できるようにしたりするなどの工夫を行った。

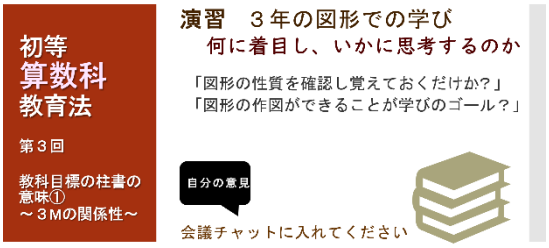
2．学生との対話的な学びづくり

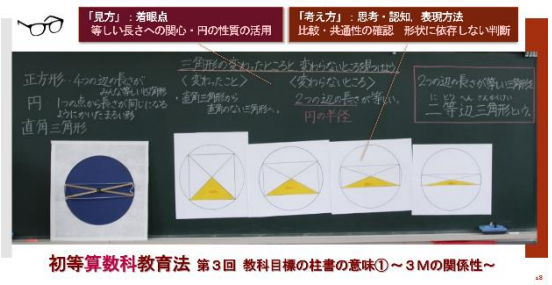
右図は授業（第３回）で使用したスライドの一部である。演習問題は，新学習指導要領の教科目標の解釈を具体的な場面を通して行うものである。

算数の授業において，学習者に学習対象の何に着目し，いかに思考・表現することを期待しているかを，小学校３年の「二等辺三角形・正三角形」の図形指導を通して考えている。

学生は「小学校学習指導要領　解説」を手元に，該当単元での図形学習において，①何に着目できるようにするのか（見方），②いかに思考するのか（考え方）を考察し，チャットを活用して課題に回答しながら，意見交換を行った。また，教員は具体的な授業場面を提示して，指導法や授業展開の具体イメージを共有できるようにした。







(1) 学生間の対話

「二等辺三角形・正三角形の何に着目できるようにすべきか」という問いかけに対する学生間のやり取り（一部抜粋）は次の通りである。

○図形を見たときに形（角度、辺の長さ）を捉えて、共通点や違いを見つけられるようにする。そしてその各性質を理解することではないか。

○二等辺三角形と正三角形の三角形を１つずつ出して、何が違うのかを自分で考え、見分けることができるようにしたい。また、円の中での三角形に着目して、角度についての視点も持つことも大切だろう。

○同じ三角形でも似た特徴を持つものがあり、仲間分けができると理解できること。またその共通となる要素を発見し、自分の言葉でそれを説明することで、様々な要素に目を向けられることだと思う。

また、「見方・考え方を働かせてどのように思考すべきか」という問いかけに対しても、

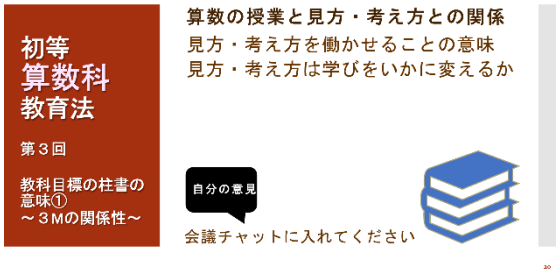
○今まで、個々でものの形を捉えてきたのを、共通の要素を持つ図形の仲間という観点で考え別の三角形の仲間分けについても考えられることが大切です。

○つまり、今まで、個々でものの形を捉えてきたのを、共通の要素を持つ図形のなかまという観点で考え、別の三角形の仲間分けについても考えられることも必要だ。

などのやり取り（一部抜粋）をすることができた。

(2) 教員と学生の対話

授業後半では、教員から学生に対して右図のように「児童が主体的に教科学習に向き合い、学びの対象を自覚することや学びの価値を実感することの価値」について問いかけた。学生からは、



○図形の構成要素や概念の共通点や類似点に着目し、それらに気付くことによってほかの単元との関連性を考えたり数学的に物事を考える資質、能力を身に付けたりすることができる。算数の授業での学びが創造的に行われたり日常生活とも関連させて考えたりする。

○見方・考え方を働かせることによって類似点や相違点を自分で考える力が身につき、単元ごとの連続性や関連性を考えることができる。

などの意見が寄せられた。これらの意見に教員が応対したりスライド上でまとめたりすることで、価値ある知見を確認するとともに、学生も自身の「省察シート」に学習成果を整理することができた。チャット機能は意見交換の場としては制約が多いものの、学生がそれを読み合ったりまとめたものを共有したりことで互いの意見の違いを確認しながら自身の考え方を省察していく上で有効であった。

科目①「理科」
（保育教育学科 3 年春学期選択 2 単位 20 名履修）
科目②「保育内容　環境」
（保育教育学科 3 年春学期選択 2 単位 34 名履修）
科目③「小学理科」
（保育教育学科 3 年秋学期選択 2 単位 10 名履修）
科目④「環境の科学」
（人間文化学部 2 年秋学期教養選択 2 単位 37 名履修）
科目⑥「生活」
（保育教育学科 2 年秋学期選択 2 単位 17 名履修）

高　橋　泰　道

１．はじめに

筆者は前年度の秋学期から，「環境の科学」「生活」において，Microsoft Office365 Teams（以下，Teams）の学修支援システムを活用し，課題の提出等を行ってきた。コロナ禍による遠隔授業を行う上で，まさか前年度からの Teams の活用が功を奏するとは思いもしなかった。Teams は，Zoom 等のオンライン授業機能だけでなく，学修支援システムが含まれていることが特徴である。その経験から，遠隔授業が決まった 3 月には，早速学内での Teams 活用方法についての教員講習会を行い，さらに小グループでの教員研修も行うことができた。この動きは，各学生がアカウントを持っていたこともあり，他大学に比べても早い動きであったと思う。

本稿では，遠隔授業が中心であった今年度の授業において，学生に可能な限り主体的な学びを保障するために行った Teams の活用を中心とした授業の工夫の一端を記しておくこととする。

２．遠隔授業における工夫

遠隔授業では，通信量軽減のために学生の顔も見られず，講義だけの一方向の授業になりがちの中，Teams においてリアルタイムでの講義を心掛け，録画機能により授業内容を再視聴できるようにすると共に，チャット機能を

活用し，学生の意見収集等を行い，主体的な学びを促した。また，「保育内容　環境」では，チャネル機能を活用し，グループでMicrosoft PowerPointで一つのシートを同時に作成し，草花遊びについてまとめ，発表する活動を行った（図1）。「理科」では，各自で自宅周辺の雑草を観察し，個人で「春の草花図鑑」を作成する活動を行った。同様に「環境の科学」においても，チャネルを活用し，SDGsについて，グループで解決方法をまとめていった。その他，Teamsの学修支援システムを活用して，動画配信，配布資料の配信，課題提出，Formsを活用した出席確認，小テストや振り返りとそのフィードバック，Insight機能による学生の参加状況の把握，成績処理等を行った。

図1　草花遊びの発表資料の一部

３．対面授業と遠隔授業

春学期後半からは，対面と遠隔の授業を隔週で行うことができるようになった。「理科」「小学理科」では，遠隔で実験の説明，演習問題をし，次時で実験演習を行い，2時間で1単元分を行った。講義と実験演習の交互の授業では，小学校教員養成のための実験技能を十分に修得することが難しいので，更に工夫をしていく必要がある。「生活」では，対面授業において，小・中学校で広く使われているアプリ「ロイロノート」を使用し，実際に作品を作成するなど，学校現場での模擬体験も行い，学生の主体的な活動を促すこともできた（図2）。

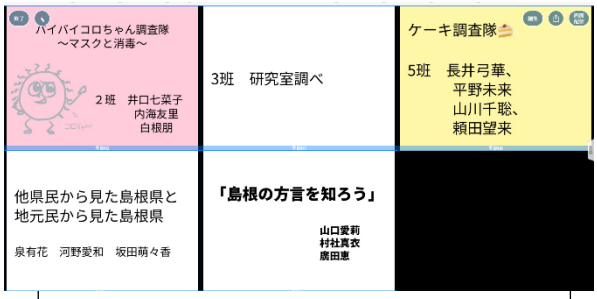


図2　ロイロノートでの発表資料

４．おわりに

今回のコロナ禍による遠隔授業については，学生のより主体的な学びを保障するための教員自らの授業の在り方を再考する機会となり，対面授業においても活用することが可能な手立てを見出すこともできた。今後は，全国的にICTを活用した教育が加速する中，さらにICT等を有効に活用しながら，新しい学びのあり方を創造していきたいものである。

科目①「教職論」
（保育教育学科、1 学年、春学期、必修、２単位、41 名）
科目②「教育原理」
（保育教育学科、1 学年、秋学期、必修、２単位、41 名）
科目③「特別活動と総合的な学習の時間の指導法」
（健康栄養学科・地域文化学科、２学年、春学期、選択、２単位、29 名）

時津　啓

1. はじめに

「ロンドンに調査に行ってきます」。今そんなことを言ったら、「気は確かか」と問いただされるだけでは済まないだろう。しかしながら、2020 年 3 月 5 日から筆者はロンドンへ飛び、1 週間の期間、情報収集、研究者との意見交換、現地高等教育機関への調査を行った。

確かに異様な光景を何度も目にした。飛行機に乗客は少なく、1 人で 4 人掛けのシートを独占できた。羽田空港まではマスクを着用したが、ロンドンに着くと、乗客はみなマスクを外した。そして今では考えられないが、ほとんどのロンドン市民はマスクもせずに、カフェでコーヒーや紅茶を飲み、地下鉄に乗っていた。幸いだったのだろうが、ロンドン市民はみな優しく、アジアからの来客を快く迎えてくれているようだった。少なくとも、筆者にはそう見えた。今はこう思う。こんなことができる日が来るのだろうか。

帰国後、だれかに「ふれる」、だれかと「話す」、だれかと「食べる」といった日常的行為は禁止され、大学から学生の姿もすっかり消え失せた。そして、オンライン授業というこれまで経験したことも、想像すらしたことがない教育活動が始まった。

2.　新たな可能性

1）Teams という厄介なもの

本学ではマイクロソフトの teams を使用し、授業を進めるようになった。まず、全体に向けて高橋先生、内山先生、西村先生が「これもできる」「あれもできる」も紹介してくださった。正直な感想は「へえ～」だった。その後、数名のグループでシミュレーションを行う研修が実施されたが、私には

「見ること」と「操作すること」の間に埋められないギャップがあり、「やばい。できるだろうか」と思った。そして、インターネットで teams の機能や便利な使い方を研究した。

いよいよ授業となった。教科①は短大の渡辺一弘先生とのオムニバス形式の授業で、私が 8 回を担当する。初回授業では画面共有の仕方もわからず、資料をアップして、それに従って授業を行った。今になって思えば、学生は大変だっただろうと推察する。学生の声を聴こう。ある学生は「ノートを取らなくていいからよかった」。ある学生は「書くことで整理できていた分、メモ書きだけだから、整理できなくて、頭に入っていく感覚がなかった」と振り返っている。その後、徐々に慣れてきて、画面共有をしながら、さらに映像も資料として使いながら授業を行うことができた。

秋学期になれば、少しはこなれたものとなり、ポインターを使用したり、音声だけで伝えやすい教材を選んだりと余裕も出てきた。学生らは言う。「授業だけではわからないことも、資料を読み返したり、友達が投稿欄に書いているコメントを見て『そうだ、そうだ』と相槌を打つこともできた」。

2）ハイブリッドの可能性

確かに、LIVE で授業を行い、学生を指名した際、音声に洗濯機が回っていることもあった。テレビの音声は日常茶飯事だ。しかしながら、前期に科目③を行った。これは LIVE、資料提供による課題解決、オンデマンド配信という三つの授業形態のハイブリッドである。この実践で、教育内容によって授業形態を変えることの合理性（効率性）に気づくことができた。

情報を与えることが中心なら、学生は好きな時に繰り返し見直すことができるオンデマンド方式は最適だろう。教員との討論を要するなら、対面や LIVE は不可欠にちがいない。そして主体的な作業を要する指導計画や指導案の作成には、学生が一人でゆっくり考えることも必要なのだ。

常に対面授業がよいとは限らない。私たちは教育内容の質を考えず、一辺倒に対面を展開していたのではないか。あたかも学生との「ふれあい」が是であるといわんばかりに。先述したコメント、すなわち「資料を読み返したり、友達が投稿欄に書いているコメントを見て『そうだ、そうだ』と相槌を打つこともできた」を参照しよう。確かにここには教授と呼べるような崇高な教えはない。さらに、知識を確実に伝える教示もないかもしれない。しかしながら、まぎれもなく少しだけ背伸びしようとする学生の学びは存在するのでないか。

科目①「国語（書写を含む)」
（保育教育学科２年春学期選択２単位 17 名履修）
科目②「初等国語科授業研究」
（保育教育学科３年春学期選択２単位 19 名履修）

中　井　悠　加

1. はじめに

本稿では、2020 年度春学期開講科目のうち主に小学校教員免許取得に関わる２科目「国語（書写を含む)」「初等国語科授業研究」において実施した双方向型オンライン授業を取り上げて報告する。どちらの科目も、COVID-19 の感染拡大によって遠隔授業に切り替わることで、授業者と履修者がいくつもの挑戦と発見を共にくり返した点に特徴をもっている。以下では、その概要を紹介し、教育の新たな時代を開く可能性として記録したい。

2. 知を共有する :「国語（書写を含む)」

1) アプリの活用による対話の確保

本科目では通常、読む・書く・話す・聞くといった言語活動を、ワークショップ形式でグループで行っている。そうすることで教員志望学生の学習観・教育観を「知の所有」から「知の共有」へと転換させることを図る授業として位置づけている。その機能を失わないように、オンライン授業では Microsoft Teams のチャネル機能や Google アプリ（Google フォーム、Google Jamboard、Google スプレッドシート）などを使用して毎時間必ず学生同士で共同作業をしたり会話をしたりする時間を設けた。Zoom ミーティングのようにブレイクアウトルームの機能がまだ実装されていない時期であったため、Teams 上では「一般チャネル」を全体活動に、その他のチャネル（「グループ A」など）をグループ活動を行う場として活用した。

Jamboard を使用することで、模造紙を広げて付箋を貼りながら学生同士で議論するのと同じ場をつくることができた。スプレッドシートは A4 のプリントを交換しながら共に意見を書き合う時間と同等の作業となった。Google フォームは各自の意見を匿名で回収し、その回答がスプレッドシートに集まる様子をリアルタイムで全員が眺めながら授業を進めることを可能にする。

授業者を含め、全員がまごつく場面は多々あったものの、以上のように教

室の仲間の意見を材料にして自分も考え、自分の意見がまた誰かの意見に影響を与えるという「知の共有」を実現するに至った。こうしたアプリは以前から授業内で使用してきたが、オンライン実施下で全員が必ずスマートフォン、タブレット、パソコンなどの何らかの「画面」をもっていることが前提になったことで、より活用の可能性が広がったと感じる。

図 1　短歌投稿例

2）SNS を活用した共詠の試み

完全遠隔授業が決定した当初、家からも出られず友人と顔を合わせることもできない学生の姿を想像しては心を痛めていた。何かの形でいつでも日常をシェアできる方法はないだろうかと思い提案したのが、写真共有サイトである Instagram を使用したフォト短歌プロジェクトである。共有の公開アカウント（@ko95_2020）上で、自分のスマートフォンに保存されている写真を使って一首詠み、「雅号」をハッシュタグにつけて毎週投稿する。例えば「写真でとにかく短歌を作ってみる」「形容詞を使わずに形容する」「比喩を入れる」「オノマトペを入れる」などの簡単な条件を毎回授業終了時に提示した。時には別の作者になりきって「自分」の作品解説をし合う活動も試みることで、相互批評の時間も設けた。

SNS 上で学生は互いの作品と近況を楽しみ、仲間と共詠する機会と創作力の向上を喜んでいた。本プロジェクトの成果はフォト短歌展「うたの葉」として、2020 年 8 月 17 日から 10 月 31 日の期間に本学松江キャンパス図書館および Instagram 上のオンライン会場にて展示した。

3. 共創の授業デザイン：「初等国語科授業研究」

本科目は専門発展科目であり、教材研究・指導案作成・模擬授業という基本の内容については昨年度すでに履修済みである。そのため、より発展的で取り組み甲斐のある内容にしたいと考えていた。それに加えて、事前に学生から「グループではなく個人でできることがしたい」と要望が出されていたことと合わせて、発展的な内容・オンライン・成果物は個人タスクという条件下で授業内容を再計画することが求められた。学外の仲間とも情報を交換する中で、「小学生向けの新しい教科書を作る」というアイディアにたどり着いた。そして、各学生が責任をもって 1 人で Teams のビデオ会議で発表し、意見を交換しながら各自が単元を作成するというオンライン授業の地図がよ

うやく思い浮かんだのである。

授業担当者を含め履修者全員が仮想の「教科書編集委員会」を組織した。「編集会議」では、単元開発の構想と教科書紙面の原稿案について、１人１回につき持ち時間 20 分（Microsoft PowerPoint を画面共有した 15 分発表＋５分質疑応答）の提案を２回行った。その際、この５分間にいかに充実した議論を行うかが最大の課題であった。ともすれば毎回沈黙の５分間をみんなで耐えなければならない危険性もあったが、「発表者以外は Teams の会議チャットに質問・意見を書き込む」という方法が学生側から提案された。発表中や回答中などにかかわらず、いつでも自分の意見を投稿できるシステムは発言のハードルを大きく下げ、全員の発言機会を確保した。議論は大いに盛り上がり、１回の授業における発言数は毎回 150 以上にのぼった。互いの発言に「いいね」などのリアクションをすることも意思表示として機能し、時には１つの発言が多くの受講者から賛同を得る、いわゆる「バズる」現象も見られた。

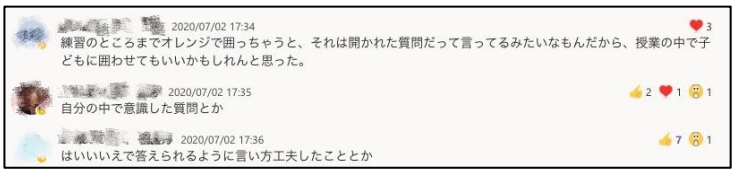


図２　「編集会議」の様子

タイトルも学生が決めた『楽しい国語　ゆめ』として最終的にできあがった小学校４年生向けの教科書は、誰でも閲覧できるよう本学松江キャンパス図書館に寄贈した。本物の教科書のような出来映えに「教科書編集委員」たちの顔がほころぶ様子は、学修成果に形を与えることの価値を教えてくれた。

以上のように、この授業は学生のアイディアや提案にヒントを得る場面も多かった。教科書を共につくるという学修内容であったと同時に、それをオンラインで可能にする授業デザインそのものも、履修学生との「共創」であったと感じている。

４．おわりに

どちらの科目においても、学生同士が共に学び合う機会を確保することを最優先事項として設定していた。計画当初は意識していなかったが、同じ双方向型オンライン授業であっても、２つの方向性をもっていたと考える。一方は対面授業にできるだけ環境を近づけようとしたものであり、もう一方はオンラインにすることで逆に学修効果が高まったものである。

今後は、いかに学修効果を高めるかということを判断基準にもちながら、柔軟に適切な学修環境の作り方を選択していきたいと考えている。ひいては、教職に就くことを希望する学生たちが、共にそうした「学びの場づくり」に意識的に関わることで自身の専門性の向上に結びつけて欲しい。

肢体不自由児指導論
（保育教育学科 2 年春学期選択 2 単位 39 名履修）

西　村　健　一

1. はじめに

コロナ禍によるオンライン授業の導入により、授業計画は大幅な変更を強いられた。特に肢体不自由児指導論は、車いすの操作や身体介助の方法など対面授業前提の内容で構成していたため授業構成を作り直した。本論では、実際に行った授業の工夫や学生の反応などついて記すことにする。

2. 授業実施の工夫

1）対面授業の精選

原則オンライン授業の中、対面が必須となる授業内容を精選した（表 1)。冬場に感染症が流行する危険性などを考え、比較的暖かい 10 月後半から 11 月前半に対面授業をまとめて実施した。その結果、当初のシラバスとは異なる授業配列となった。

対面授業で取り扱った「動作法」や「SDGs」などは、本授業の中でも学習内容が高度になるため、授業の最終段階に行う予定であった。まだ予備知識の少ない学生にどの程度伝わるのか不安を抱えながら授業を実施した。

しかし、対面授業に臨む学生の意欲は高く、専門性が高い内容についても真摯に学ぶ姿勢が見られた。学びにおいては、学生の若い力をもっと信頼しても良いという気付きを得ることができた。

表 1　対面授業で実施した授業内容

日　時	テーマ	内　容
2020 年 10 月 23 日（金）5 コマ	肢体不自由のある人への支援技法	身体への介助や支援の実際（動作法含む）
2020 年 10 月 30 日（金）5 コマ	車いすの扱い方	安全な車いすの操作方法等
2020 年 11 月 6 日（金）5 コマ	肢体不自由がある人の社会参加	SDGs などの観点を踏まえた社会参加の実際

2）双方向性の工夫

オンライン授業はリアル感が少ないため受け身的な学習になりがちである。そのため、本授業では、チャットやホワイトボードなどの機能を使って学生の反応を授業に反映させたり、授業中に指名して発言を求めたりした。

その中で特に盛り上がったのは、川柳作りである。「コロナ禍で　太ってしまった　許さない」などコロナに関する川柳を各自作り、全員発表することにした。マイクの向こうからは笑い声が漏れ聞こえ、対面授業のようなライブ感を作ることができた。

本授業における川柳には学生の気持ちが表れていた。授業後、オンライン授業の録画を見返しながら、改めて川柳を書き出してみた。すると、「友達」「会う」「旅行」など、人とのふれあいを求める内容が多いことに気が付いた。対面授業では、授業前後に友達とのかかわりがあるものの、オンライン授業は基本的に一人である。川柳を通して、大学で友達と会う機会が減り寂しさを感じている学生の存在が推測できた。

3）ゲストティーチャーの回数を増やす

オンライン授業は単調な授業になりがちであり、学生が飽きる可能性があると考えた。そこで、授業に変化をもたせながら授業の中身を充実させるため、学外のゲストをお招きしラジオ番組のように対話をしながら授業を進めた。今回の授業では、リコージャパン株式会社松江事業所の佐藤千恵氏、社会福祉法人みずうみの岩本雅之氏、島根県教育委員会特別支援教育課の日髙修司氏に参加していただき、貴重な知見を学生に伝えることができた。

3. 最後に

コロナ禍において急速に広まったオンライン授業ではあったが、結果的に大学全体の ICT 化を進めることにつながった。これから社会に出ていく学生にとっても ICT に慣れていることは重要である。一方で、オンライン授業により人と関わる場面が減少しており、孤独を感じる学生の存在も明らかとなった。

また、肢体不自由児指導論は、車いす操作や身体介助など実学的要素が強く、限られた対面授業の中で学生が必要なスキルを習得できたのか不安は残る。

特に将来の「先生」を目指す保育教育学科においては、実体験を通した理解の深まりが必要である。今後、コロナ禍が大学教育に与える影響を見通すことは難しいが、可能な範囲で対面授業を取り入れていくことで、学生の人間力を高める努力も必要となるであろう。

科目「幼児と造形表現Ⅱ」
（保育教育学科 2 年春学期選択 1 単位 21 名履修）

福　井　一　尊

1. 題材「孔版版画に挑戦」の位置づけ

本稿では、造形実技の授業をオンラインで行い、シラバスに示した目標を達成するために実施した授業題材「孔版版画に挑戦―ステンシル技法を用いて―」について報告する。対象科目は、幼稚園教諭一種免許状と保育士資格取得のための科目である。版画の活動には大きく分けて。凸版、凹版、孔版の三種類の版づくりの方法がある。受講生は全員が、前年度において造形表現系の必修授業を受講し、彫刻刀による凸版版画の実技を経験している。凸版版画は一般的な版画技法ではあるものの、幼児教育の現場で子どもたちの活動として実践することは難しい。そこで、本題材では、幼児教育の現場における版画活動を展開する力を育むためのものとして位置づけ、孔版版画の一つであるステンシル技法を用いた作品制作を行った。

2. 題材の目的

幼児教育者に必要な力の一つとして、一種類の材料、技法から多様な活動を展開することによって、対象となる子どもに様々な発見や造形的経験を促す力を挙げられる。また、版画制作の着彩にはローラーを用いることが多いが、これらの用具は幼児教育の現場に必ずしも準備されているとは限らない。今回は受講生が自宅等で準備できる物品を使うことが最低条件であるため、ローラーの代用として食器洗い用のスポンジを設定した。この場合、筆で絵の具を扱う際の水分量では上手くいかないため、活動に適した水分量について考える契機となる。そのため本題材では、水溶性絵の具の性質を理解し、日用品を活用した多様な教育活動を展開できる力の獲得を目的とした。

3. 授業実践

(1)筆者が制作した動画①の視聴によって、孔版版画の仕組みについて学ぶ。

(2)受講者が、紙とハサミで孔版を作り、スポンジを用いて試作を作成する。

(3)動画②によって、ステンシル技法による作品化について、筆者の制作過程の画像を多数見ながら学ぶ。

(4)受講者が自宅等で準備した物のみを用いて、デザインから版画作品の仕上げまでを行う。今回は、誰かに送る封筒を作ることだけを指定して実施する。

(5)完成した作品については、その日のうちに Microsoft Forms で画像とコメントを提出する。次の授業時に、筆者が全員分の作品画像と、共有したいコメントについて紹介・解説を行って、授業の双方向性を保ち、学習内容を定着させる。

４．受講生のコメント

T.M　家で簡単にあじのある作品が作れるのだなと感じました。紙を切り抜くだけなので、自分なりにアレンジがたくさんできるところが良いところだと思いました。

M.H　絵具で塗る時と違って、ふわっとした味が出てとてもきれいな作品になりました。

T.H　普段はみんなで作業しているのに対し、今日は１人で黙々と作業したので、授業をみんなで行うことも造形活動の楽しみ方の一つなのかなと感じました。

K.A　いつものように皆と授業する時は皆のアイデアを見て楽しむことも出来ますが、今日の個別活動はとても集中して行うことが出来ました。

5．考察とまとめ

今回の実践では、実技科目におけるオンラインならではの利点を感じることができた。まず、動画での活動の説明であったため、受講者が各自のペースで、一時停止したり、繰り返し視聴したりできることで、技法の理解を促し、一人ひとり異なるコツをつかむ時間を保障することを可能にした。受講生の感想からも、説明が分かりやすく、実技に集中することができたという内容を多数読み取ることができた。また、それぞれが異なる環境で受講したからこそ、教室内にある材料や教師が準備した物に限定されることなく、素材用途の多様性への気づきが得られたといえる。このことは、教育現場での限られた用具、教材で最大限の教育効果を目指してく視点を育むことにもつなげて考えることができる。

その一方で、対面授業で当たり前に行えていた、他者との関りの中で発想を広げたり思考を深めたりしながら進む表現活動はできなかった。また、本実践では、個人の表現の深まりに重点を置いたため、個別の指導や、受講生が抱いた多様な困難に即座に対応することができなかった。そして、今回の進め方では、自らの活動をリアルタイムで教師や友人から認められる機会が無かったため、認め合いによる相互発展の機会が失われたといえる。今後の改善点として、他者の作品や発言から得られる情報が、作者なりの表現に昇華されていくプロセスを取り入れていきたい。

どのような時代であっても、幼児期における造形活動の充実は不可欠であるため、教員養成校において学生が手と目と心を動かして伸びていく姿を保障していきたい。

科目①「保育実習Ⅰ（施設）/ 保育実習ⅠB」
（保育教育学科 2 年春学期選択 2 単位 27 名履修）
（保育学科 2 年春学期必修 2 単位 42 名履修）

科目②「保育実習Ⅰ（施設）指導」
（保育教育学科 2 年春学期選択 1 単位 27 名履修）

科目③「社会的養護Ⅰ」
（保育教育学科 1 年秋学期必修 2 単位 42 名履修）

科目④「社会的養護Ⅱ」
（保育学科 2 年秋学期必修 1 単位 43 名履修）

科目⑤「子ども家庭福祉」
（保育教育学科 2 年秋学期必修 2 単位 42 名履修）

科目⑥「卒業研究基礎演習」
（保育教育学科 3 年秋学期必修 2 単位 3 名履修）

藤　原　映　久

１．施設実習関係（科目①、科目②）

新型コロナウイルス感染症の影響により、実習施設の確保が困難となったため、科目①は学内での演習等に切り替えた。科目①は、「施設の実際（施設職員による講演）：10 時間」、「子育て支援プログラム演習：6 時間」、「障害体験：4 時間」、「対人援助演習：5 時間」、「食育体験：4 時間」、「遊び体験：3 時間」、「余暇活動演習：4 時間」、「作業体験：3 時間」、「レポート作成：10 時間」から構成された。また、科目①は保育教育学科と保育学科が合同で実施した。学生からは現場での実習ができないことに対する残念さも示されたが、本年度の取り組みならではの多様な体験に対する肯定的な評価も認められた。

なお、科目②に関しては、Microsoft Teams（以下、Teams）を使用した遠隔授業を実施した。動画配信を中心としつつ、ライブ講義、画面共有による DVD 視聴を組み合わせたが、ライブ講義、画面共有による DVD 視聴では通信障害が生じ、全ての受講学生に十分な授業内容を届けることができなかった。

２．講義・演習科目

科目③～⑤に関しては、全て Teams を使用した遠隔授業を実施した。科目②

で生じた通信障害を避けるため、全てを動画配信とした。

１）授業構成

（1）科目③～⑤

基本的な授業構成は以下のとおりであり、①～④の流れで授業が進んだ。

①出席の申請と確定

授業の開始時に、Microsoft Forms（以下、Forms）で受講学生に出席を申請させた。ただし、出席の確定は、②の「小テスト」と④の「復習テストもしくは感想」の両方の提出の確認をもって行われた。

②小テスト

Forms により、前回の授業の小テストを実施した。出題数は 10 問で、解答可能な時間を授業開始 5 分後からの 20 分間に限定した。

③動画視聴

受講学生に対して、パワーポイントを使用して作成した 10～20 分間の動画 3 本程度を授業時間内に視聴することを求めた。

④復習テストもしくは感想

動画視聴後、科目③に関しては、動画視聴で学んだ内容に関する復習テスト（10～15 問程度）を Forms で実施した。科目④、⑤に関しては、感想・質問・意見を Forms で提出させた。いずれも授業時間内に提出できなかった場合は宿題とし、翌日の 18 時を提出期限とした。

（2）科目⑥

活発な討論が求められるゼミナールであり、人数も 3 人と少ないことから、通常の対面方式で実施した。ただし、ゼミ活動の一環で行った「里親出前講座（里親が自らの里子の養育体験を語る講座）」に関しては、Teams の会議機能を利用して里親と担当教員が本学からライブ配信し、学生は自宅で受講した。

２）成績評価

遠隔授業を基本としたため、対面の筆記試験は実施せず、成績評価は小テストや復習テスト等の提出物から行った。なお、科目④、⑥に関しては、期末レポートを課して Forms で提出させた。

３．まとめ

科目①、⑥以外は、動画視聴を中心としたオンデマンド形式の授業であり、授業中の質問等は Teams のチャット機能を利用した。よって、双方向性の弱い形式だったが、学生からは「自分のペースで学ぶことができた」、「必要な箇所を繰り返し視聴できた」と、比較的好評であった。しかし、動画の作成に時間がかかり、授業準備の負担が高かったため、今後はより効率的な動画作成を行う必要がある。

科目①「子どもの保健Ⅱ」
（保育教育学科 3 年春学期選択 1 単位 31 名履修）
科目②「乳児保育」
（保育教育学科 3 年春学期選択 2 単位 30 名履修）

前林　英貴

1. はじめに

令和 2 年の初頭に始まった新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020 年度の本学の授業はマイクロソフト社の teams を使用した遠隔授業で始まった。小中学校などが休校になるなか、本学での遠隔授業に関する体制整備は全国でも比較的早かったのではないだろうか。当初は緊急的な一時対応に近い感覚もあり、感染拡大が収束するまでの暫定的な処置として捉えることもできた状況下であったが、疫学的な観点から長期化する可能性も示唆されていたため、コロナ禍のような不測の事態に対応できるよう大学としての授業体制の確立をいち早く進めていく必要があった。大学などの高等教育においても過去にあまり前例のない遠隔授業ということであったが、教育の多様性という観点からこれまでＩＣＴを活用した教育システム構築の必要性などは常に求められてきており、今回はそういった体制整備を急速に進めざるを得ない状況であったと言えるだろう。

保育士養成のための科目には、講義科目・演習科目・現場実習の大きく 3 つに大別される。資格・免許などを認定する養成校にとっては、これらの科目群は専門的な知識やスキルを身に付けるためには必須のカリキュラムであり、4 年間もしくは 2 年間で段階的な専門教育のステップを上ることになる。今回、このコロナ禍で実施した私が担当する科目について、実践例と反省について紹介したい。

2. 講義系科目について

これまで私が担当していた講義科目については、対面であっても従来パワーポイントを使用して講義を行っていたため、今回 teams での遠隔授業となっても特に問題はないと感じていた。実際に teams でパワーポイントを画面共有して講義を行なった感想としては、出席の確認に時間を取られる、学生への質問に対する回答のレスポンスが遅いなど、時間の組み立ての難しさは

あったが、本来教示すべき内容は遠隔授業であっても問題なく伝えることが出来たと感じる。また、前述した問題点だけでなく teams を使用したことによる利点もあった。例えば講義室でプロジェクターを使用しての講義に比べ、スライドに貼り付けた画像は学生の観ている画面へ鮮明に表示されるため、視覚的な教育効果はより高いように感じた。これは、配布する資料についても言えることで、紙媒体での配布は基本的に白黒印刷だが、遠隔授業では PDF ファイルで配布資料を配信していたため、学生はカラー版で資料を受け取ることができるからである。

3. 演習系科目について

実技系の演習科目である科目①においては、マネキンや器具を用いての授業内容が大半であったため、この科目の達成目標である「技術の習得」をいかに満たすかが課題であった。加えて評価に実技テストの 2 回分が含まれていたため、今回授業内容と評価方法の変更を検討しなければならなかった。授業の構成については、全 15 回の授業のうち、前半に遠隔授業（講義）に変更できるものを移動させ、習得すべき手技の解説については図書館所蔵している DVD 教材や、私自身がビデオカメラで作成したオリジナル動画で紹介した。

一回目の緊急事態宣言が解除され、一部対面授業が許可された以降は、学生へ事前アンケートを forms で送付し、残りの授業について対面で参加したい演習内容の希望を聞いた。また、実技テストを中止し、代わりに自己練習の時間を設け、実習に向けて希望者に手技獲得の機会を与えた。対面授業の実施にあたっては、授業前の検温や手洗い、手指消毒を参加学生に徹底し、演習中の換気や使いまわし器具のその都度の消毒などを徹底した。一方で対面での授業を希望しない学生については対面での参加を強制せず、これまで通り遠隔授業での参加とし、ipad と三脚を用いて演習の様子をリアルタイムで配信するなど、演習の内容が対面で参加しない学生に少しでも伝わるような配慮をした。しかし、対面と遠隔授業のハイブリッドでは、演習に参加している学生に教員の意識が集中してしまうと、遠隔で参加している学生への配慮が疎かになるなど、演習参加者と遠隔での参加者の全員に対して同程度に対応する難しさを感じた。これは授業後の感想でわかったことであるが、このような課題がある一方で、ハイブリッド授業の可能性を感じた。

4. 演習系科目から講義系科目への変更

講義と演習を組み合わせて行っている科目②では、従来科目①の演習内容に授業内容を関連させて授業を行っていた。今年度に関しては、科目②の演

習部分を科目①の授業のなかで厚みを持たせるように行い、科目②の授業 15 回分を全て遠隔授業で講義形式とした。また、うち 2 コマ分のグループワークに関しては個人ごとの課題に変更し、オンライン上で課題発表してもらう形式に切り替えた。

5. これからの教育体制

今回の新型コロナウイルス感染拡大に伴う授業体制を今年度限りの対応として捉えるのか、次年度以降にも活用できると捉えるかで、事前の準備に向けての心構えが大きく異なった。冒頭にも述べたが、今回の新型コロナウイルス感染拡大による影響はすぐに収束するものではなく、元の社会環境に戻るには数年を要する可能性がある。また、これまで国や自治体が警戒を続けている新型インフルエンザについても、今後同様の対応を迫られる可能性があるだろう。結果的に、教育方法の多様性が広がったと感じている。今まで、中々整備が難しかったＩＣＴを使った教育システムや労働環境が皮肉にも新型コロナウイルスで急激に進んだともいえる。身体的、精神的、社会的な理由によってこれまで対面での授業が困難であった学生に対してはこれを好機と捉え、これまでの教育環境にリバーズするのではなく、「グレートリセット」も必要なのではないかと感じた。

科目①「保育内容　人間関係」
（保育教育学科 3 年春学期選択 2 単位 34 名履修）
科目②「保育実習Ⅱ（保育所）指導」
（保育教育学科 3 年春学期選択 1 単位 29 名履修）

矢　島　毅　昌

1. 遠隔授業と相性の悪い、これまでの授業スタイル

2020 年度春学期に筆者が遠隔授業で担当した科目のうち、特に対応が必要となった科目は「保育内容人間関係」「保育実習Ⅱ（保育所）指導」である。両科目を保育教育学科で実施するのは初めてであったが、旧短大部保育学科で過去に実施してきた授業を元に進める予定であった。

以下は、遠隔授業が実施される以前の筆者の授業スタイルである。

[1] 配付資料を A3 サイズ（横）で作成し、紙の両面に印刷する。

[2] 配付資料の補助として、スライド資料を利用する。

[3] DVD・Blu-ray Disc・カメラで撮影した動画等の映像資料も利用する。

このように、A3 サイズの紙の資料を中心に据え、スライド資料一辺倒にならないよう意図的に様々な手段を取り入れた授業スタイルを作ってきた。しかし、この授業スタイルは Microsoft Teams による遠隔授業と相性が悪い。

特に[1]は、学生がスマートフォンで資料を読むことや、自宅のプリンターで資料を印刷することを考慮すると、A3 サイズの資料は不便であり、A4 サイズで資料を再構成し直す必要がある。ただ、筆者の場合は、A4 サイズの原稿を 2 枚並べて A3 サイズで出力することは基本的にしておらず、最初から原稿サイズを A3 サイズに設定し、主に Adobe InDesign で作成することで、時には用紙の左右を貫通するレイアウトも採用している。そのため、A3 サイズの資料を A4 サイズで再構成し直す作業は、思っていた以上に厄介であった。

「こんなことなら、資料は全部 Microsoft PowerPoint で作っておけば良かった」[注)]と思っても、後の祭りである。

2. 遠隔授業での取り組みと反省点

このような筆者であるが、遠隔授業の実施にあたり最も留意したのは、学生側の通信負荷の軽減である。具体的には、極力「会議」機能によるリアルタイム講義を減らし、「投稿」機能による授業の進行を中心としたことである。こ

れにより、通信データ量を減らすだけでなく、学生側の通信状況が悪くても個々のペースで授業を進められるように留意した。ただ、この「投稿」機能は、かつて「掲示板」や「チャット」を使っていた筆者には見慣れたインターフェイスであるが、当初は学生が少し使いにくそうにする様子も見られた。

「投稿」機能を使った授業では、まず授業の流れと予定時間を投稿し、以降は作業内容と資料を予定時間に合わせて順次投稿するようにした。この進め方には、「理解に合わせてじっくり取り組める」と好意的な感想があった一方で、「授業を受けている感じがしない」と不満そうな感想もあった。なお、学生にダウンロードしてもらう遠隔授業用の主な資料として、補足説明用の音声データを埋め込んだ PowerPoint 形式のファイルを作成した。

3. 遠隔授業用ツールのコミュニケーションから見えた今後の課題

遠隔授業では、対面授業とは異なる形で場を共有する教員と学生とのコミュニケーションを工夫する必要があるが、筆者にとっての課題も見えてきた。

「投稿」機能は少ないデータ量で双方向かつオープンなやりとりが可能になるので、その特徴を生かして「みんなの読後感想文」と称する取り組みを何度か実施した。これは、受講者全員に実践報告やニュース記事などの課題文を読んでもらい、その場で感想をオープンに投稿してもらうものである。この取り組みは「他の学生の考え方がわかって参考になる」と一部で好評であったが、これが 3 年生ではなく入学直後から遠隔授業ばかり受けている 1 年生を対象とする授業であれば、「よく知らない他人だらけの場で自分の考えを曝け出すのは違和感がある」というような不評が多かったかもしれない。

同時に、自分の感想や考えを他者に表明する取り組み自体の是非も問われるだろう。ただ、これは遠隔授業に特有の課題ではなく、「学生間の対話や協働」「教員―学生間の双方向性」などを重視する教育全般の課題とも言えるだろう。筆者は学部生時代、学科内や履修する授業内に友人がおらず、一人で授業に出席して粛々とやっていくタイプの学生だったので、それが許容されにくい時代の難しさも感じている。

注）大学院入学時に人生で初めて購入したパソコンが Apple iMac（Rev.C）である筆者は、スライド資料作成ソフトとして、Apple Keynote を最初のバージョンから愛用している。PowerPoint は、かつて高級品だったことに加え、Macintosh 用と Windows 用との互換性が低かったことから、大学院生時代よりほとんど使っていない。複数の OS で資料を利用することになった時は、今でも Keynote から PDF に変換している。個人的には、タブ切り替え式のツールバーが苦手なので、Microsoft Office2007 以降の操作は苦手である。

科目「教育心理学」
（保育教育学科 2 年春学期必修 2 単位 43 名履修）

山　田　洋　平

1. オンデマンド型のオンライン授業の取組

「教育心理学」（全 15 回のうち，10 回が著者担当）では，主にオンデマンド型のオンライン授業（以下，オンデマンド型授業）を採用した。オンデマンド型授業は，授業担当教員が事前にアップロードした動画教材を視聴し，受講学生が個別に学習を進め，課題に取り組む授業である。視聴する動画教材は，毎回 15 分前後の動画を 4 本程度準備した。なお，動画教材は，PowerPoint（Microsoft 社）のナレーションおよびビデオ作成機能を活用して作成した。標準的な授業の流れを，図 1 の授業形式 A に示す。

授業の実施にあたって，双方向型オンライン授業の実施も考えられた。しかし，授業開始当初はオンライン授業の実施決定直後であり，教員と学生の環境整備が十分と言える状況ではなかった。そのため，講義中に音声が途切れるなどの通信上の不具合や教員の不慣れな操作による授業の遅延などが発生し，学生の授業理解度に望ましくない影響を与えることが懸念された。それに対して，オンデマンド型授業では，万が一授業時間中に不具合が生じた場合でも，授業時間外に動画教材を視聴することが可能となる。こうした理由から，この授業ではオンデマンド型授業を採用した。

2. 授業方法の工夫

オンデマンド型授業の実施にあたり，教員と学生および学生同士の交流機会の減少，学生の学習状況の把握の困難さが課題として考えられた。そこで，次のような工夫を行った。

1）グループ活動を含めたオンデマンド型授業の実施

標準的なオンデマンド授業（図 1 の授業形式 A）だけでは，授業時間のほとんどが動画視聴となり，授業のマンネリ化が懸念された。そこで一部の授業では，授業前半部にオンライン上でのグループ活動を実施し，後半部に動画視聴を行う授業形式を取り入れた（図 1 の授業形式 B)。

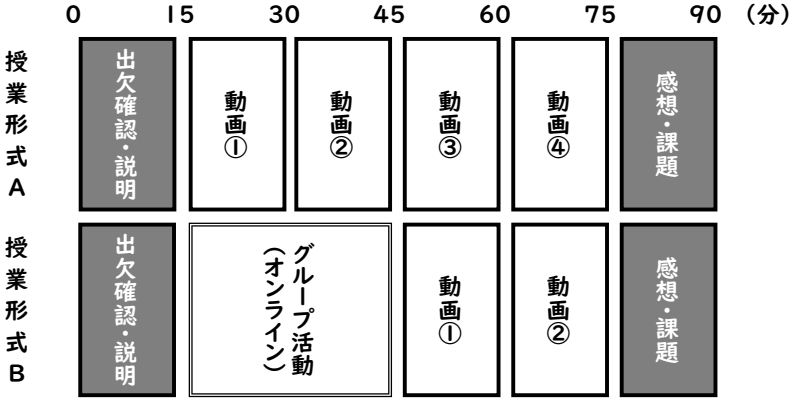


図 1　本授業での 2 種類の授業形式

2）動画の視聴時間の調整

冒頭で述べた通り，動画教材 1 本あたりの視聴時間は 15 分前後に設定した。主な理由は学生の学習意欲への配慮であり，学生の視聴に対する集中力の継続時間を考慮した。

3）授業の感想に対する返答

学生の学習状況の把握と学習内容の理解を深めるため，学生には，各授業後に質問や感想の記述を求めた。得られた質問については，必ず次回の授業時に回答することを徹底した（図 2）。

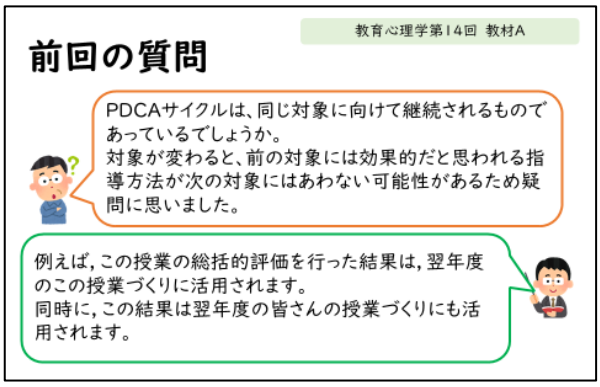


図 2　授業の感想への返答スライド例

4）授業前の雑談タイム

オンデマンド授業では教員と学生との交流機会が不足してしまい，学生が教員や授業に対して冷淡な印象を持つことが予想された。教員や授業に対するネガティブな印象は学習意欲にも影響する可能性があるため，授業開始前の休憩時間を活用して，学生との交流機会（以下，雑談タイム）を設定した。雑談タイムは，教員の独り言（最近の気候，休暇の予定，我が子の成長など）をチャット形式で投稿した。学生には無理な参加を促さず，学生からの反応があった場合には返答するように心がけた。

3．学生の反応（授業理解度と感想）

学生には，毎授業後の振り返りとして，1）授業理解度（例：「授業は理解できた。」）について 5 件法（5：とてもそう思う～1：全くそう思わない）での回答と 2）授業の感想について自由記述による回答を求めた。

1）授業理解度

授業理解度の平均得点は 4.46 であった。また，授業形式ごとの平均得点はどちらも高い値（授業形式 A，4.43；B，4.51）となり，授業形式にかかわらず学生は学習内容をある程度理解できていた。

2）授業の感想

授業の感想として得られた回答のうち，授業方法の工夫に関連する回答を表 1 に抜粋した。教員が授業実施において工夫した①グループ活動を含めたオンデマンド型授業の実施と②動画の視聴時間の調整に対する学生の肯定的な回答を得ることができた。②については，学習内容の理解を深めるために，一度で理解できなかった箇所を何度も繰り返し視聴していた学生もいたようであった。この点はオンデマンド型授業のよさと捉えることができる。

表 1　学生からの授業の感想（一部）

〇グループ活動のよさ
・今日のように実際に体験してから動画を見ると理解しやすくて、こういうことだったのかという発見や学びがあったので良いと思いました。
・今日はワークがあり久しぶりに友達と会話をした感じになって楽しくできて良かったです。
〇動画教材について
・動画が 4 つに分けられているので、視聴時間が長く感じず最後まで集中できます。
・教育心理学の講義は、動画が細かく分けられていて見やすくオンライン授業でしたが集中して取り組むことができました。

4. 苦労したこと

最後に，オンデマンド型授業を実施するにあたって，苦労したことを 2 点あげる。1 点目は動画教材の作成の大変さである。通常の対面授業であれば，事前準備はスライド作成が中心となる。しかし，オンデマンド型授業では，ナレーション録音，動画作成，動画教材のアップロードなどの準備が追加される。その結果，事前準備にかかる時間は通常の約 3 倍となった。

2 点目は情報機器操作の個人差への配慮である。情報機器の操作熟達度によって，動画教材の視聴や課題に向かうための操作時間に大きな個人差が生じていた。それにより，授業時間外に動画視聴や課題に取り組む学生も数名いた。こうした個人差を含めた授業の時間配分は今後の課題となる。

４）人間文化学部地域文化学科

科目①「しまね文学探訪」
（地域文化学科 1 年春学期選択 2 単位 57 名履修）
科目②「近代文学Ⅰ（郷土文学）」
（地域文化学科 2 年春学期選択 2 単位 39 名履修）
科目③「日本文学史Ⅱ（近代）」
（地域文化学科 2 年秋学期日本文化コース必修 2 単位 55 名履修）
科目④「近代文学Ⅳ（絵本と童話）」
（地域文化学科 3 年春学期選択 2 単位 44 名履修）
科目⑤「近代文学演習Ⅰ」
（地域文化学科 3 年春学期選択 2 単位 35 名履修）

岩　田　英　作

1. 遠隔授業で物語を届ける

筆者の専門は日本の近代文学である。2020 年度は、上記①～⑤の科目をすべて遠隔で実施した。①はフィールドワークを主体とした科目であるが、実際に現地に出かけることはできなかったので、GoogleMap をパソコンの画面に映し出して、「はい、これが津和野の町並みですね」などと言いながらお茶を濁すしかなかった。②は郷土文学中心、④は児童文学中心と、それぞれの科目で味付けは異なるものの、要するに近代の小説を中心とした物語を、Teams でつないで研究室のパソコンから学生に届ける 1 年だった。その際、通常の対面授業の時より強く意識したのは次の 3 点である。

1）声（言葉）を届ける

Teams の授業を始めて、戸惑いの一方で新鮮な気分も生まれた。なにより、教室で学生と向き合うことなく、離れたところにそれぞれにいるであろう見えない学生たちに向かって発信するそのことに、ラジオの DJ のような気分もなかば味わいつつ、「午後のひととき、きょうは太宰治を読んでみましょう」と語り掛けたりした。

自分の声を届けること。言葉を届けること。そのことに、自然と意識的になった。文学の授業の中で、作品を読むことは言うまでもなく重要な要素である。学生に順番を決めて朗読してもらうこともあったが、多くは筆者のほうで読んだ。下読みには、いつも以上に念を入れた。

作品を声に出して読むことについては、従来の対面授業においても、その

重要性を学生に話すことはあった。一つには、小学、中学、高校と上がっていくにつれて朗読から遠ざかり黙読でしか物語を享受しなくなっていること、もう一つには絵本の読み聞かせの授業の蓄積が自分にあったことが、その背景にある。

それが、このたびの遠隔授業で、さらに輪をかけて朗読に対して意識的になっていった。この意識の変化は、もしかしたら、学生との距離感が影響しているのかも知れない。教室という空間を離れて遠くにいる学生たちに自分の声を届けることに、その遠さゆえに、より届けたいという願いがこもったのかも知れない。

2）画面上の工夫

対面授業の場合、筆者はパワーポイントの使用と並行して板書を行うことも多い。それは、計画された板書というより、その時々で補足的に行うことが大半である。そこでなされる伝達は、板書の文字だけでなく、教員の身振り手振りや表情も含め、それらの総体として学生に向けて発せられるものであるだろう。しかし、遠隔授業では、そうしたことが筆者には容易ではなかった。

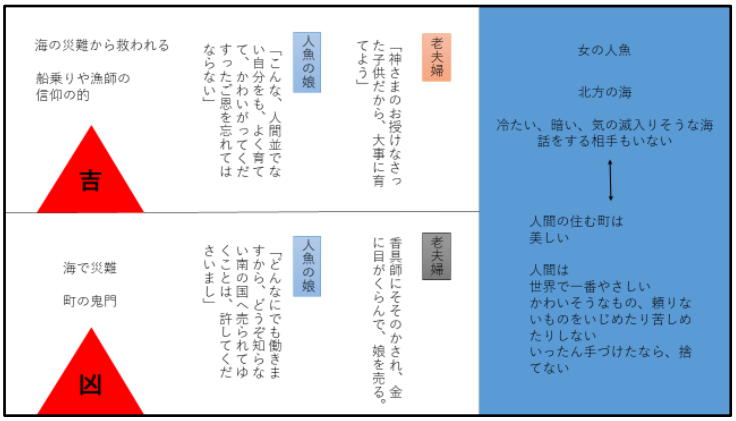


図１：科目④で用いた童話の説明図

自身のパフォーマンスが制限されるぶん、できることは、パソコンの画面上に表示する図などをできるだけ見やすく、理解しやすいものにすることだった。例えば、図１は科目④で用いた小川未明『赤いろうそくと人魚』の説明図である。人魚に対する老夫婦の変化、それに伴う山上のお宮が持つ意味の変化を簡潔に表そうとしたものである。こうした工夫は、対面授業の時から常に更新されるべきことではあるが、遠隔授業を機にその必要性を改めて認識した。

3）学生のコメントの充実

この度の遠隔授業では、担当したすべての授業で、学生に毎回授業についてのコメントの提出を求めた。対面授業の時も、コメントを書かせることは珍しくなかったが、明らかな違いが見られた。ひとことで言うと、対面授業の時のコメントより、遠隔授業で学生たちが書くコメントのほうが読み応えがあったのである。量的にも質的にも、それは言えることだった。50 名前後のコメントを読むのはそれなり時間を要するが、個々の学生の受け止め方の

多様さにある時は驚嘆し、またある時には学生の真剣な吐露にしばらく立ち止まって考えさせられることもあった。毎回、授業の始まりの 3 分の 1 は前回のコメントのまとめと質問などへの応答にあてるように自然となっていった。時に、興味深いコメントをくれた学生と音声でやりとりをすることがあったが、それは思いがけないほどの心地のよい時間だった。

対面授業の時には、授業の残り 10 分程度をあててコメント用紙に書かせることが多かった。対して遠隔授業では、授業のあった翌日いっぱいを期限として Forms を用いて提出させることがほとんどだった。この時間差からして、遠隔授業のコメントが充実することは当然の帰結と言える。しかし、原因は果たしてそれだけなのか。筆者はそこのところに、ややこだわってみたいと感じている。遠隔授業のコメントには、学生個々の内面に深く関わるものが見られたことが強い印象としてある。それがたんに考える時間が物理的に長くなったことによるものか、それとも、もしかしたら、教室で受講者全員に向けて講義する対面方式とオンラインでひとりひとりに話しかける遠隔のスタイルとの差もそのことに影響しているのか、今後も関心を持っていきたい。

2. 学生の感想から

秋学期に開講した科目③の最終回で、「この授業では、明治・大正・昭和の作家・作品について、Teams による朗読や映像、解説を通して紹介してきました。受けとめる皆さんとしては、いかがでしたでしょうか。」という設問でコメントを求めた。

52 名の回答中、遠隔授業に対する否定的な意見は見当たらなかった。むしろ遠隔授業であることは特に気にならなかったという意見や、「遠隔授業でしたが、それが逆に心地よくてお話に集中できました。」というように遠隔授業をプラスに評価する意見が複数見られた。そのほか、「朗読は、この年になるとなかなか他人にしてもらうことがないため、聞いていて楽しかったです。」「みんなのコメントがしっかり紹介されて、色々な見方や知識が授業の最初に共有されて、次のコメントシートの参考になりました。」など、朗読やコメント紹介に関する意見があった。

しかし一方では、さらりと義務感だけで書いたようなコメントも散見された。「差がついたな。」それが筆者の率直な感想である。遠隔授業は、対面授業よりも、学生の意識次第できわめて高い成果をもたらすこともできるし逆にもなりうる、その振幅が大きいように思う。授業担当者の課題もそこから導かれねばならない。

科目①「しまね図書館学」
（地域文化学科、2年、秋学期、選択、２単位、履修者数４０名）
科目②「スタートアップセミナーII」
（地域文化学科、１年、秋学期、必修、２単位、履修者数１１名）

木内公一郎

１．しまね図書館学

しまね図書館学は島根県や松江市の図書館が直面する地域課題をグループで調査研究し、解決策を提案、プレゼンテーションを行うという授業である。

全授業の半分の期間は学生によるグループワークである。今年度は遠隔（Teams）形式で実施した。個人の研究テーマを募ったうえで、比較的近接するテーマの学生をグループ化し、Teams のチャネルを作成、そのなかでグループワークを行った。対面することがないワークは学生も初めての経験であったが、予定どおり全９グループは最終発表まで実施した。

もともと２年生にとって長期間の研究プロジェクトは初めてであり、スケジュールの管理や調査は困難を伴う。その上に音声中心のコミュニケーションの難しさに直面した学生も多かったようである。担当教員は研究プロジェクトの運営方法について講義を事前に実施したが、実践では苦労したようである。グループによっては授業時間外に対面で集合して打ち合わせをしたり、チャネルを開いたりして、研究を進めたようである。作成した資料は Teams ファイルに格納し、共有した。

教員は毎時間各チャネルを巡回し、相談や指導を行った。

グループによっては学生自ら Forms を使ってアンケートを実施するなど学生の IT スキルのアップにつながった。

2. スタートアップセミナーII

１０月に１年ゼミ学生全員の面談を実施したところ、「遠隔疲れ」で学習のモチベーションが低下していることが明らかになった。そのため可能な限り対面授業を実施した。スタートアップセミナーII の概要としてはゼミ単位で研究発表に向けて学修と準備を行い、１月の交流発表会がゴールとなる。

授業の進め方としては個人指導、グループワーク、発表資料の作成、発表練習が中心である。また１１月中旬には学外授業として島根県立図書館を訪問し、文献探索と収集を行った。

ゼミの研究テーマは春学期のレポートから継続して「地域または文化に関する情報の収集、保存、伝達、活用」である。学生にはその範囲内で自由に研究テーマを設定し、自主的に研究を進めるように促した。これは遠隔授業で受け身になっている姿勢を改めてもらい、自分で研究を進めることの面白さを理解してもらうことも意図していた。

対面形式にしたもう一つの理由は学生同士の人間関係の確立である。学外授業の後は学生だけでランチに出かけ、１２月にはクリスマス会の企画をするなど、ようやく学生らしい生活がほんの少しだけ実現できたことがスタートアップセミナーII（木内ゼミ）の成果である。

3. 教員から見た遠隔授業

Teams は学習マネジメントシステムとしての特徴が備わっており、対面よりも授業の準備、実施、課題の設定、学生へのフィードバックは格段に効率化した。もともと PowerPoint を利用する授業を展開していたため、スムーズに遠隔授業に移行できたことはよかった。今後、本格的に対面授業に戻ったとしても補完的に Teams を使うことになると思われる。（了）

科目①「観光と文化」
（地域文化学科１年春学期必修２単位 77 名履修）
科目②「観光と地域資源」
（地域文化学科１年春学期選択２単位 54 名履修）

工藤泰子

コロナ禍、講義形式の担当科目においては、Teams による双方向型の授業を実施した。ここでは、春学期に担当した上記２科目について紹介したい。

1.　Teams 授業初日までの準備

私にとって Teams を使った初めての授業（科目①）は、新学期初日(4/21[1])の１限目、つまり、入学後間もない新入生にとっても大学生活初めての授業であった。以下は、特に新入生対象の授業ということを意識して準備した点である。

1)授業初日までの準備

① 配布資料作成の工夫

２月半ば、国内感染状況から、通常通りの授業が実施できない事態を予測し、例年よりも早めに資料の作成を開始した。その頃は Teams のことなど全く念頭になく、本学がそれまで利用していた TV 会議システム、または、Skype、動画作成のいずれかを利用した授業運営を想定しつつ、学生が自主的に学習できる教材の作成・準備を心掛けた。新入生の場合、上級生と異なり、PC 操作や学内備品の利用も不慣れである。学内コピー機や印刷機の場所、PC からの資料ダウンロード方法もわからない学生もいる。従来から、私は、学生が自主学習しやすいよう数週間分の授業資料をまとめて配布していたが、今年度は特に早めに準備した。３月中には春学期科目の資料の製本を済ませ、4 月の履修ガイダンス時に配布でき[2]、授業を円滑に進めることができた。特に新入生対象の授業においては、資料準備が重要な点である。

② 学生への周知

初めの心配は、授業初日の時間内に 70 名以上の学生が該当チームの「会議」に参加できるのか、という初歩的なものだった。

授業初日の 4 日前。1 年生全員宛に、遠隔授業の注意点やトラブル発生時

---

[1] 授業開始が 4/7 から 4/21 に変更。

[2] １科目につき、50－80 頁程度の冊子（オリジナルのテキスト）を計３冊作成した。１冊目は４月のガイダンス時に配布し、それ以降は、学科からの郵送物発送時（５，６月）にあわせて送付した。

の対応をまとめた「オンライン授業実施にあたってのお願い」をメールで送信した。該当授業チームにも同じファイルをアップし、学生には資料ダウンロードの練習、投稿欄へのメッセージ送信など、遊び感覚で慣れてもらうようにした。

2)一斉に立ち上がった「会議」

事前に配布した資料のおかげで、事業開始時刻までに学生たちは無事にチームに入れたが、開始時刻になると、70 名以上の履修生が一斉に（個別の）「会議」を立ち上げるという事態が発生した。誰か一人の動きを見て、皆が次々と同じように「会議」を立ち上げてしまったのだ。一度そうなると、元に戻すのが至難の業。叫んだところで、私の声が届くはずもない。投稿欄からメッセージを送り、全員が個々の「会議」を退出・終了するまで、しばらく静観するしかなかった。

２回目の授業からは、始業 10 分前に「会議」を立ち上げ、当日のタイトルスライドを提示しておくようにしたが、初回の授業はそのような基本的なルールもわからず、手探りの状態であった。

2.　オンラインの利点を活かす

オンラインなりの利点もあった。学外研修を伴う授業②では、通常、大型バスの定員数にあわせ、履修生の上限を 50 名に設定し、初回授業で抽選を実施していた。しかし、今年度は、雲南市吉田町への現地研修を、「バーチャル FW[3]」に置き換えたことで、人数制限をせず、希望者全員に受講してもらうことができた上、学生からの反応も意外と良かった。

また、FW の事後学習として、これまで模造紙を使ったグループ発表会を実施していたが、個人の「バーチャル・ポスター発表会」に置き換えた。画面サイズを指定したパワーポイントスライド（各 1 枚）をポスターに見立て、自由に作成してもらった。一人当たりの発表時間が短いため、事前に教員がスライドを PDF で結合し、履修生全員で共有した。スライド 1 枚に十分な内容を盛り込むことはできなかったかもしれないが、履修生は、自分たちなりに工夫し、限られたスライドのスペースと時間を有効に使いながら発表してくれた。

以上、やむを得ず取り入れたオンラインでの授業だったが、今後もその利点を活かし、対面授業と併用していきたいと考えている。

---

[3] バーチャル FW は、「地域文化論Ⅱ（出雲）」を共同で開講している杉岳志准教授（地域文化学科）の松江城の「バーチャル FW」を参考にした。Google マップで位置と街並みを示し、適宜パワーポイントスライドに切り替え、具体的な説明を行った。

科目①「国語科教育法Ⅰ」
（地域文化学科 2 年春学期選択 2 単位 7 名履修）
科目②「地域文化入門」
（地域文化学科 1 年春学期必修 1 単位 77 名履修）
科目③「地域文化プロジェクトⅠ」
（地域文化学科 3 年生通年必修 3 単位 73 名履修　ゼミ生 4 名）
科目④「近代文学Ⅲ(評論)」
（地域文化学科 2 年秋学期選択 2 単位 22 名履修）
科目⑤「スタートアップセミナーⅠ・Ⅱ」
（地域文化学科 1 年生通年必修 4 単位 77 名履修　ゼミ生 10 名）

古　賀　洋　一

1. はじめに

コロナ禍を契機に、遠隔授業について学内外で交流する機会が増えた。そこでなされる発言の多くは、遠隔授業の欠点を指摘し、それを補うための機能を紹介するものである。いわば、対面授業を「理想」と見なす語りである。もちろん、遠隔授業を対面授業と遜色ないものにしていくために、そうした機能を知ることも重要である。だが、それ以上に大切なことは、遠隔授業によって生じる学びの変化や可能性に目を向け、その「強み」を認識することではないだろうか。そうした面に目を向けてはじめて、両者の効果的な使い分け・相互乗り入れのあり方を考え、このコロナ禍をも一つのバネにして、新たな授業の姿を切り拓いていくことができると考える。こうした問題意識から、本稿では稿者の授業の取り組みをもとに、以下の内容について述べる。まず、遠隔授業に対面授業の双方向性を取り戻すための工夫を、学生への個人指導の機会の確保、学生同士の交流の充実という二つの観点から紹介する。次に、遠隔授業によって意図せず生じた学生の学びの変化や可能性を 4 点指摘する。

2. 授業の双方向性の確保

1) Class Notebook の活用

個人指導の機会を確保するために科目①で使用したのは、Class Notebook である。オンラインで共同編集できるドキュメントで、学生の記入状況をリアルタイムで把握できる点に特徴がある。授業者は各回のワークシートを Class

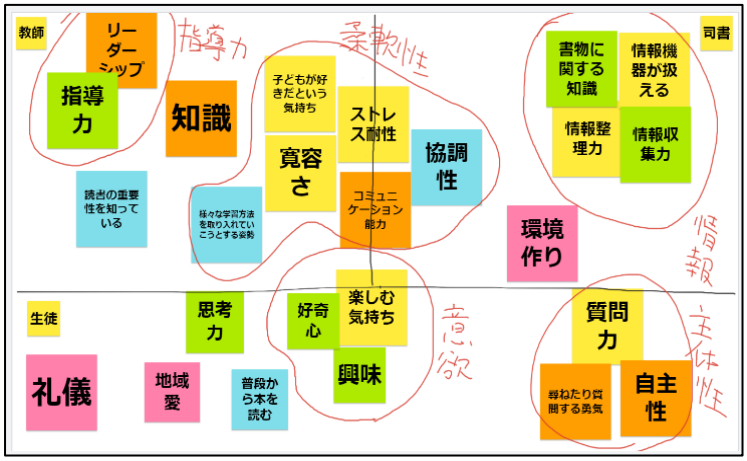
Notebook で作成し、配布する。学生が活動に取り組んでいる際には、テレビ会議をつなぎ、学生の記入状況を見て指導や助言を行っていく。こうした方法をとることで、対面授業と遜色のない形で個人指導を行うことができた。

2）Google Jamboard の活用

学生同士の交流は、口頭だけのやり取りよりも、各自のアイディアや交流の過程が視覚的に共有されているときの方が、実りあるものとなることが多い。

そのためのツールとして科目①②で用いたのは、Google Jamboard である。これもオンラインで共同編集できるホワイトボードで、付箋にアイディアを書いて並び替えたり、マーカーで直接書き込んだりすることができる。写真１は、科目②のグループ活動で作成された Jamboard である。

活動の際、学生は各々のアイディアを付箋に書きだしていく。他の学生は、それにも触発されながら、新たなアイディアを追加していく。それらが一旦出揃ったところで、付箋をグルーピングしていく。そのとき、自分たちが作ったカテゴリーに当てはまらない付箋が目に見えることで、新たなカテゴリーを作ったり、カテゴリー名を変更したりする必要が生じていく。このように、遠隔授業であっても、視覚化ツールを用いることで相互の触発性を高め、話し合いを修正・深化させるきっかけを作りだすことができるのである。



【写真１】科目②の Google Jamboard

3. 意図せず生じた学びの変化と可能性

1）話し合いの建設化

一つ目は、学生が少数意見や声の小さな学生の意見を「聴ける」ようになったことである。互いの正面顔が見えることで発言に耳を傾ける意識が働きやすくなることに加え、それが小さな画面に収まっていることで発言への抵抗感が薄れるためであろう。対面の話し合いでは声の大きな学生や多数意見がどうしても主導権を握ってしまうが、遠隔では声の小さな学生や少数意見の発言がより多くなり、それらの内容を反芻する「間」が生まれているように感じられる。

2）質疑応答の実質化

二つ目は、質疑応答が中身のあるものになったことである。科目③では発表担当者が資料を読み上げ、学生同士の質疑応答を通して授業を進めることが多い。だが、専門的な学びをはじめたばかりの学生が対面で質疑応答を行うと、「分かりません」といった回答に終始してしまいがちである。こうした問題を念頭におき、遠隔授業では、各自で資料を読む時間をとり、その間に質問をチャット欄に書き込むようにした。この方法の一番のメリットは、発表者が、どの質問にどのように答えるかを熟考する時間がもてることである。結果として、質問に答えられない頻度が減り、回答へのさらなる質問がなされたり、全員で議論が行われたりする場面が増えた。対面授業より充実しているとすら感じる。

3）学習活動の複線化

三つ目は、学習活動の複線化が図りやすくなったことである。科目④では、特定のテーマについて複数の評論を読み比べ、論点について議論を重ねながら、最終的に意見文を書いていく。このとき、他の学生と相談しながら書いた方がよい学生と、個人で静かに書いた方がよい学生とが出てくる。そうした学生のニーズに応じて活動の複線化を図ったとき、個人で書きたい学生にとって、他の学生のやり取りが雑音になってしまうことが多々ある。こうした問題に対しては、遠隔授業の方が対応は容易である。学生をグループに分けた後、個人で書きたい学生は、スピーカーを OFF にしてしまえばよいからである。

4）学生による調査への活用

四つ目は、学生による調査が容易になったとことである。科目③⑤では学生がアンケート調査を行うこともあるが、回答が思うように集まらず、分析すらできないことも少なくなかった。これに対して、Forms を使えば一気に多くの方へ回答を依頼することができ、波及させることができる。もちろん調査の質が保たれているかは別問題であるが、分析の機会をもてるようになったという点に大きな学びの可能性を見いだしたい。これは、遠隔授業そのものというよりも、それに伴う ICT への習熟がもたらした副産物であるが、遠隔授業を余儀なくされなければ、Forms を使うという発想すら得られなかった。

４．おわりに

遠隔授業には、対面授業にない強みがある。対面授業が行える状況になったとしても、学生の特性や授業の目標・形態に応じて、遠隔の方が効果的だと判断される場合は積極的に取り入れていくべきだというのが、現時点での稿者の結論である。今後は、学生が互いの成果物を自由に見て回り、気軽に語り合えるようなミュージアム形式の活動も、遠隔授業で実現したいと考えている。

科目①「市民社会と図書館」
（地域文化学科 1 年秋学期選択 2 単位 46 名履修）
科目②「情報資源組織論」
（地域文化学科 2 年秋学期選択 2 単位 34 名履修）
科目③「情報メディアの活用」
（地域文化学科 3 年秋学期選択 2 単位 38 名履修）

小　南　理　恵

1. はじめに

本稿では、2020 年度秋学期開講の 3 科目において実施したオンライン授業における工夫と課題を報告する。なお、①と②は司書資格、③は司書教諭資格の取得に必要な科目として位置づけられている。①は教養科目として開講されており、地域文化学科の学生に加えて総合文化学科 2 年生と保育教育学科 1 年生も履修対象である。③は資格取得のためには教職課程と平行して履修の必要な科目であり、保育教育学科 3 年生も履修対象である。

2. 授業の流れ

これら 3 科目の授業は、15 回全てを Teams による遠隔授業とした。研究室の PC から PowerPoint のスライドを共有し、リアルタイムで講義を行った。ほぼ毎回、Teams の課題機能や Forms を使用して授業後に課題や授業コメントを提出する形式とし、課題提出を課さない回にのみ出席確認を行った。Teams を使用することで、授業だけでなく授業資料の配布、課題指示、課題回収、学生への連絡などを 1 つのプラットフォームで行える点は非常に便利であった。

②の受講生は全員が地域文化学科の学生であったため、全員が PC を所持していることを前提に授業を実施することができ、授業担当者として非常にありがたかった。

3. 授業における工夫

1)録画の公開

リアルタイムではあるものの、講義形式の授業であることから「出席」を重視する必要性は低いと判断したこと、また学生の通信環境が様々であるこ

とから、原則として授業内容は録画を行った。ただ、教員側がレコーディングを失念していたり、ファイルの管理やアクセス権の設定に手間取り、うまくいかなかった回もあった。

録画の公開は学生からは好評で、授業後のコメントからは復習に活用している様子もうかがえた。また、何らかの理由で欠席した学生へのフォローにも役立った。あくまでリアルタイム授業の副産物としての位置づけであるが、繰り返し見られるという点が学生にとってはメリットが大きいといえる。

2)カメラの（不）使用

3科目いずれも講義科目であったこと、授業の録画を行っていたことから、原則として学生に対してカメラの使用は求めなかった。Teamsには背景をぼかす機能があるが、精度が十分でなかったり、Android端末では導入されていない（2021年2月23日時点）など、履修者の多い授業での利用には懸念が残ることもあって、学生や同居家族のプライバシーを尊重することを重視した。

3)授業コメントの活用

ほぼ毎回、Teamsの課題機能やFormsを使用して授業後に課題や授業コメントの提出を求めた。課題の内容や学生からのコメント・質問等については次回の授業でフィードバックを実施し、双方向性の確保に取り組んだ。従来の対面授業においても、紙のコメントペーパーを配布したり、manaba等のLMSを活用して同様の取り組みを行っていたため、大きなギャップはなく実施することができた。一方で、オンライン化により課題提出の機会が増え、学生の負担となっている状況も認識していた。そのため、提出締切を授業当日中～数日後など課題の内容に応じて幅を持たせ、減点対象であることを明示しつつも、締め切り後の課題提出を許可する形をとった。

4)ウェブ上のコンテンツの利活用

従来の対面授業でも、用語や法令の説明にあたっては「コトバンク」（https://kotobank.jp/）や「e-gov 法令検索」（https://elaws.e-gov.go.jp/）等のウェブ上のコンテンツを活用していた。オンライン授業で大学図書館を利用する機会が減少していると考えられたため、こうしたコンテンツについては検索方法の説明なども行った。また、コロナ禍で従来は来場者しか参加することができなかった講演会等がオンラインで実施され、学生に視聴を推奨したケースもあった。

成績評価に際しては3科目とも期末レポートを課した。しかし、大学図書館で十分な文献調査が実施できる状況ではない可能性も踏まえて、ウェブ上で閲覧可能な参考文献を複数示したり、ウェブ上のコンテンツの評価方法を示すなどの工夫を行った。

４．オンライン授業のメリットと課題

今年度の授業を通じて、オンライン授業の最大のメリットは、全員がPCやスマートフォン等の端末を所持しているという前提で授業を展開することができる点であると感じた。従来の対面授業でも国内外の図書館のウェブサイトやYouTube上で公開されている動画をスクリーンに投影する等の工夫を行っていたが「見るだけ」「紹介するだけ」になることも多かった。オンライン授業であれば、学生の目の前に端末があり、それらを使って授業を受ける体制が整っている。授業時間内に特定のウェブページを閲覧して課題に取り組むことも可能である。Teamsを使用したことで課題の配布・回収や学生への説明もスムーズであった。PC教室を確保せずとも、こうした活動が可能である点は非常に有益であった。

一方で、相対的に意欲の低い学生のケアが疎かになりやすい点、自宅の通信環境や学生自身の情報リテラシーへの依存度が非常に高くなっている点は課題といえる。授業の録画を繰り返し視聴して復習に努めたり、授業内容について教員宛にチャットで質問するなど、オンライン授業による変化を受け入れ、うまく適応することのできた学生も多い。同時に、そうした変化に取り残されがちな学生へのケアは一層重要になってくるだろう。

科目①「スタートアップセミナーⅠ」
（地域文化学科、1年、春学期、必修、単位2、履修者数10）
科目②「スタートアップセミナーⅡ」
（地域文化学科、1年、秋学期、必修、単位2、履修者数10）
科目③「現代教職論」
（地域文化学科、1年、秋学期、必修、単位2、履修者数30）
科目④「現代教職論」
（健康栄養学科、1年、秋学期、必修、単位2、履修者数12）
科目⑤「教育原理」
（健康栄養学科、2年、秋学期、必修、単位2、履修者数8）

小　柳　正　司

はじめに

私は Teams 初体験だった。前任校では 200 人を超える大人数授業をこなすため、出欠確認、資料配布、レポートの課題提示と受理、評価とコメント、成績集計を Moodle という Web システムを利用しておこなっていたので、Web を使って授業をおこなうことに抵抗感はなかった。むしろ、Teams を使った遠隔授業では Moodle ではできなかったチャットや音声を介した双方向のやり取りが容易にできて、私としては以前よりも多少充実した授業ができるようになったと感じている。

科目①

初回は対面授業を実施。333 講義室に 10 名が分散して着席。学年全員参加型のセミナーはオンデマンドでおこなわれたが、研究室ごとのゼミの場合、私はあらかじめパワーポイントを動画に変換してオンラインで視聴させた。新入生にいきなりオンデマンドで視ておきなさいでは放任にすぎるだろうと判断した。オンデマンドの場合、視聴確認のための提出物が学生には煩雑で負担になっていたようであり、それを避けるためにもオンデマンドはやめることにした。

パワーポイントを動画に変換したのは私自身授業の予行演習ができるからだ。声の調子、説明の流れ、言葉遣い、顔の表情など、何度か自分で試聴してＮＧの部分はやり直した。やり直しがきくところはメリットだったが、準備の

負担が大きいのはデメリットであった。

科目②

秋学期に入ると新入生はもう精神的にかなり参っている感じがしたので、オンラインで済ますわけにはいかないと判断し、研究室ごとのゼミの場合は対面を主にハイブリッド方式を試みた。対面希望者は 333 教室にパソコンを持参するようにして、教室内でオンラインの授業をおこなった。

新入生の精神衛生を兼ねて田和山遺跡見学徒歩ツアーを実施した。専門家にガイドを依頼した。田和山遺跡の考古学上の価値がよくわかり、私自身この遺跡の見え方が変わった。頂上からの眺めを楽しみながら全員で弁当を食べた。

科目③

今年度からこの科目は 1 年生対象にした。教職入門科目である。履修者が予想以上に多く、全 15 回分、パワーポイントを動画に変換してオンラインで実施した。出欠確認は Teams の会議画面を見るだけで済ませたが、無断欠席も遅刻も皆無だった。パワーポイントそのものは春学期に 2 年生対象におこなったものを使ったが、1 年生向けにかなり作り直した。特に、予習課題を Forms を使って授業前に課し、解答解説の動画を別途用意して授業後に視聴させ、授業の理解を深めさせるように工夫した。授業後の感想・意見・質問等はチャットで書き送るようにさせ、可能な限りコメントを付けて返信した。学生は中学・高校時代の自分の経験をよく書いてくれた。私のコメントに再返信してくる学生が少なくなかったので、口頭で説明しきれなかったことを再度文章形式で説明しなおすことが多くなり、この作業に毎回 1～2 時間は費やした。負担感はまったくなく、むしろ授業改善にとって有益だったし、学生一人一人の受けとめ方がよくわかり、対面授業の場合よりもやり甲斐を感じさえした。

科目④

上記③と同様の教職入門科目だが、こちらは栄養教諭向けなので、内容は③と異なる部分がある。しかも、出雲キャンパスでは非常勤講師の授業は原則すべてオンデマンド方式なので、パワーポイントの動画をあらかじめ 15 回分用意したうえに、毎回の視聴確認用の授業記録と確認テスト、レポート課題も事前に用意する必要があった。学生とのやり取りは UNIPA を介しておこなうので Teams ほど融通が利かず、かなり制約があると感じた。それでも出雲キャンパスの事務担当者が動画配信や資料の配布、学生への連絡等できめ細かな対応をしてくれたので、一連の授業の準備を済ませてしまえばあとは UNIPA で提出物を確認し、評点を付けるだけであった。簡便と言えば簡便だが、なんとなく実感がわかない感じもした。

科目⑤

履修者は全員、昨年秋学期に現代教職論を受講した者たちで、本来なら出雲キャンパで 1 年ぶりの再会となるところだが、栄養教諭をめざす彼らの成長ぶりを自分の目で確かめられなかったのは残念だった。上記④と同様、動画をはじめ授業記録、確認テスト、レポート課題はすべて事前に準備した。だから、④と⑤の 2 科目合わせて 30 回分の授業の準備を出雲キャンパスの秋学期が始まる 9 月までに済ませる必要があり、けっこうハードな仕事だった。教育原理は教育学の基礎的・基本的事項を学ぶ授業なので、昨年の対面授業の場合と同様に期末筆記試験を実施したが、対面ではできないのでオンデマンド方式にした。結局、試験というより授業内容の理解度を各自で自己確認してもらうことしかできなかった。出雲キャンパの方針のもと、致し方ないことであった。

その他

このほか、春学期には地域文化学科 2 年生 8 名の現代教職論と教育原理をオンライン（パワーポイントを使った動画）でおこなった。この学年の教職課程履修者は自覚的に学ぶ態度に欠ける者が 1 年生、3 年生に比べて目立つ。これらの学生はオンライン授業には不向きな学生といってよいだろう。

地域文化学科 3 年生 4 名の地域文化プロジェクト（通年）は遠隔と対面のハイブリッド方式でおこなった。これほどの少人数のゼミになると、一人一人の興味・関心とやる気度のちがいから、遠隔でも対面でも全員で一つの課題に取り組むことがかえって困難だと感じ、秋学期からは個別指導に多くの時間を取るようになった。

科目①「文化人類学」
（地域文化学科、１年、春学期、必修、２単位、履修者数：76 人）
科目②「ジェンダーと文化」
（地域文化学科、３年、春学期、選択、２単位、履修者数：59 人）
科目③「基礎インドネシア語」
（地域文化学科、１年・２年、春学期、選択、１単位、履修：９人）
（保育教育学科、３年、春学期、選択、１単位、履修：１人）
科目④「異文化理解演習」
（総合文化学科、１年、春学期、選択、２単位、履修者：20 人）
科目⑤「アジア文化論Ⅰ（東南アジア）」
（地域文化学科、２年、秋学期、選択、２単位、履修者数：27 人）
科目⑥「多文化共生論」
（地域文化学科、２年、秋学期、選択、２単位、履修者数：47 人）
科目⑦「インドネシア語」
（地域文化学科、１年、春学期、選択、１単位、履修：５人）
（保育教育学科、３年、春学期、選択、１単位、履修：１人）

塩谷　もも

1. オンライン授業の実践

2020 年度の担当授業は、すべて Teams を活用したリアルタイム形式で行なった。授業の内容は、講義中心の科目（科目①、②、⑤、⑥）、語学（科目③、⑦）、演習（科目④）そして、ゼミと多様であったが、オンライン授業が初めてだったこともあり、普段の授業に近い形式を試みることにした。

とくに最初の頃は、機器のトラブルやオンライン上での映像資料活用の難しさなどに悩まされた。しかし、回を重ねるごとに少しずつ慣れ、オンラインの活用の利点についても、実感できるようになった。オンラインを活用せざるを得ない状況にならなければ、これに気づくことはなかった。ここでは、一年間のオンライン授業を振り返り、いくつか印象的だったことをとりあげながら、声で情報を伝えること、双方向のやり取り、オンラインの利点の３つについてまとめてみたい。

２．声で情報を伝えること

普段の授業でも、声を使って情報を伝えているのだが、オンライン授業では、よりそのことを意識するようになった。受講生はカメラをオフでの受講であったため（ゼミと一部のグループワークを除く)、こちらからは全く反応が見えないという状態で授業が進行した。

授業を始めて思い出したのは、小学生・中学生のときに学校の放送委員会で担当したお昼休みの放送の経験だった。本の朗読、音楽、インタビュー、クイズなど、その日の内容と時間配分を決めて、ラジオ放送のように、見えない相手に声だけで語りかける。授業と内容は大きく違うものの、形式が似ていることに気づいてからは、少し気が楽になった。

対面の授業では、学生が分からなそうな顔など反応してくれるので、説明が不十分なときは、それを補うことができる。しかし、見えない相手に伝えるときは、一度聞いて伝わることを意識する必要があると考えた。実際に自分がどこまで配慮できていたか、伝わっていたかは分からないが、対面の授業よりも説明を丁寧にすることを心がけた。

３．双方向のやり取り

当然のことながら、オンライン授業ではこれが悩みどころであり、一番の課題だった。初回の文化人類学では、印象的な出来事があった。この回は、チャット機能を使って問いかけをして、受講生が回答するということをやってみた。その中で、ユニークな回答をした学生がいて、私がそれにチャットで反応した際、みんなからどっと笑いが起こった。オンラインなのでこう表現するのはおかしいのだが、受講生が笑い顔マーク、いいねマーク、ハートマーク、いろいろなマークで、一斉に反応を示したのだ。

その日は通信状態が悪く、その後もしばらくチャット機能で授業を進めた。すると、こちらが文字で語ったことに対して、意外なことには驚いた顔マーク、共感したときにはいいねマーク等、見えないながらに受講生が反応を示してくれた。たまたま起きた出来事だったが、オンライン上の学生を実感でき、また学生同士もクラスメートの存在を実感できたのではと思う。

その後、他の授業でも、指名して発言してもらったり、オンライン上でグループワークをしたり、受講生アンケートの回答を共有したり、可能な範囲で双方向のやりとりを取り入れることを試みた。また、語学や演習の授業は、当然のことながら双方向のやり取りがしやすかった。講義中心の科目については、あまりできなかった回もあるが、少しでもこれがあった回の方が、受講生の反応が良かったように感じた。受講生が一緒に学ぶ仲間の存在を実感できる工夫が、オンラインでも必要なのかもしれないと考えた。

４．オンライン授業の利点

前述の仲間の存在を意識することと少し矛盾するかもしれないが、学生が他の受講生を意識しすぎずに発言することができるのが、まずは利点の一つだと考える。例えば、対面の授業では、授業内で発言したり、語学の授業で話すのが、苦手な学生もいる。その点、オンラインの授業では、見えないので、あまり緊張しないで話せて良いという声もきかれた。

オンラインでのグループワークについては、学生同士がカメラをオフのまま行なうものが多かった。そのため、発言のタイミングが難しいという声もきかれた。ただ、アイコンタクトやジェスチャーが出来ず、声だけでやり取りをするということは、学生も普段と違う経験になったに違いない。SNS など文字で会話することが増えたため、最近の学生はとくに電話で話すのが、苦手なのだという。ある意味、普段しない電話のように、声だけでやり取りする練習になったかもしれない。相手の声により耳を傾けること、分かるように伝えることにつながった可能性がある、は言いすぎだろうか。

また、担当した語学の授業については、成績等で判断すると、オンライン授業の方がむしろ身についたようである。対面と同様に、授業では、２人１組に分かれての会話練習を毎回行った。前述のグループワークと同様に、相手が見えない分、耳で聞くことや話すことにより集中できたことが、役立った可能性もある。

５．まとめ

以上、簡単ではあるが３つの項目に分けて、オンライン授業を振り返ってみた。慣れるまでは負担が大きく感じていたが、オンライン授業のおかげで身についた技術があり、この形式の授業の利点にも気づくことができた。これには対面の授業に戻った際も、活用できることが含まれている。オンライン授業を行なうことは、普段行なっている対面授業について、もう一度考えるきっかけとなった。

また、授業に限らず、オンライン開催が普及したおかげで、各地で行われている研究会、講演会、セミナーなどに、参加しやすくなったことも大きな利点である。入ってきた情報は、研究だけでなく、ときに授業への活用にもつながっている。また、前よりも、話し手の伝え方にも注目するようになった。これも、オンライン授業のもたらした効用である。

科目①「日本語学演習Ⅰ」
（地域文化学科 3 年春学期選択 2 単位 22 名履修）

高　橋　　純

1. 授業内容と形態

この授業(科目①)は、教職課程を履修している学生たちを意識した演習で、学校文法（日本語）を復習し、それを発展的に考える授業である。学校文法を考える上で、漢文を利用して、日本語の古典文法の復習と同時に漢文という古典中国語の文法をとおして、日本語の文法特徴を理解することを目的とした。そしてこの授業は「演習」で、学生たちが発表する形式であった。最初の 3 回は、私が漢文の基本的な文法事項と発表の仕方を説明し、以後は、課題として与えた「論語」を 1～2 編、書き下し文の日本語と冒頭の講義と漢和辞典をもとに導き出した中国語古典の文法項目を発表してもらった。予想の 2 倍の履修者があったため、1 回の授業で、2～3 名が発表することとなった。

授業形態は、Teams による遠隔授業で、時間割どおりの時間で授業を行った。これは、こちらからの学生へのフィードバックの早さと学生間の議論のしやすさを重視したためである。

2. 問題とその対処

1)学生の準備

春学期は、5 月 1 日から 10 日まで図書館が閉鎖され、その後も時間制限等があり、学生たちが課題を調べることが難しくなってしまった。

そこで、普段ならば推奨しないが、題材が「論語」であるため Web 上にも多くの解説があり、そこにある書き下しや訳等を参考にしてもよいとした。そもそも返り点や送り仮名が振ってある資料は渡してあるので、その資料とネット上の資料に違いがあれば、その違いに関しても文法的な観点から解釈を加えさせた。漢文の書き下しが一通りでないということを発見させた。

とにかく漢文の漢字の配列や書き下し文に現れる送り仮名、助詞・助動詞の接続、意味、返り点が振られる理由などをすべて古語辞典と漢和辞典を徹底的に引いて考えてもらった。

このことによって、今まで気がつかなかった辞書の項目や使用法の学習も同時に行った。

2）漢字

Teams のチャット機能を使用して、構文の説明などを学生たちに伝えていた。しかし、漢文の場合は、簡単に打ち出せない漢字があり、困難を強いられた。対面であれば、簡単に黒板に書き出せるが、文字の問題は、デジタルの弱点である。

この問題に対しては、あらかじめその時間の課題である文をすべて打ち出しておき、それをコピペする形で提示した。この下準備には時間を多く要したが、これをすることによって、発表学生のレジュメを画面上に写しながら、かつこちらの説明も同時に行うことができた。

3）レジュメ

レジュメは、２日前までにメール添付で送ってもらい、そのレジュメを PDF に変換した後、Teams 上にアップし、それを各学生が使用していた。しかし、問題は学生の多くがプリンタを所有しておらず、レジュメを打ち出して使用することができなかったことだ。しかし、学生たちの中には、PC にレジュメをダウンロードして PC 上でレジュメを見ながら、授業はスマホで参加している者もいたようである。この状況を考えると PDF に変換せずに、Word ファイルのまま配布した方が、書き込みができたのではないかと反省している。それでも、慣れない環境の中で学生たちも様々な工夫をして授業に参加しており、我々も助けられた。

ただレジュメの印刷が行われなかったためか、授業中のフィードバックが後続の発表になかなか反映されなかったというのは問題であった。

4）質疑応答

Teams であったにもかかわらず学生たちは質問や問題点の指摘など活発な議論を行った。これは学生たちのやる気の表れで、学生たちに感謝である。

学生は自分の発表が終わると画面を消したがる傾向にあるが、他の学生の質問や指摘の内容を伝えやすくするためにレジュメの共有画面は表示したままにさせた。ちなみに、共有画面は学生が自らアップして、自分の発表に合わせて、画面を操作した。

3. まとめ

今回の漢文のように特殊な文字が使用される授業に対して、デジタルは弱いということが改めて思い知らさせられたが、遠隔授業であれ対面授業であれ、基本的には、学生たちの理解を深めことに配慮し、そして学生たちの学ぼうとする姿勢が授業を成り立たせているということを実感した。遠隔授業であっても真摯に学ぶ姿勢で授業に臨んだ学生たちに感謝である。

科目①「観光まちづくり論」
（地域文化学科 1 年秋学期選択 2 単位 48 名履修）
科目②「まちづくりと協働」
（地域文化学科 1 年秋学期選択 2 単位 44 名履修）
科目③「観光まちづくり演習」
（地域文化学科 2 年秋学期選択 2 単位 17 名履修）

竹　田　茉　耶

1. はじめに

本稿では、コラボレーションプラットフォームとしての Teams を活用した授業を振り返る。

私自身はこの間、完全遠隔による講義科目 2 つと対面（うち 2 回は遠隔・リアルタイムで実施）による演習科目 1 つを担当した。担当した授業はいずれも秋学期であったため、学生たちはすでに遠隔授業に慣れてきており、Teams の扱いに習熟している状況であった。

2. Teams を活用した授業の課題

1）コミュニケーションの取りづらさ

遠隔授業を行ってみて何より戸惑ったことは、学生の顔を見ながら話せないということである。これまであたり前のように行っていた対面授業であれば、顔をあげて熱心に耳を傾けてくれている学生、問いかけに対して頷いてくれる学生、少し難しいという表情をしている学生、あまり聞いていない様子で下を向いている学生、居眠りをしている学生など、学生の様子を窺いながら講義を行うことができていた。

一方で、遠隔授業においてはこうした学生たちの様子を窺い知ることは大変難しいことを感じた。Teams には会話機能や手を挙げるといったコミュニケーションツールはあるが、こうした機能を使ったとしても学生の表情が見えないことに変わりはなく、学生の反応を見ながら説明の仕方や授業の進度を調整するという点において、遠隔授業の難しさを感じたところである。

また、学生たちに問いかけを行ったとしても、対面授業の時にも増して反応してくれる学生が少なく、表情が分からない分指名することも難しいと感じた。

ただしこのことは、履修人数が多い科目において特に該当する問題であると考える。学生たちの了承が得られ、画面上に顔を映してもらった状態で授業ができるのであれば、上記で述べたような課題はある程度は解決されるのではないかと考える。

２）リアルタイムでの試験実施の難しさ

講義２科目については、Teams に答案を提出するかたちで遠隔（リアルタイム）で論述試験を行った。

その際気を配ったのは、試験を受ける学生のインターネット環境が安定しているかどうか（答案がアップロードできないという事態を防ぐため）ということと、試験時間（60 分）＋答案をアップロードするための時間（10 分）の確保である。幸いネット環境不良のため答案が提出できないという事態は生じなかったが、60 分を過ぎても答案の作成を続けている様子の学生もおり、厳密に試験時間を管理することは難しいと感じた。

3. コラボレーションプラットフォームを取り入れることの利点

1）授業時間を有効に活用してグループワークが行える

講義２科目については比較的履修人数が多かったが、そうした授業ではコラボレーションプラットフォームを用いることで、効率的にグループワークを行うことができたと考える。

対面授業においてグループワークを行う際には、座席の移動や模造紙、ポストイットといったツールの準備が必要であった。しかし、Teams 上でグループワークを行う際にはこうした座席の移動や準備が必要なく（もちろん事前にチャネルを作成したりワークシートを作成したりする作業は必要であるが）授業時間を有効に使うことができたと感じている。

2）共同作業が効率的に行える

この点は、とりわけ演習科目（科目③）において実感したことである。この授業では、テーマごとに３つのグループに分かれて木綿街道をフィールドとした調査を行った。

調査の実施過程や結果の分析ととりまとめについて、学生たちはワードやエクセル、パワーポイントを使って作業を行ったが、こうした作業を行う際に Teams 上でファイルを共有することで、効率的に共同作業を行うことができた。こうしたことは、Teams のようなコラボレーションプラットフォームを活用することの利点であると考える。

3）インタビュー調査等の日程調整がしやすい

この点も演習科目（科目③）において感じたことである。3 グループのうち１つのグループは木綿街道の事業所へのインタビューを行った。

調査の実施にあたっては、感染防止の観点からオンラインでのインタビューを初めて試みた。もちろん、このような手法はすべての場合に活用できる訳ではなく、調査に協力してくださる方が問題なくこうしたツールを使え、理解を得られることが前提となる。今回は６名へのインタビューのうち１名の方について、オンラインでのインタビューが実施できた。

大変お忙しい方であったが、テレビ会議システムを活用することで場所や時間の制約が小さくなり、インタビューする学生５名との日程調整が行いやすくなった。

ただし、すべてテレビ会議システムで事足りるということではなく、現地調査などによって地域の様子を捕捉した上で行われることが望ましい（今回も現地調査を行った上でインタビューを実施した）。その上で、オンライン会議システムを状況に応じて有効に活用していければと考える。

科目①「しまねのまちづくり」
（地域文化学科 1-2 年集中選択 2 単位 35 名履修）
科目②「日本文化論Ⅰ（居住文化）」
（地域文化学科 2 年春学期選択 2 単位 10 名履修）
科目③「地域文化論Ⅳ（地域資源）」
（地域文化学科 1 年秋学期選択 2 単位 42 名履修）
科目④⑤「スタートアップセミナーⅠ及びⅡ（藤居ゼミ）」
（地域文化学科 1 年春・秋学期必修各 1 単位 9 名履修）

藤　居　由　香

1. まちづくりの土木と家庭科が学べるゲーム「あつまれどうぶつの森」

コロナ禍に自宅で過ごすアイテムとして、任天堂株式会社製のポータブルゲーム機器が評判になったことは周知の通りである。その機器専用ソフト「あつまれどうぶつの森（以下、あつ森と略す）」では、都市計画（まちづくり）の専門用語「区画整理」が適切に用いられており、学問上の信頼度が高い。土木の文字通り土を均して水を流し木製の橋を架け、道路を通し敷地を区切り宅地化し、住宅ローンを組んで家を建てる仕組み、魚釣りや植物の交配、カブを育て株売買、キッチンユニットの配置、衣服のオリジナルデザイン、夜間照明の工夫など、衣食住と消費生活を遊びながら学ぶ格好の教材である。科目①「しまねのまちづくり」履修者の中で、ソフトを所有する学生へ、高校生向けに島づくりの魅力が伝わるポスターの任意提出を呼びかけた所、3 日後に 5 名から描画データ提出があった。成績評価に関係せずとも、描画作業に積極的に取り組むという成果が得られた（図 1、図 2）。また、この科目終了時に「授業でまちづくりの土木と家庭科が学べると知ってからは、あつ森への取り組み姿勢が変わった」という記述もみられた。

図１　島の敷地配置図及び施設鳥瞰図

図２　材料資源をＤＩＹにより製品化

このポスター作品は、10 月に高校生への授業「松江に住み続けるために本当のまちづくりを知ろう」で投影資料に用いた。高校生は、まちづくりを地域のイベントとその活動と誤解していることが多いが、本来は都市計画を指す言葉で、道路と住宅がまちづくりの最重要事項であること、図による発信力及び表現力を養う必要性を述べた。寄せられた生徒の感想には、「あつ森の話を交えた講義だったのでとても面白かったし、あつ森からこんなことも学べるんだ！ととても感心しました」、「あつ森と町づくりについてお話をされていて、私も町づくりに興味があり、その方面に役立つと思い、あつ森を始めました。（中略）一つのゲームで、町づくりから生活の基本について学べるので、とても楽しく勉強できる方法です」とあり、自宅での適切なゲームソフト使用は、高大連携の学習ツールとして有効性を発揮すると考えられる。

2. ＰＣ画面を用いない教科書と音声データによるオンデマンド授業の有効性

かつて本学で取り組んでいた履修証明プログラム用に、島根県西部在住者が授業を受講した臨場感を味わえる e-learning 教材として当時の在学生の協力を得て講義の録音を含めた音声データを準備してあった。その音声データをスマートホンや iPod 等の音声再生プレーヤーで学生が聴講する授業とした。学生は各自在宅で、手元に教科書の筆者ら 8 名による共著『住まいのデザイン』（朝倉書店 2015）を拡げ、所謂ラジオ講座形式で科目②「日本文化論Ｉ（居住文化）」受講した。著作権許諾済みの住宅の設計図や写真のみ掲載された教科書のため権利関係の問題は無く、音声だけでは理解し難い住宅の立体空間を図や写真で提供できた。テレビ会議の音声授業では画面に集中力を削がれる懸念があること、学生の中には姉妹で同じ部屋居住という事情から遠隔授業で発言を求められる事に困っている状況も窺えたこと、イヤホンで聴講でき発言せずともよい授業形式は、住宅の騒音環境やＩＴ環境整備を考える住居学の検討題材としても役立った。

学生達の感想は、「聴き逃した部分は少し戻って聞き直せたり一時停止しながらノートにメモできたりして自分のペースで進められることが良かったと感じました」、「音声データは、重要な部分を再び聞くことができ良い」、「聞くことに集中するので頭に入りやすかったり、自発性が促進できたりするのかなと思いました」、「音声のみでの授業というのは経験したことがなかったので、情報量など心配な部分はあったのですが想像していたよりもわかりやすかったです。教材も手元にあり、それを読みながら音声を聞くという進め方ができたので、授業内容についての不満な点は特に感じませんでした」、「普段より想像力を働かせながら授業を受けることができました」とあり、概ね良好な反応の学生達に感謝したい。

3. 家庭科の住生活・食生活分野と遠隔授業主体の日常生活との親和性

一人暮らしを始めたばかりの新入生へ、日常生活のマネジメントそのもので、高校家庭科の延長線上に大学での学びを展開できるのだと示すために、科目③の地域文化論Ⅳ（地域資源）は、自分が食べたことのある品種及び地域ブランドの「米」の特徴を調べる課題を出した。普段家族が炊く米の銘柄を初めて知った事や、米が地域資源であることへの驚きの感想がみられた。科目④の初年次ゼミは共通テーマを「麺」とし、近所の店舗調査で販売されている麺を知り、次いで文献調査を行い、自宅での調理実習により仮説を検証する手法とした。コロナ禍の持て余している在宅時間を活用すべく、ゼミ内で菓子レシピと製菓後の写真の相互交換を行った。科目⑤のゼミでは初めて松江に居住する学生達が、登学困難な中、近辺を歩くことによる地域理解と、社会問題である高齢化を自分の未来の課題と捉えるために、共通テーマを「後期高齢者のための歩行者空間を考える」とし、サブテーマは各自の問題意識で設定し屋外実測を含めた。また、Teams の投稿欄に問いを投げかけ、返答を学生達が書き込む方法は、テレビ会議での会話と異なり、後日読み返すことができ、教員及び他学生の発言内容の聞き漏らしがないという安心感に繋がっていることが判ったため、「文字ゼミ」の時間確保を心掛けた。

4. オンライン授業における外部講師招聘によるグラレコ演習事例

オンライン授業に切替わり、遠方の専門家の協力を得られやすくなった。講義室では学生の記述を一斉に相互閲覧するのは難しいが、Zoom では多数の画面を同時表示できる利点がある。藤居ゼミと科目③の合同授業では、ビジュアルで地域の魅力を発信する技術習得のために、秋田県在住のまちづくりファシリテーター平元美沙緒氏に「体験！グラフィック・レコーディング」を依頼し、高知県の瓦の研究紹介とグラレコの講義及び演習を実施した。

写真１　講師の実演　　写真２　相互閲覧の様子　写真３　学生のグラレコ

学生達は、「聞く力の身に付け方を学んだ」「集中して聞くことに繋がる」「人に物事を伝えるときは、分かりやすいということが一番なのでグラレコの技術にあるようなまとめ方の工夫や強調を、話すときにも応用していこうと思います」「話し方にも気をつけていきたい」とグラフィック能力以外の事柄に言及しており、グラレコは副次的効果が得られる技法だと考えられる。

科目①「基礎タイ語」
（地域文化学科 1 年春学期選択 1 単位 4 名履修）
科目②「アジアの歴史(東南アジア)」
（地域文化学科 2 年春学期国際文化コース必修 2 単位 55 名履修）
科目③「タイ語」
（地域文化学科 1 年秋学期選択 1 単位 4 名履修）
科目④「多文化共生論」
（地域文化学科 3 年秋学期選択 2 単位 57 名履修）
科目⑤「地域文化プロジェクトⅠ」
（地域文化学科 3 年通年必修 3 単位 4 名履修）

増　原　善　之

1. 1 年を振り返って

今年度の基本的な授業形態は、リアルタイム・双方向のオンライン形式であり、パワーポイントのスライドを画面共有しながら授業を行った。なお、対面授業は、秋学期の科目③および⑤(履修者はそれぞれ 4 名)で実施した。

昨年度末、春学期の授業を 4 月 21 日からオンラインで行うとした本学の決断は素晴らしかったと思う。また、4 月の休講期間中に Teams 研修会を開催してくださった FD 委員会関係者および講師の方々に改めて感謝の意を表したい。

私のオンライン授業のクオリティは決して十分なものではなかったが、1 年を通してやり抜くことができたという充足感はあるし、授業の新たな可能性を考える良い機会になったと思う。コロナ禍とはいえ、授業に限れば、決して悪い 1 年ではなかったと前向きに捉えている。

2. 学生の質問・コメント

春学期の科目②では、Teams「会議チャット」で質問やコメントを送信させることにしたが、学生にしてみれば、自分の名前や発言内容が明らかになってしまうため、こちらが期待していたほど活用されなかった。結局、授業後に Forms で送信させるようにしたところ、毎回、数多くの質問・コメントが寄せられた。一方、秋学期の科目④では、Teams「チャット」を使用したが、他の学生に自分の名前や質問内容が知られないので、学生たちには好評だっ

た。ただし、こうした状況が常態化し、匿名性が確保されないと発言できないということになれば、これはこれで問題であろう。

3. グループワーク

科目④においてオンラインによるグループワークを何度かやってみたが、会議をスムーズに立ち上げることができないグループが出てきたり、こちらがグループワークの進み具合を推し量るのが難しいため、議論の途中でワークを終わらせてしまったりするなど問題が多かった。この点については、来年度に向けてさらに検討が必要だと思う。

4. 動画の視聴

例年、科目①～④では、学生に動画を視聴させる機会が少なくなく、今年度も YouTube 上の動画ならば URL を「会議チャット」に貼り付け、データの形で保存している動画ならば、前もって stream にアップロードするなどして、動画を活用してきた。しかし、著作権法上の制約および「コマ落ち」に見られるような技術的問題から、オンライン授業における動画の視聴はかなり難しくなった。従来の対面授業では、あまり意識することはなかったが、これを機にオンラインにおける動画の活用について改めて検討する必要があると思う。

5. Teams ホワイトボード

科目①では、タイ語の文字の読み書きを学ばせることが授業の中心となるが、学生にタイ文字を書かせて、それを確認する作業に大きな困難を感じた。従来であれば、学生にノートや（教室の）ホワイトボードにタイ文字を書かせ、間違っていれば、その場で修正を施していたわけであるが、オンラインとなるとそうはいかない。初めのころは、学生に自身のノートをカメラで映させていたが、これでは直接修正ができない。Teams 上のホワイトボードも使おうとしたが、タブレットとタッチペンがない場合は、PC のマウスを使って習いたてのタイ文字を書くことになり、初学者にとっては難しすぎる学習方法になってしまった。履修者全員にタブレットとタッチペンを用意させるわけにもいかないため、来年度は対面で行わざるを得ないと考えている。

6. ハイブリッド授業

科目③および⑤は、少人数クラス（履修者はそれぞれ 4 名）であったため、秋学期は原則、対面授業としたが、科目③では、他県出身者が松江到着後の

自己観察期間中、アパートにいる必要があったため、科目⑤では、当初、対面授業に不安を感じる学生がいたため、開講時から 2～3 回、オンラインと対面を併用するハイブリッド授業を行った。対面授業に参加した学生にも各自 PC を持参させ、パワーポイントのスライドは、オンライン授業のときと同様、Teams で画面共有した。

実際にやってみて、気づいたことを 2 点あげておきたい。1 点目は、特に科目③のような語学の授業において、教員が教室内の学生を回って指導するとき、しばしば教員の姿が PC の画面から消えるため、オンラインで受講している学生にしてみれば、教室で何が行われているかわからず、自分だけ置いて行かれるような気持ちになったということである。ハイブリッドの場合は、できる限り、カメラに映る範囲内で授業を行うよう気を配る必要がある。

2 点目は、ハウリングを防ぐため、学生のマイクはすべてミュートにさせ、教員の PC に接続されたスピーカーフォンのみを使用した方が良いということである。もちろん、教室内の学生数が多いと 1 つのスピーカーフォンでは音声を拾いきれないので、スピーカーフォンを 2 器連結して使用するなどの工夫が必要となる。

7. 学期末試験

科目②は履修者が多かったため、学期末試験をオンラインで行った。問題はすべて記述式としたが、持ち込み可とせざるを得ないため、試験の準備に時間とエネルギーを費やした学生とそうでない学生との間にそれほど差がつかず、前者の学生の中にはそれを不満に思った者もいたかもしれない。来年度、対面での試験が困難であれば、レポートにしたいと思う。

8. 今後に向けて

Teams は学生とのファイル共有など便利な機能も多いので、今後もこれが基本になることに異論はないが、科目④のように外部講師をお招きする科目については、Zoom の使用も考えていきたい。当初、Zoom のセキュリティを心配する意見があったが、実際には多くの大学で使用されており、特段の問題はないと考えられる。

オンライン授業は、コロナ禍において「やむを得ず」行うというものではなく、アフターコロナでも、対面とオンラインの双方の利点をうまく組み合わせて授業を行っていくべきだと思う。オンラインであれば、海外からの授業や海外の大学生との交流授業などアイデア次第で何でもできるようになるので、さらなる可能性を模索していきたい。

科目①「イギリス文学史」
（地域文化学科 2 年春学期選択 2 単位 56 名履修）
科目②「イギリスの文学と文化Ⅱ」
（地域文化学科 3 年春学期選択 2 単位 25 名履修）
科目③「パラグラフ・ライティング」
（地域文化学科 2 年春学期選択 1 単位 7 名履修）
科目④「イギリスの文学と文化Ⅰ」
（地域文化学科 2 年秋学期選択 2 単位 31 名履修）
科目⑤「総合英語Ⅲ（リーディング）」
（地域文化学科 1 年秋学期選択 1 単位 21 名履修）
科目⑥「地域文化入門」
（地域文化学科 1 年春学期必修 2 単位 77 名履修）

松　浦　雄　二

1.　はじめに

令和 2 年度の筆者の担当授業は、集中講義を含めすべて遠隔授業を行った（一部対面は 1 年生のゼミのみ）。ここではそのうち主に上記①から⑥の授業について記すものである。このうち③および⑤は、語学の演習科目である。また、⑥は地域文化学科各教員が担当するオムニバス授業で、1～2 名の教員で 1 回の授業を担当する。今回の遠隔授業の筆者のキーワードを、PC 端末と Teams の操作、授業の準備、受講環境、コミュニケーション、授業形態によるメリットの確認と捉え、以下まとめてみたい。

2.　PC 端末とアプリケーションの操作

先ず遠隔授業実施にあたって直面しなければならなかったのは、当然ながら全く扱ったことのない Microsoft Teams の操作である。そもそも遠隔授業の組み立てというものを全く考えたことがなかったので、自分の行ってみたいオンラインアクティビティが、アプリケーションのどの機能を使えばできるのか、まずその点を確認・自覚するのにも時を要し、また時間に追われているから、特に春学期は多くの局面で Teams の持つ機能の活用が限定的になってしまった。Teams そのものではないが、Teams と併せて役に立ったのは、タッチパネルディスプレイを

持つラップトップ端末をデスクトップ端末と併用しながら、MetaMoji Note アプリケーションを利用する方法であった。通常の板書と同じような感覚で画面に書きつけて説明しながら、必要に応じて画面を拡大して受講者が視認しやすい大きさで示すことも速やかにできる。秋学期からは、「板書」したものを必要に応じてスクリーンショットし、Teams にアップロードして受講者の復習に供するようにしている。学生からのコメントシートを読むと、上記の方法は、教員の説明・解説を学生により理解しやすいものにするための一助にはなっているように思われる。この機能が無ければ現状での遠隔授業が成り立たないほど、筆者にとっては使い勝手が良いものである。

3. 授業の準備・受講環境・コミュニケーション

面接授業において自分が効果的と思って採用している解説のし方や使用している教材を、遠隔授業用に最適化するのには、とにかく時間がかかる（これは現在も変わらない)。特に、自分の端末画面の向こう側にいる学生たちの通信環境や受講場所、使用している端末の種類・スペック等、履修者の受講環境をある程度推測して教材を整え、自分の用いる機器の使用法を確認し、デモ・ユーザーを用いて試行錯誤を繰り返しながら準備していると、時間はあっという間にたってしまう。授業⑥では、まだ Teams に不慣れな状態で、チャネル機能を用いて少人数のディスカッションを行ったが、この機能を用いた時に起こり得る事態についての予測が不十分で、準備の周到さの必要性について反省することとなってしまった。遠隔でも如何に授業時に学生たちとコミュニケーションが取れるか、受講者の立場に立って授業中の状況を推測しながら、自分がどのように話し、どのように機器を操作すべきかを考えることが求められた。

さらに、授業準備においては、例えば上記①の授業では、コロナウイルスが蔓延していく過程で生じた流通の遅延・停滞の中で、学生のテキスト入手が間に合わず、テキストの一部を PDF 化して配信する許可を得るために出版社に相談したり、あるいは授業④では、授業時に限る DVD 視聴を可能として頂けるように販売会社に依頼・交渉するなど、著作権に関わる諸問題についても、この度改めて認識することとなった。

4. 授業形態のメリットの（再）認識

今回初めて遠隔授業を行うことによって、面接授業において学生に対面し、同じ場所・空間を共有しながら授業を行うことが、コミュニケーションという観点からも如何に重要であるかを、改めて、いわば肌で感じることができたように思われる。が、同時に、遠隔という形態によって、自分の授業での話し方・話しかけ方を再考する契機にもなり、反省にもなった。また、遠隔授業という形態で学生

あるいは地域に提供できるものの幅は広がるであろうという可能性も感じている。コロナ禍が一日も早く収束することを願うばかりであるが、その後にも、大学という場所で活かせるものの一つになったのではないかと感ぜられるのである。

5. 最後に

1 年間の遠隔授業の終わりを迎えようとして思い浮かんだのは、感謝の言葉である。全学で遠隔授業を実施するにあたり、すでに授業経験がおありの保育教育学科の先生方、事務方のシステム管理スタッフの皆様より頂いた年度当初のレクチャーをはじめとして、以後の、教職員の皆様相互の積極的なご協力とご教示が無ければ、自分の授業も到底始まらず、到底続かなかった今回の遠隔授業であると思う。このような記録を残す機会を与えられたので、最後ながら皆様にお礼を申し上げたい。

科目①「古典文学Ⅱ（歌謡と和歌）」
（地域文化学科３年秋学期選択２単位 29 名履修）
科目②「古典文学演習Ⅰ」
（地域文化学科２年秋学期選択２単位 12 名履修）

山　村　桃　子

1. 授業の方法

春学期の休職中、ゼミ生とのやり取りはメールを考えていたが、急遽 Teams を使用して互いの顔を見ながらやり取りが出来たのは有り難いことだった。自身の本格的な遠隔授業は、復帰後の秋学期からである。ゼミ以外の授業はすべて遠隔で実施し、遠隔はリアルタイムとオンデマンドを併用して行った。演習発表の準備については、全体の概要をリアルタイムで説明し、個々の問題設定や調べ方については、研究室で個別に指導を行った。

科目①：講義科目

１回目　　：リアルタイム

２～15 回目：オンデマンド

科目②：演習科目

１・２回目：リアルタイム

３～８回目：オンデマンド（演習発表の準備期間として講義を実施）

９～15 回目：リアルタイム 60 分（学生の演習発表）

オンデマンド 30 分（講義）

2. 授業の実際と反省

科目①は講義科目により予めオンデマンドを、科目②は演習科目のためリアルタイムを予定していた。

しかしリアルタイムで行った科目②では、小さなトラブルに対して自身が明確・迅速に対処できずに、授業時間のロスに繋がった。たとえば次のようなことである。いずれも教員側が Teams の操作に習熟していれば対応できたことであった。

・授業の途中、学生にワークをさせるため、教員のマイクをオフにしたが、それを再びオンにすることを忘れて数分間講義を行ってしまった。

・授業期間の途中で Teams の仕様が変更されたことで、授業中に学生を指

名して発言を求めたが、音声が入らないという学生が数名いた。設定を変更し会議に入り直すのに時間を要した。

・共有トレイにて、教材としてインターネットサイトの動画を見せたが、音声が共有されなかった。

・学生が会議に入ることができないことがあった。

遠隔授業においても、対面と同様に授業を安定的に展開し、授業時間を確実に確保する必要があると感じたため、講義の授業は以降すべてオンデマンドで行うこととした。

科目②の演習発表が始まると、毎回最初はリアルタイムで発表を行い、終了後はオンデマンドで講義を視聴させる流れとした。しかし、質問や指導が長引いた場合、その後にオンデマンド授業を視聴すると 90 分以内に授業がおさまらないことがある。このため、発表の後にひきつづきリアルタイムで講義を行った回もある。

科目①でのオンデマンドであっても、失敗はある。インターネット動画の音声が入るよう気にしていても、共有トレイを切り替えているうちに、音声が入っていないものが数カ所あり、課題の学生のコメントによって気づいた。講義は録画して終了ではなく、必ず再生して最後まで確認する必要があり、外部のサイトを利用する場合は、直接 URL を提示して視聴させたほうが確実であった。

また、オンデマンドではリアルタイムほどの時間の強制力がないため、課題の締切に余裕を持たせるほど学生が視聴を後回しにする傾向がある。中には授業時間内に必ず視聴し、直後にコメントを提出する学生もいたが、それは毎回同じ、ごく限られた数名の学生である。

しかしよく考えると自身も同様で、今回様々な学会発表や講演がオンラインで実施される中、公開期限当日に視聴することは多くあった。録画された授業を決められた時間に視聴するというのは、案外難しいことなのかもしれない。視聴を後回しにしたまま締切が過ぎたという学生の声も聞く。今後は、視聴に関わるルールづくりの必要性も感じた。

対面授業においては、上記のようなトラブルはほぼ生じないだろう。一方遠隔授業を問題なく運営するためには、学生とのコミュニケーションを対面授業よりはるかに意識的、積極的にとる必要があると感じた。対面では教員が行う作業も、遠隔では基本的に学生自身が行う必要があることを念頭に置かなければならない。授業を終え、学生には色々と不便をかけてしまったが、丁寧でわかりやすかったという声も得られた。教員自身が遠隔授業を経験することで学生への配慮を深めたり、授業の選択肢を広げたりすることができ、ひいては今後の対面授業の質の向上に繋がるように感じる。

５．まとめと展望

１）短期大学部保育学科

学科長　宮下裕一

１．はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大は、従来実施されていた大学の授業形態の変更を余儀なくさせた。

春学期当初、すべての授業を遠隔で行うという大学方針に基づき開始した授業は、一部の教員が以前から導入していた例もあるが、ほとんどの教員はもちろん学生にとっても初めてのこととなった。教員向けのガイダンスは開催されたが、多くの教員にとってゼロからのスタートとなった。

２．遠隔授業実施に関する学生の状況

遠隔授業実施に際し困難に直面したのは学生も同様であった。保育学科は入学時にノートパソコンの用意を学生に提案しておらず、またマイクやカメラ機能も必要であり、遠隔授業実施時にパソコンが利用できる環境にあった学生は一部であった。そのため、多くの学生はスマートフォンにて授業に参加するという状況が生じた。

授業時には、複数の機器を使い分ける教員もいたが、パソコンをメインに授業を行っていた。だがパソコンとスマートフォンでは見える画面や操作方法が異なる場合もあり、加えて教員自身のアプリケーションの使用に不慣れだということも重なり、しばしば授業の進行に支障をきたすことがあった。

スマートフォンでは小さな画面上で複数のウィンドウを操作しなくてはならないという状況もあったが、学生は時間割通りに遠隔授業が行われることもあり、授業への「慣れ」は学生の方が早かったといえる。

また授業開始初期には、通信状況の不具合も教員に寄せられることがあった。だが学生の自宅での通信環境はそれぞれ異なるため、状況確認や対応は困難であった。

さらにスマートフォンも、オペレーティングシステムの違いによるものだったのか詳細は不明だが、Android 系のスマートフォンに共通の不具合が生じたこともあった。

だが次第に学生自身がお互いに情報共有をしつつ対応策を見出すことも増え、遠隔授業に慣れていったようである。

３．教員による授業の新たな試み

遠隔授業は Office 365 の Teams を中心に、講義に必要な資料の送付、リアルタイムの遠隔授業、チャット機能による文字を通した学生とのやり取りを

行うことができる。また、Forms や Stream と呼ばれるアプリケーションソフト等を利用することで、学生による課題の提出や、自ら撮影したものあるいは教員が指示した動画の視聴、共有や Teams の「チャネル」を利用することによるグループ協議を行うことも可能となった。

授業形態は、大きく分けると講義系、実技・演習系及び実習に分けられる。リアルタイムでの遠隔授業の展開に際し、講義系の授業の場合、メールや Teams を用いて、文字や音声を通した授業を主として行ってきた。実技・演習系は、遠隔授業の場合多くの困難が生じ、また対面で実施する場合も感染症対策を含めた授業計画が必要となった。さらに実習は学外の実習協力園との調整など異なる課題に直面することになった。

例えば実技・演習系では、学生自身の健康と新型コロナウイルス感染症対策を意識させつつスポーツを楽しむという授業が行われた（健康スポーツⅠ）。また読み聞かせの実践では、学生自らが課題に沿った動画を事前に撮影し、それを学生間で共有し、グループ討議等を行っている。

実習に関しては、実習協力園による受け入れが可能となるための感染症対応マニュアル作成等を行っている。さらに学生に対する現場実習を前提とした実習指導も求められ、授業内容の精選と遠隔授業でのグループワークも取り入れつつ授業が行われた。

新型コロナウイルスの広がりは、2 年間の総まとめである「卒業研究」発表会も大きな影響を与えた。発表会では、教員がそれぞれの授業で用いていた Teams、Stream、Forms を利用して行われた。加えて学生自身が PowerPoint を利用し、音声付きの発表用動画を作成し、それを 1，2 年生、教員間で視聴できるようにし、Forms で質問するという形式で行った。質問に対しては、発表者が後日回答することで共有化を図った。

４．今後の展望

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大によって遠隔授業を余儀なくされたが、結果として感染症対策の徹底を前提とした教員の授業形態の多様化を促し、かつ従来以上に学生への健康上の配慮を意識し、対応することとなった。今後は状況に応じたより柔軟性のある授業形態が提供できるようになったのではないかと思われる。

大学における授業は、たとえ社会状況による多様な制限が生じたとしても、在学生を孤立させず、目指すべき将来像に向けて学生間のつながりを強化しつつ、学生自身の育ちを促すための最大限の努力が求められる。その点を改めて感じ、かつその経験値が高められた一年であったと思われる。

２）短期大学部総合文化学科

学科長　山根繁樹

コロナ禍にあって、総合文化学科の授業への最も大きな影響は、授業そのものの不開講であった。なかでも、海外語学研修プログラムである「総合文化研修計画Ⅱ」「総合文化研修Ⅱ」の不開講は、多くの学生の履修計画だけでなく、学科への入学動機実現を挫くことにもなった。また、実施された授業においても、フィールドワークの計画は、そのほとんどが変更を余儀なくされた。宿泊を伴う計画は中止、活動中の「3密」を回避するため、移動時間や活動範囲の縮小がなされた。これらは、学生が「学外での活動をとおして学ぶ」機会の減少、消滅であったが、学科としてそれらの「学び」の意義を捉え直すことにもなった。

春学期の授業を基本的にはMicrosoft Teamsを使って行うことが決まり、教員向けの研修が行われた。その時点で学科内の教員には、授業でTeamsを使った実績のある教員はいなかった。キャンパス内で教員向けのTeams利用研修が行われたのが4月10日（金)、総合文化学科として1年生に遠隔授業に向けたガイダンスを行ったのが4月14日（火)、2年生向けが4月15日（水）であった。ガイダンスまでのところで各学年全体のチームを立ち上げ、ガイダンス時には目の前でチームに入らせ、会議にも参加させ、Formsでのアンケートにも答えさせた。ちなみに、1年生のアンケートは、「今日の調子はいかがですか？」と問うもので、学生の回答は「とても元気　46%」「ちょっと不安　42%」「はらへった　11%」である。回答総数は26で、その場にいても回答できなかった者が多くいたことがうかがわれる。2年生にも同様のアンケートを行ったが、回答数は23と、1年生と大差なかった。一方、1年生のガイダンス時、筆者は知らぬ間にある学生に向かって「音声通話」ボタンを押していたようで、学生から「何でしょう？」と話しかけられ戸惑った。「音声通話」機能の存在すら知らなかったからである。不安を抱いていたのは学生だけではない。ガイダンスには「遠隔授業で使用するPCまたはスマートフォン」を持参するよう指示していた。正確ではないが、その時点での印象としては、各学年半数以上の学生がスマートフォンでTeamsを利用しているのではないかと思われた。このときの印象が、その後の遠隔授業を行う教員に影響を与えたことは否めない。

遠隔授業が本格的に始まってからの各教員の奮闘ぶりは、それぞれの報告からご推察いただきたい。ここでは、学科教員からの報告をとおしてうかがわれる、総合文化学科における遠隔授業のメリットとデメリットをまとめておきたい。

メリットとして指摘できるのは、意外にも、学生の意見が出やすい面があった点ではないか。もちろん、授業中に気軽に声をあげることはできなかったはずではある。だが、Forms を利用して質問や意見を集めることにより、学生はある程度時間をかけて言葉を綴ったと思われる。そして、他者の意見や質問を「共有」できた点も大きかった。対面であれば、学生個人対教員のやりとりで終わったはずのものが、Teams 投稿欄を利用することによって、他者に開かれたものとなった。それは、学生に、自身の理解や到達を確認したり、自身の間違いに気づいたりする機会を与えた。一方、教員側にも、一人に対する指導が結果として他の学生への指導にも繋がるという恩恵を与えたのである。学科教員の報告のなかに「授業とは対話である」とあったが、遠隔授業は、そのことに気づかせるとともに、思わぬ形での「対話」を生んだのである。ただし、特に 1 年生においては、互いをよく知らぬままに同じ遠隔授業を受けるなかで、質問したり発言したりすることをためらう者がいた。この、2 年生とは異なる条件が、「対話」の質に影響を及ぼした面はあると思われる。

遠隔授業のデメリットとしては、学生の様子が見えないことによる、状態の把握の難しさがあげられる。学生にとって、自身の理解度に不安があったり、疑問点の整理ができなかったりした場合、それ自体を文章化することは難しい。したがって、投稿欄や Forms を利用するにしても、そのような声なき声を掬いあげることができない。対面であれば、不安そうな表情や首をかしげる仕草で表示されたはずの「声なき声」は、文字通りの声なき声になってしまったと思われる。また、そのような「声なき声」は、学生同士の語りによっても補われてきたはずであった。演習科目などで学生同士が教え合う場面だけでなく、不安げな顔同士が首をかしげ合い、理解が追いつかない部分を明確にすることによって声をあげやすくなる、といったことがなかったと考えられる。ただし、これも 2 年生については、学生同士が LINE でやりとりをしながら授業を受けていた場合、ある程度解消できていたようである。

コロナ禍のなか手探りで始まった 2020 年度は、「授業」そのもの「学び」そのものについて振り返り、自問せざるを得ない 1 年であった。そこであらためて気づけたのは、そこにいる者の「関わり合い」が授業だということである。「そこにいる者」が学内者でも学外者でも、そのことは変わらない。できるだけ多様な「者」がいる場を作ることも、学科として心がけたいことである。

なお、遠隔授業に対する総合文化学科の学生の意識調査を実施してもらった。これについては、別稿でまとめてもらっているので、そちらも参照されたい。

３）人間文化学部保育教育学科

学科長　高橋　泰道

１．はじめに

本学科では，教員免許状及び保育士資格取得のための授業科目がほとんどのため，専門的な内容を修得する講義科目だけでなく，実際に体験して学ぶ指導法等の授業が多くあり，対面授業が当たり前としてこれまで行われてきた。この度のコロナ禍によって，令和２年度のスタートは，これまでに経験の無い事態となった。今年度遠隔授業を行うことになり，教員だけでなく，学生にとっても，負担と不安を強いてしまったであろうと推測される。そのような中でも，学生は自分の置かれた環境の中で，最大限の学びを確保しようとし，また教員も最大限の工夫を行い，学生の学びの保障に努めてきた１年間であった。本稿では，教員の取り組みの工夫と学生の様子，及び今後の課題について整理する。

２．教員の取り組みの工夫

４月から遠隔授業が開始され，主に Microsoft Office365 Teams(以下，Teams)を活用してのオンラインでのライブ授業，及びオンデマンドの授業が始まった。学科教員も学生の学びの保障のために，Teams を中心に様々な取り組みの工夫を行ってきた。ここでは，その一端を紹介する。

１）オンデマンドでの工夫

・運動動画，教員自身の作品製作の様子や修得すべき実技を撮影したオリジナル動画等を配信し，各自で活動をする。

・動画を 15 分ずつに分割配信し，学生の集中力を持続できるようにする。

２）オンラインライブでの工夫

・健康チェック，出席確認。Insights 機能による参加確認。

・リアルタイム講義を減らし，投稿・チャット機能による授業進行を行い，学生側の通信負荷を軽減する。

・チャット・投稿機能やホワイトボードの活用により，学生間での意見交換，議論を促す。

・チャネル機能を使ったグループワーク（意見交換，課題作成等）

・プレゼンテーションの閲覧表示（Comment Screen の活用）

・Google アプリ（Google フォーム，Google Jamboard，Google スプレッドシート）の活用による学生同士の共同作業を促す。

・オンラインによる作品の発表，課題の発表

・Microsoft Forms を活用して授業での振り返りを行い，次の時間にその

フィードバックを行う。同様に，Forms 等を活用して，小テスト，感想，「みんなの読後感想文」，授業理解度調査等を行う。

３）その他の工夫

・学生の気持ちを表出させるための写真共有サイト Instagram を使用したフォト短歌プロジェクト，川柳作り，雑談タイムを設ける。

・オンライン授業でのゲストティーチャーの回数を増やす

・Teams での小テスト・レポート等の課題提出を一覧表から成績評価。

・ロイロノート等新たなアプリの活用

３．学生の授業環境と学びについて（学生へのオンライン授業についてのアンケート調査結果から抜粋，調査時期 2020 年 4 月，2021 年 2 月末）

本学では，すでに学生一人一人に Microsoft のアカウントが配布されていたので，他大学に比べて Teams の活用はスムーズに行われた方であろう。しかし，学生の Wi-Fi 環境は厳しく，本学科の学生は，PC 或いはタブレットを所有している学生が半数に満たず，携帯に頼る状況であり，授業を受ける環境としては，不十分であったと言えよう（4 月時点，回答率 73.4%）。また，教員の方も遠隔授業が不慣れな教員も多く，授業の進行に支障をきたす場面も見られたであろう。

そのような中でも，1 年間を通じて学生の遠隔授業の満足度（2 月末時点，回答率 49.2%）は，「満足，ある程度満足」が 43%，「普通」が 63%であり，思った以上に，遠隔授業での役割は果たせたのではと考える。また，遠隔授業の良かった点としては，一番に「オンデマンド及び録画機能により，分からない所を何度も見直せる」ことが挙がっており，「動画やパワーポイント画面や配布資料が見やすい，声も聞こえやすい」「資料を保存できて繰り返し見直せる，復習できる」等も挙がっていた。また，「感染の不安がない」「通学時間を短縮できる」等も挙がっていた。困った点としては，一番に「友達と会えない」ことが挙がっており，その他，「通信が不安定」「実技系の科目についての学び，技能の修得が不十分」等が挙がっていた。

４．今後の課題

今年度は，これまで当たり前であった「学生が大学で対面で学ぶ」ことができないコロナ禍の中，どのように大学教育を充実させるのかを工夫し，努力する教員の苦悩の 1 年間であった。しかし，その中で，ＩＣＴ活用の追い風を受け，新しい学びのあり方を見出せたことがせめてもの救いであったかも知れない。今後，ポストコロナの中で，今年度の成果を生かし，更なるよりよい授業のあり方を模索し，新たな学びのあり方を創造していきたい。

４）人間文化学部地域文化学科

学科長　マユーあき

コロナ禍の中、大学の学びを確保するために本学教員が初めての遠隔授業に取り組んだ 2020 年度が終わろうとしている。昨年 4 月の頃を振り返ると、地域文化学科にも ICT によく習熟し、技術的にも心理的にも遠隔授業へとすんなりと切り替えができる教員もいる一方で、筆者を筆頭に、不安を抱えながら、恐る恐るこの新しい授業スタイルへの扉を開けた教員も少なくはなかった。ICT を使いこなす力量には教員によって差があるのは否めない。しかし、そうであっても、授業取組の報告からは、どの教員も遠隔授業を行う中で学生の理解を深めていくにはどうしたらいいのかを常に考え、試行錯誤を繰り返していたことが伝わってくる。

ここでは、まず、教員の取組報告から遠隔授業の利点と課題をそれぞれ抽出してまとめる。次に、遠隔授業の経験から得られた教員の気づきにも言及し、最後にこの新たな授業形態の今後を簡潔に展望してみる。

（１）遠隔授業の利点と課題

【利　点】

●1 つのプラットフォームがもたらす便利さ

・授業はもとより、資料の配布、課題の提示と回収、学生への連絡がすべて 1 つのプラットフォームでできる点が非常に便利であった。

・グループでの調査活動において、調査過程や結果の分析と取りまとめを行う際に Teams 上でファイル共有ができるため、学生間の共同作業が効率的にできた。

●授業録画の活用

・毎回のリアルタイムでの授業を録画して受講者に公開することで、受講した学生は復習のために、また、やむ負えない理由で欠席した学生には欠席した回の手当として活用させることができた。

●遠方からの外部講師の招聘が容易

・遠方の専門家を外部講師として授業に招くことができ、学生の視野を広げ、技能習得に活かすことができた。

●双方向性を確保する機能やアプリケーションの活用

・特に講義形式の授業では、Teams「チャット」や Forms で学生から質問やコメントを送信させ、それに対して教員が個別または全体に対してフィードバックすることで、双方向性を確保することができた。

・オンラインで共同編集できるホワイトボードの Google Jamboard を使い、

対面授業でのグループワークと同等の学生同士の交流の機会を持たせて、話し合いを修正・深化させるきっかけとすることができた。
・Class Notebook(オンラインで共同編集できるドキュメント)を使って、ワークシートに学生が記入している状況を確認し、適宜、個別に指導・助言を行うことが可能になった。

●学生の ICT 習熟が向上

・遠隔授業を通して学生の ICT への習熟が進んだことにより、学生が調査のためにオンライン会議システムを利用して地域の方にインタヴューを行うことができた。また、Forms を使ってアンケート調査を実施したことで一定数の回答が得られ、分析まで進めることができた。

●質・量ともに充実した学生のコメント

・教員が一人ひとりの学生に語りかけるような授業スタイルが影響しているのか、それともコメントを記入する時間に余裕があり、学生がじっくりと取り組んだことが理由なのかはわからないが、Forms で受信する学生のコメントは対面授業に較べ、質・量ともに格段に充実していた。

【課　題】

●学生の表情が見えない中での授業の難しさ

・学生の顔を見て、その表情を手掛かりに説明の仕方や授業の進度を調整することができない遠隔での講義は難しい。また、学生の反応が見えないため、教員が発言を求めて学生を指名することにもやりにくさを感じた。

●文字に弱いデジタル

・第二外国語の授業では文字の読み書きを学ばせることが中心となる。しかし、履修者全員がタッチペンとタブレットを所有してないので、学生に文字を書かせ、必要に応じて教員が直接修正をする文字指導ができなかった。
・漢文を教材とする授業では簡単に打ち出せない特殊な文字が出てくるため、前もって時間をかけて課題文をすべて打ち出しておき、それをコピー＆ペイストする形で提示しなければならなかった。

●視聴が後回しになるオンデマンド型授業

・リアルタイムほどの時間の強制力がないため、課題の締め切りに余裕を持たせるほど学生が視聴を後回しにする傾向が見られた。視聴に関わるルール作りの必要性を感じた。

●リアルタイム授業時の問題発生による時間ロス

・特に教員が Teams の操作に慣れるまでは、小さなトラブルに対して迅速・的確に対処することができず、授業時間のロスに繋がった。

●リアルタイムでの試験実施の難しさ

・リアルタイムでの論述試験では、学生の通信環境が安定しているかどうかに気を使った。また、時間を過ぎても答案作成を続けている学生もおり、厳密に試験時間を管理することが難しかった。
・記述式の試験を行ったが、持ち込み可とせざるを得ないため、試験準備に時間と労力を費やした学生とそうでない学生との間にそれほど差がつかず、前者の学生の中には不満に思った者もいたかもしれない。

●学びの成果の振れ幅の大きさ

・授業全体を振り返って書いてもらったコメントでは、多くの学生がしっかり自分の意見や感想を書いていたが、義務感だけで書いたようなものも散見された。遠隔授業は、対面授業よりも、学生の意識次第で学びの成果に大きな振れ幅が出てくるように思う。

●学生自身の情報リテラシーへの依存大

・オンライン授業による変化を受け入れ、うまく適応することのできた学生も多いが、そうした変化に取り残されがちな学生へのケアは一層重要になってくる。

（２）教員の気づきと今後の展望

遠隔授業の経験によって教員は様ざまな気づきも得たようだ。ある教員は、対面であれば教員が行う作業も、遠隔では基本的に学生自身が行う必要があることを念頭に置き、丁寧にわかりやすく学生には伝えなければならないと指摘している。遠隔で学生への配慮を深めた経験は、対面授業の質の向上にも繋がると、その教員は感じている。

学生に声とことばを届けることに対して対面時よりも意識的になったという声もあった。ラジオの DJ のような気分を味わったとユーモラスに語る教員や、かつて放送部で校内放送をした経験を思い出したという教員である。また、授業での自分の話し方を再考する契機となり、反省にもなったという教員もいた。ICT を駆使できる遠隔授業においても、やはり核となるのは「ことば」だ。学生だけでなくわれわれ教員も、ことばについて、ことばを鍛えることについて、あらためて考えるきっかけを与えられたと言える。

最後に、ほとんどの教員はコロナが収束した後も、遠隔授業の利点を活かして対面授業と併用していきたい・していくべきだと考えている点に注目したい。遠隔授業の「強み」を味わったことが、対面授業だけで作り上げてきたこれまでの教員それぞれの安定した授業観に良い意味で揺さぶりをかけたのであろう。新たな授業のあり方を模索する可能性を、遠隔という授業形態の中に積極的に見出していこうとする意欲がはっきりと見えてくる。

６．おわりに

短期大学部長　梶谷朱美

「∞ 無限大」

今、私たちは新型コロナウイルス感染症対策のため自宅学習をしています。みんなが初めてのことだらけで不安が大きいのですが、この状況だからこそクラスの仲間や先生方との繋がり、またお世話になる実習先の先生方や子どもたちなど、これから出会う人との関わりや繋がりを大切にしていきたいと思っています。また、私たちがクラスの仲間や先生方との繋がりの中で生きており、その繋がりが当たり前ではないという事を自覚し、繋がりを大切にしていかなければならないと強く思います。

そして、人との繋がりの大切さや有難さを忘れかけたとしても、このテーマを思い出すことで、人との繋がりを再び意識し、周りの人への感謝を忘れずに保育学科での日々を過ごしていきたい。また、一人一人が自分の目標や夢に向かい成長していく中で無限の可能性を秘めていたいと思います。

（保育学科１年生 K・H　学年テーマ設定の理由）

保育学科では、学生に学年のテーマを設定させ、学生同士の学び合いから互いの育ちを引き出し、保育者としての資質を高めさせたいと考えている。今年度の１年生のテーマは前述の「∞無限大」である。コロナ禍で不安を感じながらも保育学科の 2 年間の学びを想像し、さまざまな人との繋がりから成長していきたいと願う１年生の強い意思と決意を感じることができる。

本論文は、このような学生のために対面授業の是非が問われるような危機的状況の中において新たな知恵と工夫をこらした教職員の挑戦の記録である。また、松江キャンパス全体の新型コロナウイルスとの戦いの記録でもある。

具体的な内容は前述の取組のとおりだが、冷静に状況を分析しスピード感をもって取り組んだ教職員のオンライン操作の研修をはじめとして、教員の専門性をいかした授業方法の工夫や教科書の作成など、ウイズコロナやアフターコロナに対応できる本学の新たな地平を拓く教育研究活動が生まれた。

「作品は自分の中から生まれるものではなく、人との繋がりの中できっかけが与えられる」。この言葉は、2020 年の NHK 朝ドラ「エール」のモデルとなり、昭和の戦時を生き抜いた作曲家「古関裕而（1909 年-1989 年）」の台詞である。

本学の強みである「近い繋がり」から、コロナ禍において新たな取組が生まれ、教職員はどのような変化にも対応できる自信が深まったのではなかろうか。この難局を乗り越えた先に、本学の独創的な研究や斬新な教育方法がより一層展開される未来が見える。

最後に、教職員の皆さまの真摯な取組に敬服するとともに、これまでにないご苦労やご負担をおかけしたことを想い心より感謝するものである。